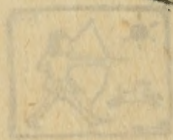
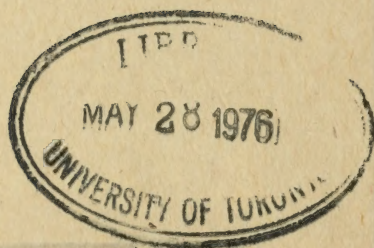
日本歴史文庫

# 日本近代史學史

大久保利謙

白揚社版

宮内省圖書寮所藏

山海輿地圖説　　新井白石書寫

# 序

本書に筆を起した近世の初期、又擱筆をした幕末明治初期は日本歴史の上で夫々劃期的な時代である。斯樣な時期に於いては史學においても、又その史觀や研究法が革新されて居る。爾來今日に至る迄史學は駸々として發達し來つた。政治史・經濟史・文化史と夫々時代の流れによつて史觀の傾向に起伏があつた。而して現在は東西兩洋共に未曾有の動亂の渦中にある。過る歐洲大戰以來の列强の勢力均衡が再び分裂し、世界秩序は今後如何に再成せらるゝや遽に豫測を許さない。併しこの動亂と新秩序の成立は必ず歷史の再檢討を呼び起し、史觀の革新が起るであらう。そして現代史學の檢討は必ずや過去の史學に對する反省を促すであらう。

本書は明治初年の我近代史學の勃興を中心とし、序說的立場からその成立に至る主潮を跡づけんとした。與へられた紙數の關係上素描に過ぎない。幸にして文中に掲出した參考

論文を見ていたゞけばこの不備は頗る除かれると思ふ。

それから第二編の江戸時代に於ける西洋史研究の發達概觀は管見に於いて從來あまり研究がない樣である。私の蒐集し得た材料によつて系統を立て、少しく分析を試みた。資料の蒐集に就いては多少苦心をしたが、幸ひ諸家の厚情に惠まれ、豫定せるものは一通り目を通すことが出來た。尙遺漏も多いと思ふから今後とも一層蒐集を繼續して完璧を期したいと思ふ。若し諸先輩の垂示を得ば幸とする所である。この編は不備が多いと思ふが、就中當時の飜譯西洋史書の原本調査を省略したことは豫め御寬恕を乞はなければならない。この方面の研究は本來原據となつた蘭文史書の檢討を缺くことが出來ない。然るに江戸時代の輸入蘭書の調査は一般洋學史の上でもあまり行はれて居ない。これはその逸散等の結果中々困難を伴ふ爲めであらう。飜譯史書に就いても同樣で、譯書に明記なき等の爲め檢索に困難を伴ふことが多い。山村才助や箕作阮甫の著譯にしてもその原據本の精査を必要とするが、速急には筆者の力を越へた仕事である。自ら顧みて記述甚だ搔隔の感なきを得ない。

本書全體を三編に分つたが、その記述には頗る均衡を失した點もあると思ふ。第二編は新資料の紹介に勉め、多少繁雜な事にも及んだが、これ又一部の識者の叱正を期した譯である。

宮内省圖書寮・內閣文庫・無窮會神習文庫・大槻文庫主大槻茂雄氏・男爵箕作祥一氏・醫學博士藤浪剛一氏・久米四三彥氏・蘆田伊人氏・尾形鶴吉氏等より貴重資料の提供を受けた。其他諸家の研究より益を受けた所は頗る多い。本文中並に卷末に註記して置いた。刊行に當つて厚く御禮を申上げる。

昭和十五年初秋

双榎堂書屋に於て

大久保利謙

# 目次

序論

日本歷史文庫

# 日本近代史學史

大久保利謙著

# 序論

我國に近代的な歴史學が形作られたのは凡そ何時の頃であらうか。この問題は本書の稿を進めるに際して先づ定めて置かなければならないことである。ところでこの問題を考へるためには、更に近代的な歴史學とは何を指して言ふかと言ふ問題が解決を要求して來る。併しこの近代史學の意義如何と言ふことは非常に大きな問題で廣く史學發達史の上から解せられなければならない。

歴史的な叙述は古代以來我々は數多く持つて居る。西洋に於いては、ギリシャのヘロドトス・ツキジデスより中世を經て近代に至る迄夫々の時代が夫々の型態を持つて居る。併し新しい意味の歴史學とは十八世紀の啓蒙時代を經た後十九世紀以降の産物である。十九世紀は所謂歴史の世紀と呼ばれ啓蒙思想に對して歴史主義の思潮が起り、歴史學は諸學に王座を占める時となつた。この時代から又史學の方法論も著しく發達して史學研究が周到な科學的用意の下に爲されると言ふ風になり、科學的方法を備へた一個の學問として形成

されるに至つた。歴史の爲めの歴史を標榜して史學の獨立の爲めに鬪つたランケは、この歴史の世紀の幕を開く偉大な業績を殘した。世界史の概念を樹立して史學の自己規律を成立せしめた。この史學の獨立は更に十九世紀の後半に至つて、一方に自然科學・實證主義思想の影響を受け自然科學的史學を生み、更に又唯物史觀を生んだと共に、又一方新カント派に於ける文化科學の概念が樹立され歴史的方法と自然科學との區別が喧しく論ぜられた。斯くて十九世紀以降の史學思潮は近代の複雜な思潮、目覺しい物質文化の發達、政治の動向等によつてその變轉が甚しい。今日は又この歴史主義に對して懷疑が呈されて居ると言ふ。併し斯樣な現下の諸問題を玆に述べるのではない。本書の考察は少しく遡る。

私は問題の重點を明治の初期に置く。我が明治の初期は封建社會組織が内外の情勢によつて後退し、資本の力が擡頭して舊社會を蠶食して社會機構を一轉せしめた。この社會の轉化は又開國以後の輸入思想によつて拍車をかけられ、封建思想の破壞が全面的に行はれた。歴史學の世界に於ても明治初年から十年代にかけては實證主義的思潮の影響を受けて所謂文明史觀が新思想として横行し、バツクルなどの自然科學的史學が江戸時代の儒教的歴史學に挑戰した。この自然科學的な歴史思潮は、觀念的な絶對概念に支配された江戸時

代の史學を一度解放し、それより封建的の殘滓を洗ふ上に大きな役割を爲した。かくて漸く史學の獨立の端緒が出來た所に明治二十年代に至つてドイツの歷史學が輸入され玆に史學の新生面が開かれたのである。一個の學問として歷史學は明瞭に生誕の喜びを得たのである。このドイツの歷史學はランケ風の歷史學であつた。

ランケの史學は十八世紀啓蒙時代の目的論的の史學に反逆して歷史の爲めの歷史を主張した。これによつて史學は偉大な發展をした。嚴密な史料學・方法論が形作られた。この綜合的な歷史學は當時の我日本が學び得る爲めにはその程度が高かつたかもしれない。併し又新たに出發しようとする我史學界にとつては最も良き敎師であつた。一度實證主義的の文明史觀によつて前進の緒についた史學は更にこの巨大な學風によつて確實な內容と方法とを學んだのである。ランケの出た十九世紀初頭のヨーロッパと我明治初期とは必ずしも同じ狀態であつたとは言へないであらう。併しランケが十八世紀の史學を批判した精神は、我明治初期の史學思想が封建史學の破壞に向つた所と互に相通ずるものがある。歷史を敎化の具より解放して史學の獨立を計つた精神は、ランケ史學によつて與へられたものが大かつたに違ひない。さればこの時代にドイツの成熟した學風が輸入されたことは洵に

意義深いものと言はなければならない。我が近代の歴史學生誕を文明史觀よりランケ風史學の輸入に置いて考へることはこの點より動かし得ないことである。

由來西洋の學問はギリシヤ以來の傳統を持つ。西洋近代の歴史學も亦この永き傳統の裡に徐々に發達し來つたものであるが、これを日本の場合に見る時は、我古來からの一つの流れに於いてのみ解することは出來ない。我文化が常に外來文化との複雜な交流の裡に發展し來つた爲めに史觀の發展も叉外來文化との關係を考へなくては理解し得ない。卽ち近世に於ける支那風の史學、この近代史學の形成も亦外來史學の影響を除外しては考へられないものである。極端に言へば我近代史學は西洋近代史學の輸入としてこれを理解することもあながち不當なことではない。併し唯これを輸入とのみ斷定してしまふ事は學術史として未だ至れるものではない。これを輸入する爲めには充分な受け入るべきものがなければならない。西洋に於いて永い傳統の裡に漸くたどり着いたこの學問を受入れる丈けの素地が用意されて居らなければならない。そこで明治初期の近代歴史學の成立を充分に理解する爲めには更に遡つて近世の歴史學發展の跡を回顧する必要がある。

我が近世の歴史學は大體に於いて支那風の史觀に規律され、且封建的教學の下に立つて

居つた。史的認識の如きも種々の限界を附せられ、決して自由活潑のものではなかつた。封建社會の支配機構と密接な關聯を持ちその代辯者としての役割を果した。批評的精神に乏しく、認識の範圍が狹隘であつたことは學問としての自律性の缺乏によるのである。本書に於いてこの點を分析して見たのであるが、必ずしもそれによつて近世史學の價値を低く評價する必要はない。それは結局斯くの如き姿であらねばならなかつたものである。これは獨り歷史學のみでない。近代個人主義の發生以前に於いては總ての學問が上からの指導力に依存する外ない。斯樣な史觀を生んだ所にその史觀の價値と意義が存する。若し今日「歷史の爲めの歷史」に揣らない人々があるとすればこの近世の目的史學必ずしも看却し去るべきものではないであらう。併し私は之等の價値判斷を茲に展開しようとするのではない。暫らく古文獻を涉獵して過去の歷史學の流れを如實に見て行きたいと思ふのである。

日本に於いて歷史學或は歷史學的の研究が起り始めたのは近世以來のことであらうと思ふ。これは日本の史學史の一つの特徴を爲すものである。もとより歷史の著作は決して近

世に始まつたのでなくて遥か上代に遡つて居ることは言ふ迄もない。その劈頭を飾るものとして「古事記」があり「六國史」がある。更に之より先きに聖德太子の時代に「天皇記」。「國記」等の撰修の行はれた事が傳へられて居る。「六國史」の如きは特に官撰の正史として作られ、形式其他支那の修史に倣つたものであつた。又「續日本紀」や「日本後紀」の上表・序文等には支那風の史に對する觀念が書き並べられて居るが、支那風の史或は史官と言ふ樣なものは日本と支那との政治事情の相違からそのまゝ移し難つた。

故に日本に於ける歷史的の意識の起原は支那風の史の觀念によるものではなく、寧ろ物語、即ち「古事記」に言へる舊辭、具體的に言へば「古風土記」等に殘る說話の形で蓄積された。これが平安朝に至つて物語風の歷史として形成された。「大鏡」などが日本風の歷史的述作の始めと言はれる。かくて歷史的意識は回顧的の氣持として現はれてくる。その裡に過去に對して批評をするとか、又は價値判斷をすると言ふ事が見えてくる。即ち過去を歷史的系列として一つの立場から整理すると言ふ傾向が見ゆる。其所に歷史的の意識が認められるのである。併し其處には未だ今日我々の考へる樣な歷史的の研究、又その作業と言ふものは行はれて居ない。極端に言へば記憶と主觀の發展と言ふに過ぎない。この意

味での歴史の研究作業は近世に始まつた。支那風の正史の必要が痛感され、その撰修の準備として先づ資料の蒐集が始められ、その校訂や價値批判が試みられ、史料學的な研究が近世を通じて蓄積され、日本として誇るべき業績が爲されたのである。そして素朴な形で古文書學や史學の研究法が形作られて居るのである。そしてそれが明治初期へと引繼がれこれが西洋の近代史學を受入れる素地を提供した。本書に於いては斯樣な見地から明治初期の近代史學形成の序說として近世歴史學の主潮を見てゆきたいと思ふのである。

## 日本近世史學の諸系統

前に一寸述べた樣に我近世初頭からこの歴史學と言ふものが、形成される機運となつた。その第一の功勞者は林羅山である。而して羅山がこの歴史學的研究を樹立するには支那史學の力を借りた。彼は實に藤原惺窩の衣鉢を嗣いで近世儒敎の建設者となつたが、この儒敎の一翼として支那史學を採り上げたのである。この羅山の歴史學が林家に傳へられやがて「本朝通鑑」として結成した。更にこれと並行乃至は對立の形で水戶藩の「大日本史」修撰が行はれた。この二大修史事業は實に近世の史學界を代表する金字塔である。こ

れによつて我近世史學は磐石の重きを得たのである。而してこの兩者は支那史の形式を襲ふ儒教的の系統に屬するものである。この二大史學に對抗し得るものを求むれば中期の新井白石であるが、この白石の歴史學もやはり儒教系の裡に入れてよいと思ふ。その後に出現した賴山陽を始め、大小の歴史家は大體に於いてこの系統の亞流である。卽ち近世史學の中心を爲すものはこの儒教系統の、或は支那史學系統の歴史學と考へて宜いと思ふのである。

この儒教系統に對して發生せるものは、國學系の歴史學である。この發生の過程は儒教對國學の關係の縮圖である。その一般的の關係から演繹して先づ大過はないと思ふ。この系統は最初國文學乃至は文献學的のものとして擡頭し、更に古道說が成立し、この古道說の研究法として古代史の研究が始められた。本居宣長に於いて古代精神の發見の爲めに我古典の科學的研究が行はれ、それに伴つて歴史的の研究が開かれた。そしてその漢意を斥ける立場から儒教的な史觀が排擊され、緻密な考證的研究が行はれた。これが伴信友・平田篤胤、更に幕末には矢野玄道などに傳へられたが、儒教系の史學には一步後れ、その發生時代には前者は既に一應の型態を整へて居つた。この系統は一面考證史學として著大の

發展を爲し、幕末から明治初期にかけて多大の人材を輩出した。そして明治初期には寧ろ儒教史學の殿堂の學をまする有樣であつた。この派の業績の一たる塙保己一の「群書類從」の如き現代に於いても不滅の價値を有する。又その考證的研究は西洋の史學研究法の輸入に對して充分の素地を與へるに多大の貢獻があつたものである。かくて近世國史學の系統は大別して右の儒教系と國學系の二系統に分ち得ると思ふ。

我國に西洋の史學が輸入されたのは先づ明治初年と見てよい。だから江戸時代には西洋史學系統と言ふものは一派を建てると言ふ所迄には至つて居ない。唯この時代に輸入された西洋知識に伴つて西洋の歷史に關する知識は段々入つて居る。併し史觀そのものは當時の支配的傾向であつた支那風のもので、唯それを西洋の歷史に投影させたものに過ぎなかつた。所がこの西洋歷史知識は西洋地理知識や天文學知識、その他の科學的な知識と密接な關係を持つて居り、その點で頗る異色があつた。更にこの西洋史知識は當時の日本人の世界觀を如實に反映して居る點で今日又我々の反省の資料となるものである。之等は殆んど今日顧みられない程素朴なものである。併し當時の人々が僅少の飜譯的知識や風說を頼りに曲りなりにも西洋史觀を樹立して居る。言はゞ鎖國日本の西洋史觀である。この點に

於いて史學史として採り上げて見る價値があるものである。のみならず幕末から明治初期にかけて彼の文明史觀の發生には先驅的な役割を爲して居つた。この意味で近代史學の形成に對して重要な意義を持つものである。

本書に於いては第二の國學系統に就いては紙數の關係等より僅かに觸れたに過ぎない。幸ひこの部門に就いては村岡典嗣氏の「史學者としての本居宣長」。竹岡勝也氏の「史學者としての平田篤胤と伴信友」（共に「本邦史學史論叢」所收）等があるからこれを參照せられたい。そして專ら他の二系統に就いて概述した。卽ち前者は近世史學の主潮であつたと言ふ意味に於いて、又後者に就いては明治初期の近代史學、特に文明史觀の源流を爲すと言ふ意味に於いて採り上げたのである。

# 第一編　儒教系の歴史學

# 第一章　近世歴史學の成立

我國に於ける歴史的の考へ方とか、又歴史の研究法乃至編纂と言ふ樣なことは、支那のそれ等の影響なくしては考へられない事は、茲に再說する迄もないことであらう。併しこれは歴史だけの場合ではなく一般の文化現象に共通のことで、歴史の場合は寧ろ一般との關聯の下に理解されなければならないことである。勿論日本の歴史事實は支那のそれとは甚しく違つて居り、その特異性も看却してはならない。併し日本人の知識には早くから支那思想が入つて居り、支那風の考へ方と言ふものが深く喰ひ込んで居つた。そこで日本人が自らを反省する場合でも一方に支那的の觀念を豫想しつゝ考へる場合が多い。我國の特質を考へる場合でも、支那の場合と如何に違つて居るとか、常に彼我を對照にして考へる。即ち日本の歴史を考へる時にも決して支那的にのみは考へないであらうが、併し支那で出來て居る史觀と言ふ樣なものを一方に置いて組み立てられて居る場合が多い。例へば歴史上の問題で第一に浮び上る國體論や王道覇道の辨などは近世の史學界で盛んに論議さ

れたものであるが、これなどは支那のそれ等の思想をどう解釋するか、日本の場合に當てはめて妥當なりや否やと言ふことが中心なのである。日本の特質を考へるにも支那に對して如何に特異性があると言ふことから出發して居る場合が多い。

中世史學を代表すると「愚管抄」や「神皇正統記」の如きも支那の歴史觀の影響は色々と指摘される。「愚管抄」の裡にはその歴史的發展の原理として道理と言ふことが說かれて居る。この道理は決して單純なものではない。これは今日で言ふ歴史的發展の法則と言ふものではなく寧ろ歴史の上に浮沈する人々の行動への道德的批判の目標である。これは支那の史觀、例へば「左傳」などに見ゆる考へ方で、所謂歴史を鑑戒の具とする考へ方である。「神皇正統記」に於いて、そこに強く働いて居る根本主張たる正統の論はもとより我國體上の動かし難い事實を實質とする。この點に疑ないことであるが、これを構成する立論には餘程支那の歴史觀の影響があるとしなければならない。

津田左右吉博士「愚管抄及び神皇正統記に於ける支那の史學思想」（本邦史學史論叢）

併し又必ずしも支那思想の影響のみと斷じ去ることは出來ないので、例へば國文の「榮華物語」や「大鏡」の如き獨特の樣式があり、「愚管抄」や「神皇正統記」の場合でも單に

支那正統論の影響とのみ考へられないことは津田博士の言はれた如くである。

近世に於ける史學界は中世末期の後を受けて復興されたと言つてよい。「神皇正統記」以降中世の後半期には特に指を屈すべき著作は見られない。騷亂の世一般文化活動の沈滯と混濁と共に歴史意識は低下し宗教意識の中に吸收されて居つた。そして儒佛と習合され歴史的事實は忘却されて觀念的なもの丶跳躍が盛んであつた。古典の研究は盛んであつたがその歴史性は忘れられ、神道の聖典として解釋されて居つたに過ぎない。歴史知識の缺けて居た事は當時の知識階級たる僧侶に於いてすら甚しかつた。「善隣國寶記」の著者周鳳が「六國史」や「吾妻鏡」を知らず、北條氏を法條と書いたと言ふ例もある。この他にもかゝる類例が少なくない。（平泉澄博士「中世に於ける精神生活」四〇六頁以下にその例が調べられてある。）斯様な有樣であつたから、當時の學問の傾向は一條兼良などによつてよく代表されるもので、その「日本書紀纂疏」の如き、書紀の註釋書であるが、實はその神道論を述べたものであつた。この時代に「日本書紀」は特にその神代卷のみが非常に尊重されて註釋書も澤山出て居るが何れもかゝる傾向に在るのである。

中村光氏「中世に於ける日本書紀の研究」（本邦史學史論叢）

この時代が歴史知識の甚しく缺乏せることは否まれない。併しそれは又別個の意味から考察せらるべきものがあるのである。

其處に又中世史學思想の特質を見出さなければならないものであるが、歴史的研究と言ふ方面より見る時は、甚しく歪曲されたものであつたことは爭はれない。慶長の勅版「日本書紀」が「神代卷」のみである事も中世の名殘りであらう。

右の樣な中世史學の傾向は近世初期の儒者によつていたく非難されて居る。そしてそれは日本の歴史が新しく儒教的、即ち支那史的の形式の下に再編成される事を意味するものであつた。この傾向がとりもなほさず、近世史學の成立を意味する。これが一般の思想界の趨勢と關聯の下に爲されたことも又言ふ迄もない。

凡そ近世社會の成立は社會全般が――從つて又思想に於いても同一であるが――宗教的より現實的への轉化を意味すると共に、又公家的より武家的への中心の移動を示すものである。更に又中世の地方的武家より近世の武家政權確立への轉換も其處に在つた。近世史學の成立とはこの新政權成立の歴史觀への反映であつて、かくてこれから武家、特に德川氏中心の武家史の體系が形成されるのである。

近世の思想の主潮を爲すものが儒教であつたと言ふことは周知の事である。併し儒教そのものは必ずしもこの時代に至つて始めて輸入されたものではなく上代に迄遡り得る。當時は漢唐訓詁の學風が學ばれて居つたが、その後鎌倉時代に至つて宋學が入つたことは我儒學史の上で一期を劃する。それからはこの宋學、特に朱子學が主となり、以つて近世に入つたのである。

幕府が儒教、特に朱子學を官學としたのは中期以後の事であつたが、その傾向は近世初期に萠して居つたと言つてよい。この儒教の擡頭は勿論幕府、其他權力者の支持と言ふことが大きな原因であるし、又それを可能ならしめた社會的又思想的の理由もあることである。これが擡頭すると共に思想界はそれを中心として新しく形成された。儒教と佛教・神道との關係が從來の均衡を破られ、對立論爭が生じ、これが近世思想史上に活潑な推進力を與へた。儒教はそれ自らの發展の爲に佛教を批判し、又神道と結んで儒家神道と言ふ一派を爲した。中世の佛教と習合の神道が近世化する爲めの過程としてそう言ふ形態を生んだものと解せられる。更に朱子學の外に陽明學の輸入も見た。又古學派は朱子學の批判か

ら發生し、この兩者は近世儒林に於ける二大主潮として對立して居つた。近世儒教はかくして初期以來頗る盛んな活動を爲し、各方面に力强い影響を及ぼした。當面の問題である史學思想と歷史編纂も又この例に漏れなかつたのである、

前述したように上代以來日本の歷史思想は支那思想と深い交渉の下に展開して居るが、近世に入ると儒教の位置の更新と共にこの關係も又一層の展開を爲し、儒教史學がやはり主流となつて居つた事は爭はれないことであつた。

近世史學は林羅山より始まつた。彼はこの始祖たるの名譽を負ふものである。それと共に又中世史學より近世史學への過渡的傾向を具身して居る。羅山に尋いで、山鹿素行・熊澤蕃山・貝原益軒・荻生徂徠等によつて近世史觀は儒教的體系の裡に搆へられたのである。更らに又その具體的なものとして「本朝通鑑」や「大日本史」が成つた。そこで近世史學の主流を考察するに當つては之等儒家の史學思想を檢討しなければならない。

儒教の學問は經學を中心とし、その次位に史學があつた。所謂經史と汎稱せられて居つたものである。「學者ノ業トスル所ヲ世ニ經史ト稱スルハ經學ニ次テハ史學ト云フコトナリ。是實ニ不易ノ論ナルベシ」(江村北海「授業編」)そこで學習に就いても「凡讀書之法、經

爲レ本、史次レ之、子集又其次也其用功輕重、本末次序須如此」（貝原益軒「愼思錄」）と言ふ順序があつた。而してこの經學と史學の關係は「經裁レ道者也、史以レ道裁レ之者也」・「讀レ史須二以レ經爲一レ斷」（伊藤仁齋「童子問」）であり、卽ち經學の原理によつて史を解すること、換言すれば儒教倫理によつて歷史の發展を論斷することであつた。これが春秋の筆法と言はれるものである。卽ち學問上に於ける史學の地位は經學の次位に位する。一種の應用經學と見做して宜い。斯樣に史學の自律性は認められず道德や政治に奉仕するものであつた。國家の治亂興亡も支配者の行動や德性によつて動かされるものと解されて居つた。朱子の綱目史學はこの立場が最も鮮明であつたので、我近世にはこの「通鑑綱目」が甚だ尊重されて居つた。（中村久四郞博士「朱子の史學特に其資治通鑑綱目につきて」讀史廣記所收）近世儒林には周知の如く朱子學派・陽明學派・古學派等の對立があつたが、その見解の重點は經解の問題に在り、史觀に於いては特別な相違はない。更に又當時の史學の根據となつたものに支那正史があり、それが又史學思想を規律して居つたし、又歷史の形式ともなつて居つたから、史の理想として支那正史が考へられ、國史も又それに從つて新たに組織立てられたのである。これ等は「本朝通鑑」や「大日本史」となつて實現されたのであるが、當

時の儒家の史學思想を見ると、支那史を理想として日本の歴史を盛んに批判して居る。以下少しく代表的學者の意見の片鱗を窺つて見よう。

山鹿素行は古學派の祖として、近世初期の代表的學者の一人である。又史學者として偉大なる存在であつて、獨特な國史の組織も行つて居る。更に支那史學に對する造詣に至つては頗る博大で、「山鹿語類」三十五卷史類の部に披攊されて居る。この知識と、又彼自らの識見とを以つて前代の日本史學に對して鋭利なる斷案を下して居る。即ち本朝歴代の史として聖德太子の「國記」・「古事記」・「日本紀」等の名を擧げ、日本紀を以つて史の宗と爲すべしとして居るが、その後は「本朝太乏二文書一又缺二家記一。故古來紀傳名誌闕、無レ可レ稽レ閲、且聖學湮沒、而人々多信二異端一喜二奇說一、學者富二詩文一無三明經之實一、史傳皆不レ詳二其綱目一、曾不レ知二大義一不レ達二春秋之意一也、況史斷史評、無レ可レ見、何況二褒貶賞戒一」と言ひ、「治要篇」に就いては編年敍事、標節斷也と指摘して居る。そして史に載すべきは君道・臣道・民政・地制・定法・時勢・災祥・器物の用・天下之大義を擧げ、史を作る者はこの凡例を知らなければならぬと言つて居る。そして史の理想は當世の事を明記して隱す所なくその言行始終を書くべしと論じ、古史たる「春秋」と「左傳」を稱揚して萬世史書

の淵源と爲し、後世では朱子の「綱目」を擧げて居る。卽ち支那史の理想に依つて國史を批判し、この立場から國史を再構成せんとした。彼は又獨特の日本主義を史學上に發揚して居るが、その一面に我前代の史學に對して鋭利な批評を爲して居るのである。

次に朱子學者では山崎闇齋が朱子の綱目風の學風を最も忠實に受けて居る。明暦三年に起稿された「倭鑑」は未完成に終り、今日その目錄を傳ふるに過ぎないが、「大日本史」と軌を一にし、正閏を辨じ、名分を重ずるを目的とするものであつた。（内田周平氏「崎門學者と南朝正統論」參照）貝原益軒も朱子學者として、史書では朱子の「綱目」を以つて理想とし、「日本には中世以後正史なし、野史もまれにして詳ならず、此故天下の大事だに正しくしるしたるふみなければ、野史に少ししるしたるにては、其事詳ならず實否うたがはし（中略）正史なく、國記なき事うらめし、日本は諸國にまさりたる上國なるに、此事かけたる事は異國人のきくもあさまし」（文訓）と言ひ、やはり支那風の正史を以つて史のあるべき理想的の形と考へてその見地から國史を批評して居るのである。この樣な考へ方は儒者として或は當然であるかもしれない。特に中世の佛教と習合せし歴史は素行をして言はしむれば異端奇説を喜ぶものとして極端に排斥せられなければならないものであつた。

朱子學者が朱子の史學を受けて居ることは當然である。古學派の素行・仁齋の史觀も大體朱子の史觀には服して居つた樣である。然るにこれに反對の意を表して、稍主張を異にしたのは荻生徂徠であつた。徂徠は史學に於いても古學的の考へ方であつた。即ち朱子の史學には反對して「通鑑綱目」を斥け事實計りの「資治通鑑」は遙かに勝る。これは理論に走り事實を壓抑したもので無用の書なりと言つて居る。（徂徠先生答問書）しかも學問は歷史に極まると言つて頗る重んじた。かくて彼の學風は經學の歷史的研究を重んじたので經學に於ける歷史派と言へる。古文辭學を主張したのも一つの研究法である。（黑板勝美博士「荻生徂徠の史觀」史學雜誌三八ノ六）さればその史觀は朱子學者とは趣を異にするが、歸する所はやはり經學研究の方法論であつて、この點に於いて當時の史觀の埒外にあるものではなかつた。朱子史學に據らなかつた學者はこの外安積澹泊（湖亭渉筆）や藤田幽谷（會澤安「及門遺範」）があるが、これ又根本に於いて違つたものではない。

右は僅に片鱗に過ぎないが、儒者の史觀は一樣に經史相關の立場にあつたので、これが又一般の史學思想ともなつて居つた。

拙稿「近世に於ける歷史敎育」（本邦史學史論叢）

# 第二章　林羅山と本朝通鑑

近世史學が成立し儒教史觀が確立されると共に、その具體化として修史事業が開始された。この修史事業の開始は史學史上より見て頗る意義が深い。それが武家の手によつて着手されたことは近世武家政權の支配者としての性格を側面から說明するものである。卽ち武家の新政權の確立と共に一應過去の政治的變遷を整理して、自己政權と結びつけ、歷史的の因果關係を明確にして、その成立の合理性を作り上げると言ふ意味を持つて居る。卽ち武家史觀の形成である。山鹿素行の「武家事紀」や新井白石の「讀史餘論」はこの典型であるが、更に武家政權自らによつてこの事業が着手されて居る。

近世に於けるこの武家史又は儒教系の歷史學は林家に於ける「本朝通鑑」と水戶藩の「大日本史」を以つて雙璧と爲す事が出來よう。この兩書はその形式・內容共に規模最も大きく、鬱然たる巨木の觀がある。特に「大日本史」は廣く流布してその影響は明治初期に迄及んで居る。近世の正統史學はこの書を中心として動いて居つたと言つてよからう。故に

凡そ近世史學史を書くに、この二書と、その系統を前後に伸長すれば半ばは出來上ると言つてよからう。兩書とも先づ公撰と言つてよい。そして編纂は大がゝりで多數の學者が動員されて出來上つて居る。特に「大日本史」は前後二百餘年の長年月を以つて完成され恐らく我國に於ける最も大きな修史事業であつたらう。よつて以下この二大史書に對して少しく檢討して見たい。

「本朝通鑑」は春齋が四代將軍德川家綱の命を奉じて編修せるものである。併しこの春齋の撰修は更に遡つて父羅山の修史事業に淵源があり、結局この書は林家の父子二代の事業と言つてよい。本書は前編・正編・續編と三部に分れ、これに提要等が附されて居る。これに就いて凡例に「自二神武一至二宇多一五十九代正保中先父所二編纂一四十卷、據二舊史一刪レ繁採レ要、而有レ所二加補一今錄。醍醐以後、至二慶長一無二舊史之正一、故有下所二傳聞一可レ據者上、則詳錄以爲二續編二百三十卷一、併二提要三十卷一總計三百卷、且記二神代之事一爲二前編三卷一」とある。この正編三十卷は羅山の撰にかゝり、初め「本朝編年錄」と題せられて居つたものである。そこで本書を敍するに當り羅山の史學に就いて述べなければならない。

林羅山は言ふ迄もなく近世儒學の開祖と言つてよい。林家十餘代の基礎を置いた人であつて、彼の學問は色々な意味で檢討に價する。その學風は極めて廣汎であり、加之幕府の政權を背景とし、近世の學問・思想は彼の學域から發して居るものが多い。若し歷史學と言ふ範圍に限るとしても彼の存在は巨大であつたとしなければならない。

羅山の學問は先づ朱子學を起すに力を注いだ。「羅山林先生年譜」による十八歲の折既に淸原家が學庸のみ章句を用ひ論孟は舊註を用ひて居るのに反對して宋學の書を講じた。二十一歲の時には、朱子の「論語集註」を用ひて名聲を博したのを忌んで淸原秀賢が、勅許を得ずして講じた罪を鳴らして家康に訴へた。然るに家康は笑つて受けなかつたので徐々朱學の普及に力めたと言ふ。かくて朱學は彼の終生奉じた所であり、中世の傳統たる漢唐の訓詁學に敢然と挑戰してよく近世の儒學再生の先鞭を爲した。併しその學問は決して朱子學に限ると言ふ狹いものでない。八歲の折に人が太平記を讀むを傍で聞いて諳じた。十三歲で唐宋の詩文や東坡全集を讀み點を加へた。これから廣く經史に目を通じ、二十二歲の時には菊亭晴季に本朝官職の事を、東山の老僧に神祇道の事を問ふた。かくて經學と共に本邦の歷史的學科に就いても注意を怠らなかつたのである。慶長九年迄に目を通した書

目四百餘部が年譜に見ゆるが、その裡には支那及び日本の歷史に關するものも少くない。日本關係では日本紀・神皇正統記・延喜式・姓氏錄・倭名類聚抄・職原抄・禁秘抄・名目抄等がある。尙この裡には「天主實義」と言ふ切支丹關係の書の見ゆる事はその博覽を見るべく、更にその翌々慶長十一年ハビアンと問答の際この智識を以つて難詰せることは思想史上の異聞とする所である。その後彼の讀書の範圍が年と共に加はつた事は「羅山先生文集」を見ても分る所である。

人は言ふ、近世の史學は武家政治の所產であり、その史論は專ら現實政治の維持と謳歌であり、其處にその學問の歷史性・階級性があると。若しこの見解が妥當なりとすれば羅山の史學こそはこれを如實に示すものと言へよう。彼は二十二歲にして惺窩に見え、更に二十三歲の時家康に謁し爾來その左右にあつて終生幕府當局の重きをなす所となり、それを背景として彼の學問は發展したのである。この地位が彼の學問を育成し又性格づけたことは當然なことであらう。彼の歷史學も實は幕府の文化政策の一翼であつたことは否み難きことである。

家康は政治的統一と共に武家の文化的統一には早くから着目して古書の蒐集に意を用ひ

て居つた。この結果が近世文藝復興の基礎を開いたことはその功の沒すべからざるものがある。その一斑は近藤正齋の「右文故事」等に審である。公家の秘庫から古書が次々と幕府に移されて行つた事は近世初期に於ける文化の移動を象徵するものであらう。この事業の帷幄に參じたのは前に中世儒學の中心地たりし足利學校第九世閑室や相國寺承兌・金地院崇傳等があり、羅山も又これに伍して與つたが、彼は佛門より儒となり遂に幕府の爲には文化政策負擔の中心者となつた。彼は慶長十八年幕命によつて「武林諸家系譜」・「本朝神代帝王系圖」・「鎌倉將軍譜」・「京都將軍譜」・「織田信長譜」・「豐臣秀吉譜」等を編し、尋いで正保元年には「本朝編年錄」編修の命を受けた。これが「本朝通鑑」として後に大成せられたのである。

　これより先き羅山の史學上の習作には文集三十九卷に收めらるゝ「王仁」以下の數篇がある。彼は「先生常有下欲レ修二國史一之志上」とある如く國史に對する學問的興味は夙くより持つて居つたらしい。

　羅山の歷史觀は如何にして生ひ立つたか。その由來は支那の史學に負ふ所が多かつたと思はれる。彼の讀書は經と共に史に渉り、特に寛永元年には朱子の「通鑑綱目」に朱を加

へ了り、「本朝先是未有點朱於全部者」と侈し、又資治通鑑に題して「古今治亂君臣得失炳如二日星一可レ謂殷鑑不レ遠古人云遺書似二獲麟一信哉」と言ひ、その他史記に就いて「吁古今之治亂君臣之明暗、畢在二眼裏一豈惟太史筆力而已哉」と稱して居る。更に倣二朱子綱目之法一として「本朝編年」を書き、左傳に倣ふて「太平記三事」を、通鑑の法に倣つて「明德軍志」を書いた。之等の習作は何れも支那史の傳統によつて國史を組織せんとする傾向を示すものである。この傾向こそは近世の儒教系の史學の大綱を規定せるものとして最も注意すべきものであらう。「本年編年錄」の發展たる「本朝通鑑」は朱子の「綱目」や「資治通鑑」の形式によつて居るが、これ等は羅山史學の傾向を追ふものに外ならぬ。羅山が斯く支那史學の形式を襲つた事は彼が儒を以つて立つた事より寧ろ當然な事であつた。のみならず、日本歷史を儒教的倫理觀によつて整然たる體系に纏め上げる事は、儒教を移して我思想界を統制する爲め最も必要なことであつた。而して又幕府の修史事業としての意義や性格も其所に自から含められて居つたことも考へなければならない。

羅山の史學の特色の一つとしてその考證學的傾向を檢討しなければならない。凡そ事實の考證は事實の學たる歷史學の基礎であつて、いやしくも事を記する場合には多少とも作

ふものであるが、唯その考證が如何なる立場に在るかによつてその史學の性格が明らかとなるのである。羅山以前の史學と雖も事を考證して斷ぜる例は少なくないであらう。又後述する幕末の考證史學の如き、擧ぐれば寧ろ限りなきものである。この間に在つて彼の考證的史論の持つ特色はこれによつて古代中世の史觀を批判し、近世的史學に再編成せんとした點にあるので、舊き傳統を破壞して現實社會の要求に合致せしめんとする努力に外ならなかつたのである。彼の「火雷神辯」の裡に「凡天地造化之迹、苟不ㇾ以ㇾ理推ㇾ之、必入ニ于幻惟僞誕之說一而終不ㇾ能ㇾ明、故君子窮ㇾ理之爲ㇾ要」と言へるはこの傾向の一つで、儒敎の理を擧げ、その合理主義の立場から怪奇の說を排した。又「浦島子辯」では「神仙之說渺茫恍惚不可信」と傳說に對して破壞的批判を爲して居る。この外「惟喬辯」等があるが、これは「本朝編年錄」編修の爲め舊記を考へ以て古來の疑を闢いて衆人の惑を解いたものと稱して居る。「編年錄」に至つては史實の着實な考證に勉めて居ること、今「本朝通鑑」に見ゆる所々の考按によつて窺はれる。文集六十三卷に見る考證又同樣である。

更にその批判の對象となつたのは佛敎である。近世初期は排佛論が社會狀勢を背景に一般的に擡頭した。勃興期の儒者は殆んど排佛論者であつたが、羅山はその先鋒であつた。

この傾向は史論に於いてよく現はれて居る。彼は神儒の習合を試み、佛教との混交を排した。（本朝神社考）この立場から國史上に於ける佛教的解釋を極端に批評し、その結果佛教者は彼の攻撃を蒙らねばならなかつた。十七條憲法・蘇我馬子・聖徳太子等はその立場から論議が加へられて居る。のみならず儒教的倫理觀からの人物批評は文集二十五に見ゆる諸論文に多く見ゆる處である。かくて一度佛說より解放された史觀は逆に儒教に習合せられた。これを物語るは有名な泰伯皇祖說である。この傳說は既に古くから行はれたもので合理的に考へれば勿論否定し去るべきものであるが、羅山はその「神武天皇論」や「梅村載筆」の一節を見ると內々信じて居つたらしい。そして後の「本朝通鑑」にも初稿本には載せられて居つたと言ふ說があり、（安藤爲章「年山紀聞」・立原萬「西山遺聞」）これを否定する學者もあつて諸說まち〱であるが、要之この考へは儒教と習合せしめ泰伯の至德を國史の由來に結びつけんとするのであるに過ぎない。斯樣にこの思想の發生理由が解せらるゝが、この思想傾向は近世を通じて儒者の間に流れ極端な中華崇拜論となり、或は湯武放伐是認論と言ふ形態を採つて、並びに太宰春臺の「辨道書」や「亂臣傳」に見ゆる如き史論を作んで居る。

彼の歴史研究が武家政治、特に德川氏政治の擁護にあつた事は彼の經歴より當然である。「七武餘論」には平相國より筆を起し、信長・秀吉に至り、秀吉の事業を「玩レ兵黷レ武嗚呼惜哉」と結んで德川氏政權掌握の合理性を暗示せる如きその史論の特質を示し、これより以降の近世史論の形式の嚆矢を爲して居る。

羅山の學風の廣かつたことは、西洋知識に及んで居ることで分る。そして近世の排耶論の先驅を爲した。慶長十一年ハビアンと問答を記した「排耶蘇」はこの種文獻として古いものであり、又幕府の對外政策は彼の劃策する處が多かつた。

扨て「本朝通鑑」編纂の大要は原著の序文凡例などに詳であり、又その經過に就いては「國史館日錄」がある。又左の如き文獻もあるから解說はこれに讓る。

日下寬氏「本朝通鑑考」(史學雜誌一ノ三)、坪井九馬三氏「國史館日錄を讀む」(史學雜誌二十九ノ四)、花見朔見氏「本朝通鑑考」(本邦史學史論叢)

本書は「本朝編年錄」を繼ぐもので、寬文二年幕命を受け同四年より開始して十年に至つて完成して居る。その形式は羅山の傳統を受け「資治通鑑」に依り、「通鑑綱目」を參酌して編年體を採り、「大日本史」の紀傳體と對立して居る。通鑑の稱も支那・朝鮮の史書に

よつたものである。編者春齋はその形式に就いて朱子の「綱目」を尊重して居つたが、「綱目」は春秋に續ぐもので及ぶべからず、暫く温公の例に倣ひ、餘力あらば私に「綱目」を修めると言ひ、且「因襲之弊有下雖二公言一者上、又有下未レ詳二正邪一者上、又有レ所二忌憚一、況當時無下知二春秋綱目書法一、則公言而知二我卓識一哉、是以今般書式、唯記實事而可也」（國史館日錄寛文四年十月、倚同年十一月廿八日條參照）。而してその史觀の大綱は「安和以來至二治曆一國政多是出二藤氏一、延久至二久壽一多是上皇之政也、保元以後政權移二於武家一、此是時勢之變、據レ事直書、義自見。而勸懲之意亦在二其中一」（凡例）とあるによつて窺はれる。

　この編纂は幕府の力を背景として、資料の蒐集には力を注ぎ、特に五山の僧侶の詩文集を抄出し、又支那・朝鮮の史料をも引用せる等の特色も見られる。そして考證的の方面に於いても注意すべきものがある。

　本書の史論中所謂南北朝問題の取扱方に就いては、これ本朝の大變で審かに正統を決すべきでない。即ち後京を寫すとし、兩朝は大體に於いて對立とするが、其間に自から正閏の區別を立て後醍醐天皇御一代に限つて南朝を正とし、後村上天皇以降は反對に北朝を正として居る。即ち「大日本史」とは見解を異にするが、一種の正閏論の在る點は同樣であ

る。この點にやはり支那史學の形式論の影響を認めなければならない。

本書は幕府の官撰である。その點に於いて德川氏の政權の是認者であることは言ふ迄もない。卽ちその續編の最後に於いて、「天下一統、蔑ニ視鎌倉右大將一、超ニ過鹿苑一、（中略）德化之風、永護ニ朝廷一、治ニ海内一、與ニ天地一無レ窮、逮ニ萬萬之長久一也」（第二三〇卷）と結論して居る。これによつてその史論の傾向が分ると思ふ。

幕府の編纂事業として特筆すべきは系圖の編纂である。これは直接の修史事業とは言へないが、色々な意味で當時の歴史意識を反映して居る點重要な意義を認めなければならないものである。羅山の年譜によると彼は「古來武家譜」と言ふものを書いて居る。又寬永十八年には若年寄太田資宗を奉行として武林諸家系譜の編纂を命ぜられた。これが爲め諸大名旗本以下をして各々祖先以來の系譜家傳を錄上せしめ、その結果成つたのが「寬永諸家系圖傳」である。羅山の序にこれ太平一統に非ずんば何ぞ茲に至らん乎「普記ニ官錄一、則不レ忘ニ厚恩一、各載ニ勳功一、則可レ思ニ先祖一、則忠孝之道、與ニ無窮之德一共至ニ千萬也一、孰不レ崇ニ仰之一」と言つて居る。（近藤正齋「好書故事」）この寬永系圖の作成は德川氏を中心に諸大

名以下の諸家を整然たる列序に定めたもので、幕府を中心に武家家譜の再編成をせるものである。近世封建制度の成立と表裏を爲すものとして特殊の意義がある。唯それだけに諸家の家系の眞實が埋沒され人爲的作修が多く加へられたことは否み難いことゝなつて居る。但しこの系圖作成の爲めに實際諸家の古文書が利用された跡があり、又この爲めに諸家の古文書整理が行はれた。勿論その整理法が時代の傾向を多分に受けて居ることは否めないが。（相田二郎氏「江戸時代に於ける古文書の採訪と編纂」本邦史學史論叢）更に其後寛政年間に至りその再訂が行はれ堀田正敦總裁となり多數の學者を動員して文化九年に至る十四年間を費し一五三〇卷を完成した。體裁は「新撰姓氏錄」に例ひ皇別・神別・蕃別となつて居る。「德川實紀」と並び德川氏の大規模な編纂が成つたのである。更に諸藩に於いても所謂藩史の編纂が行はれて居る。これも幕府の修史事業と同じ系統に屬するものである。

幕府の修史事業は又諸藩を刺戟した。先づ筆頭に擧ぐべきは水戸藩に於ける「大日本史」編纂である。これに就いては後述する事として、初期には尾張侯德川義直の「類聚日本紀」がある。諸侯の間に於けるものでは丹波龜山の松平信庸が儒臣松崎祐之に命じ「史徵」七

十二卷を作らしめた。神武天皇より後奈良天皇の天文十一年に至る。寛政十二年二十四卷を脫稿した。それから高松藩の松平賴恕は「歷朝要紀」百五十卷を撰した。この書はもと家臣梶原景惇が寛政年間より筆を起したるものを收め、更に儒臣に命じて補修せしめたるもの。「一代要記」の後を繼ぎ後醍醐天皇より後陽成天皇に至る編年史である。南朝を正統とし、北朝紀は「閏朝要紀」と題して編した。

江戶時代諸藩修史事業の掉尾を飾るものとして島津家に於ける「皇朝世鑑」の編纂がある。これは島津久光の議によつたもので、藩黌造士館內に史局が設けられた。その準備として元治元年より先づ「大日本史」を編年體に改纂する事が行はれたのみで、遂に本格的な國史修撰の事は成就しなかつた。併しその編纂を主裁したのは後の重野安繹博士であり明治初期の「大日本史」批判の上に、又その修史事業の上に少からぬ影響を持つた點に於いて、史學史上特殊の意義が認められる。

拙稿「島津家編纂皇朝世鑑と明治初期の修史事業」史學雜誌五十ノ十二

この外に國史に關する著作は數へ上ぐれば限りないし、徒らにその書名を列擧するのも徒事であるから他の書に讓つて省略する。若干を擧げると「百練抄」を續いだ柳原紀光の

「續史愚抄」・「日本後紀」の缺を補纂した鴨祐之の「日本逸史」等は有名な編纂事業である。又著作としては初期に於けるものに林春齋の「日本王代一覽」・山鹿素行の「中朝事實」・「武家事紀」・山崎闇齋の「倭鑑」・鵜飼石齋の「本朝編年小史」等があり、新井白石の「讀史餘論」・栗山潛鋒の「保建大記」・三宅觀瀾の「中興鑑言」等は中期史學界を代表するものである。後期に於いては賴山陽の「日本外史」・「日本政記」・巖垣松苗の「國史略」青山延于の「皇朝史略」・同延光の「國史紀事本末」中井履軒の「通語」・中井竹山の「逸史」・平田篤胤の「玉襷」等は著名である。更に又この時代の修史事業にして一個人の手に成り、しかもその規模の大きいのは飯田忠彥の「大日本野史」二九一卷である。後小松天皇より仁孝天皇に至る四百二十年の記事で、紀傳體をとり、諸事「大日本史」に倣つて居る。但し志・表を缺くが列傳に於いて姦臣傳と釋氏傳を加へてある。

# 第三章　大日本史とその影響

「大日本史」が近世史學の最高峰を飾るものたることは否み難いことである。扨てこの書の編纂大要は寧ろ周知の事であり、藤田幽谷の「修史始末」。栗田勤氏の「水藩修史事略」、近く德川慶光氏の「大日本史編纂事業に就いて」等があるから茲には述べない。

「大日本史」は「本朝通鑑」の編年體に對して「紀傳體」を採つて居る事が著しき對象を爲して居る。由來支那の史體には紀傳と編年の二體がある。この二體には夫々の特長があり水藩の史家はこれに就いて極力紀傳體の優れたることを主張して居る。併しこの優劣論に就いては古來支那に於いても議論があつたのであつた。例へば「史通」に於いて劉知幾は古來の史家を分つて六家と爲し編年體の「左傳」は日月に繫けて次を爲し、歲時を列するから中國。外夷も年を同じく世を共にして記され、理は一言にして盡き重出する事がない。これがその長所である。併し賢士高才でも國政に預る樣な者は詳しいが、然らざる者は記事に漏れて粗となる短所がある。紀傳體の「史記」は紀を以つて大端を擧げ、傳を

以つて細事を委曲し、表は年爵を譜列し、志を以つて遺漏を總括し、天文・地理・國典・朝章等を誌す、これが長所であり、一事が數篇に分在し、前後に隔れ又重複する短所があると言つて居る。(史通卷二、二體)

そこで水史が編年體を排して紀傳體を採つた理由に就いて安積澹泊は「書重作紀傳義例後」に「編年記事、史也、紀傳分體亦史也、編年實錄之祖、而紀傳諸史之歸也」と斷じ更にその特質に就いては「曰紀、曰志、曰表、曰傳、綜一覈帝王之徽猷一臚二列臣庶之行事一治亂興廢、禮樂刑政、類聚羣分、勸懲並存、犂然可レ見者」「中略」「紀志表傳各守二其體一不二踰越一不二果重一復レ於レ彼、而贍レ於レ此、約レ言而博二於事一、區別品彙體レ備法レ立」と言ふ史の本質を最も適確に表現し得る形式を持つて居ると論じた。即ち「據レ事而直書、闡レ事而義見」と言ふ立場からこの形式が採られたことが分る。而してこの採用は澹泊によれば光圀の創意に出でたものと言ふ。然るに編年體は「不レ足二以考一レ信、崇レ虚抑レ實又不レ可二以爲一訓」(澹泊「帝大友紀議」)ものである。

本書は始め單に「史記」と稱し、天和元年先づ「紀傳」と稱する稿本が成つた。これには北朝五帝を降して列傳と爲してあつたと言ふ。(修史始末)これが修正されて所謂「義記

傳」となつた。周知の如く志類は遙か後年に成り、最初は紀傳のみであつたが、凡そ本書の形成の過程は支那正史に則つた形式主義の下に出發して居るのである。

右の如く支那正史に則り、雄大な規模を持つて居る。志類の完成は明治に至つたが、前後その卷帙は頗る大きい。然しこれを支那の正史に比較して見ると我國の特殊事情に鑑みて取捨修正せられて居る。この點は今日注意すべきものであらう。

近く加藤繁博士が「大日本史と支那史學」（本邦史學史論叢）と言ふ有益な論文を公にされ、これを詳細に指摘された。

本紀に於いて始め皇后紀を立てて居つたが、これは「後漢書」に據つたものである。支那の正史は普通皇帝の爲めに本紀を立てゝ一代の公事を起し、皇后は列傳に敍する。但し「史記」には呂后本紀を立て、「後漢書」は各皇后の爲めに悉く紀を立てた。「大日本史」も最初は皇后紀を立てゝ居つたが、後に本紀は天皇のみ立てることゝした。呂后本紀の例によらなかつたのは、名分上の根據より、又弘文天皇の卽位を認めたのも、舊史の微意を斥け、事に據り直書せるもので、これも名分を重ぜるものである。列傳に於いて特筆すべきは將軍列傳である。支那の藩鎭列傳を參考して特別に立て、之に加ふるに家族傳。家臣

傳を以てして居る。同じく征夷大將軍にしても田村麻呂などはこれより除外し、賴朝より起して居ることは、專ら武家政治の觀點から立てられた爲であらう。再び澹泊の言を借ると「其旨雖名列傳、實如本紀、宜本之世家紀以著其漸、今之猶爲列傳以通其變と」卽ちその記事は單に將軍一個人の記事の外政治に關するものも含まれ武家の本紀と見るべきものであつたのである。

志類では神祇・氏族を先とし、佛事を最後にする等その國家觀がよく見られ、これを綜合して日本の文化史の體系が形成されて居る。その構成に就いては志類總序によつて窺ふことが出來る。表は支那正史にも附されたものがあるが必ずしもその種目はこれに倣つた譯でない寧ろ中央・地方・公家・武家を網羅し、五表が合して一大職官表を形成して居るのは編者の創意でよく我國情を表すものと言はれて居る。

論贊は支那正史の設くるを例とするもので、その史觀の特色を表はすものである。光圀の時は未だ用ひて居なかつたが安積澹泊がこれを書いた。後削除說が起り現在は別になつて居るがこれに就いて幾多議論がある。(「水藩修史事略」・井川巴水氏「大日本史改造論」)

歷史の編纂法に就いては日本は支那の場合と頗る異るものがある。支那では特に唐宋以

後は史官があつて一應前朝の記錄が集められてあつた。然るに我國では「六國史」以降修史が斷絕して居つたので水藩はこれが爲に多大の努力を拂ひ、これが又本史の編纂と並んで意義あるものとなつた。そして考證的の研究もこの間に發達した。異本を校合して參考本を作成する。これは支那の校勘の學に當るものである。この學は淸の乾隆以後盛んとなつたもので、水藩の校訂事業はそれと獨立的に起されたものであつた。更に本文には隨所に出典の註がある。支那の史書には殆んど無いものであつてこれも水戶史家の獨創に出でたものと言ふ。又自註の形で考按の文が挿入されて居るが、これも支那にその例は僅少である。「通鑑考異」に示唆せられたらしいと言はれて居るが、ともかく資料を擧げ考按を附す事は考證史學として公平な形であり、現在も吾人は大體その形式を踏襲して居ると言つて宜しからう。「本朝通鑑」の出典のないのが遺憾とされて居るが、この方は支那の例に依つたので、水史の方は寧ろ獨創であつた。

　支那史學の影響は近世に開始せられたことではなく、上代の修史事業も同樣であつた。聖德太子の「國史」は紀傳に近く「日本書紀」は荀悅の「漢紀」によつて編年體を採つた。然るに「大日本史」が之等の上代の產物と峻別さるべきは近世思想の上に立脚せることで

ある。この立場は先づ水藩史家の上代史學に對する批判の裡に見出されなければならない。

先づ「日本書紀」は色々の點で非難されて居る。編年體たる事は勿論採らざる處で、形式論の上から排して「不ㇾ緒乎史體」となし、「續日本紀以下、則日曆起居注之體、而冗蕪猥弱、舊不ㇾ足ㇾ觀」（澹泊「與平玄中書」）と評して居る。

次に「日本書紀」は曲筆回護の故を以つて非難されて居る。これは皇統の義を明かにする爲めに是正の要を見たので、彼の神功皇后を皇妃傳に列し、大友天皇の即位を認め、南朝を正統とした三大特筆が出てくるのである。（澹泊「帝大友紀議」。「神功皇后論」）但しこの議論は單に名分論からのみでなく、その基礎に史實の確證を求めたことは、本史の價値の存する所である。

右の批判は更に近世史學の一面を代表する排佛的の史論に於いて愈々その近世的性格を明らかとする。これは既に羅山の場合に指摘して置いた。水史の筆鋒はこの點に於いて激烈を極め假借しない。聖德太子・光明皇后に對する列傳や論贊の記事はこれを窺ひ得るし又弓削道鏡・蘇我馬子を叛臣逆臣とせる理由の由に基き「自ㇾ蘇我稻目崇ㇾ佛徵論於其家、

馬子惑溺滋甚、事レ之尤謹。當時侫レ佛者、無レ過ニ馬子一、而忍爲ニ弑逆大事一、此其不レ知レ有ニ君父一之故也」（逆臣傳　とある如く、排佛的色彩が濃厚である。更に僧玄昉・道鏡の行跡に關する描寫は、夫々に具據を擧げて居るが、やはり排佛的傾向を匿すことは出來ない。又支那正史と同樣であるが、僧侶傳がなく、從つて空海・傳教の列傳はない。唯文學歌人として僧侶が拾はれて居るに過ぎない。故に佛教の持つ史的役割は殆んど抹殺されて居ると言つてよい。次に神代史に對する取扱方も儒教的立場から除き去られて居る。これは羅山や白石の見解と相通ずる。

「大日本史」は天皇を本紀とし、神功皇后をすら舊說に據らず列傳に下した。然るに將軍傳に就いては「名雖ニ列傳一實如ニ本紀一」と言ふ變態の實があつた。こゝに武家史論的色彩の存したことが指摘されるものである。

## 大日本史の及ぼせる影響

明治の正統的の國史學、特に官府系の史學は、後述する如く「大日本史」の批判より出發して居る。又田口卯吉博士の後期の事業たる「史海」もその批判が中心であつたと言へ

る。それ丈けこの書の及ぼした影響は大きいと言はなければならない。從つて江戸中期以降の史學がその影響を蒙る事大なりし事は當然の事であつた。

「大日本史」の紀傳全部が上木されたのは嘉永五年である。併しその稿本は夙に成り、且幾度か改修され、寫本として世に流布して居つたので、今日尙坊間に莫大な寫本が散見して居る。そこでこの問題を充分究明するが爲めにはこの流布の如何を究明に取調べる必要がある。「修史始末」によると本書は正德六年紀傳が脫稿し、享保五年幕府に進獻された。八代吉宗の時代で、儒臣には濟泊と交友であり、論贊執筆にはその意見を問ふた室鳩巢が居つた。

「此度論贊出來に付、大日本史二百五十卷水戸侯より御獻上被成候處に、上にも內々御望に思召候處に献上候事御滿足被遊候に付御目付有馬兵庫殿爲上使被遣候」（兼山秘策）とある

湯淺常山の「文會雜記」に「水戸ノ大日本史ハ神后ヲ后妃傳ニ下シ大友皇子ヲ帝位ニ立タマフト南郭目錄ヲ見ラレ語ラレケリ」とか、又服部南郭が守山侯より「大日本史」新田義興傳を借用した、文章は太平記を眞字に直したるほどにて良い文章でない等の聞書が散見して居るかくまだ坊間には珍しがられたのであらう。明和年間大阪の懷德堂が一本を得て

居るが、これはその流布の先蹤を爲すものと見られる。

懷徳堂々主中井竹山の「奠陰集」附錄に收められた、「大日本史附議」と題する一文の冒頭に「明和辛卯(八年)冬十一月、京師護衛堀田侯、命ニ積善ニ(竹山)傳ニ寫大日本史一、因別謄得一本ニ壬辰春二月卒業、校讎亦隨畢」とあるによつて確かである。この寫本によつて竹山は「大日本史」に對して色々議論を加へて居るがその裡に「大日本史」流布の跡を徵すべき記事があるからその大意を紹介して置かう。右の堀田侯の乞による傳寫本(卽ち又懷徳堂本)の據つた本は郡山の柳澤家のものであり、同本は更に伊賀侯の藏本を寫したものである。この本は恐らく明和初年頃の謄寫で、論贊を缺いで居る。然るに懷徳堂本では別に「大日本史贊藪」一本を購ひ得て居る。跋語によると、水藩から一部を幕府に獻じたものを延享三年某藩侯が官に乞ふて謄寫せるものである。然るにその內には間々錯簡あり、これを先の「大日本史」と對抗すると編次や文字を異にするものあるによつて之を考へ、異日に備へるとある。更に「奠陰集」には「書院藏書大日本史後序」と題する一文があるが、その裡には「義公薨之後、秘而未傳、二三藩邦懇請謄寫以藏焉耳、是以四方縉紳之士、引領而鶴望者五十年所」とある。以つて當時この書が傳聞せらるゝのみで未だ一般には流布しなかつたことが分る。

當時の懐德堂は京阪學術の中心であり、竹山の弟子履軒があつた。履軒には「通語」の著がある。其他當時の大阪には碩學輩出して居つたから、この「大日本史」もこの時代に次第に學界に流布せられたことゝ思はれる。又山片蟠桃の主家の山片家がこの懐德堂本より傳寫せる「大日本史」四十八册が今日大阪北濱の愛日小學校に保存されて居ると言ふ。蟠桃もこの叢書に依つて研究したと思はれるからその名著「夢の代」に「大日本史」が言々されて居るのは、恐らくこの傳寫本に據つたものであらう。（龜田次郎氏「山片蟠桃翁の事蹟補遺」國學院雜誌二九ノ八）

次に記すべきは賴山陽の父春水と「大日本史」である。春水は明和安永の頃大阪に在りて塾を開いて居つたが、その間に「大日本史」を手寫して、これを藩庫に獻じ、これが春水の奉職を命ぜられし機縁となつたと言ふ。更に天明二年これに訓點を加ふべき命を受け、寛政三年七月八日を完成してこれを獻じて居る。この大阪にて手寫せると言へるは恐らく懐德堂本ではあるまいかと思ふ。

「春水日記」にこの訓點のことが散見する。天明二年十月八日の條に「一書時御勘定所へ出候て大日本史訓點ニ一件並春印本書二冊共持參候て、青山伯毅へ面會相談し相濟み、

然るに春水は更に國史纂要の指示があり、天明四年十月藩に對して「本朝歴代治亂興廢

之模様相約め可申書物。著述仕見申度奉存候、大日本史は無比類大業に御座候右は紀傳之體に御座候、私今度申上試候は編年に仕り、折節自他論辯を加へ云々」と願ひ出た。翌五年九月に至つて漸くその志が達せられ、弟杏坪を助手として進めたが、寛政元年頓挫の悲運となつた。この理由に就いては明らかでない。今日賴家に春水手書の原稿數紙を殘すのみと言ふ。かくてその目的は達せられなかつたが、子山陽の「日本外史」はこの宿志を發展せしめしものに外ならないと思はれる。

「賴山陽全書」本「日本外史」の木崎好尚氏解題を參照。

右は「大日本史」の流布と影響の一端である。次にこの書が具體的に利用せられし例として巖垣松苗の「國史略」を擧げる事が出來ると思ふ。「國史略」は文政九年に成つた。これは幕末より明治初期にかけて國史教科書として廣く行はれたことは言ふ迄もあるまい。

著者松苗は京都の人、巖垣龍溪の義孫である。龍溪は天明寛政頃京都學界の雄で伏原宣條の高足、古註を尊び、又史學に於いては「十八史略補正」の著がある。その門から豬飼敬所を出した。松苗實は西尾杏庵の子、安永三年に生れ、巖垣氏を襲ひ從五位下晉博士となつた。その學舍を遵古堂と言ふ。尊王家で國史教育に勉め、「國史略」もその志の現れである。この他著書

に「十八史略標註」。「長壽叢史論」がある。

「國史略」は周知の如く神代より後陽成天皇聚樂第行幸迄を書いた、漢文の編年史である。凡例にも童蒙史學之階梯とある通りで「十八史略」に倣ひ極めて簡單なものであつて著者獨自の研究と見るべきでなく寧ろ國史知識の普及を旨とせるに在る。類書少かりし時代故に頗る行はれしも無理からぬ。この書が「大日本史」に負ふ所頗る大なることは二者を比較すれば明らかである。序文にも記してある通り「國史略」には「贊曰く」として「大日本史」の論贊をそのまゝ掲げてある。

右の外先人龍德の「青雲國贊」。栗山潜鋒の「保建大記」。安積澹泊の史論。中井竹山の「逸史」が所々に贊文として引用されて居る。

斯くて「大日本史」を參酌して居る事は推定出來るが、かの三大特筆には從つて居らず、神功皇后を御歴代と同列に掲げ、弘文天皇(大友天皇)に就いては天武天皇の紀に「先帝崩傳位皇太子大友」云々」の文句はあるが、御歴代には數へて居ない。更に南北朝問題に就いては北朝實を採りてその理由として「後北朝諸帝皆今天皇之一系統、因無論正閏、故以朝子統」從古諸書用南朝世次記之」と言つて居る。これは當時公家一般には北朝統を採るものが普通にし

て、柳原紀光の「續史愚抄」も同樣であつた（南北朝正閏論纂）と言ふ理由からであつたと思はれる。

次に水戸の青山延于の「皇朝史略」がある。これも「國史略」と並んで明治初期迄弘く讀まれたものであつた。「十八史略」に倣ひ、「大日本史」を節略したので編年史となつてゐる。その序（文政五年）に於いて日本歴史發達を論じて三變とし、上古封建より大化に至つて始めて國司を置きて一變、攝關外戚政治の開始これ二變、保元以降武臣專政これ三變と言つてゐるのは、支那の封建郡縣論からの暗示と思ふが注意すべき意見である。この見方は「新論」や「日本政記」と同樣後の先蹤を爲すものである。

「大日本史」の影響はこの外はこの他枚擧に暇がない。然るに又これに對する批判の聲も聞える。例へば谷川士清の「讀大日本史私記」や廣瀨旭莊の「九桂草堂隨筆」に於ける如きものがある。併し當時の批評は主として記述の誤、體裁の杜撰等に止まつて居つた。これが明治初期となるに及び、古文書等の根本資料による誤の指摘が出で、更らにその歴史觀そのものへの批判となつた。斯くて明治初期の史學は「大日本史」の批判より始まつたと言へるが、それに就いては尙後に言及するであらう。

# 第四章　新井白石

新井白石の名は近世史學史の上に燦然たる光彩を放つてゐる。白石の史學に對する評價は最近に於いて著しく高められてゐる。特にその古代史の研究は言語と言ふ樣な基本的な材料に着目するその方法論に於いて、洵に劃期的で、今日の科學的研究法に近く、又考古學的遺物にも注意を拂つてゐる事、支那朝鮮の文獻を援用して比較史的研究を行つてゐる事等、その學問的な態度は確かに當時の學問的水準の最高峰を雄視するものであつた。

白石の晩年の大著と稱へるものに「史疑」がある。今日はその斷片しか傳へられないがこれは上代史に關するもので、「藩翰譜」や「讀史餘論」の樣に儒官といふ職責上の著作でなく、專ら自からの胸襟を披瀝せんとしたものであつた。凡そ何人にも疑はある。この疑こそは學問的探求の出發點である。白石の生涯の大半は公人としての活動であつて、その史學的著作も將軍の諮問に應ずる爲めに成されたものが多かつた。併しその公人的過程を經た後でも、尚その學問的の要求が失はれず、胸中に蓄へ置き疑ひの躍動して居つたと

とは、今日學者として白石の偉さを物語るものであらうと思ふ。彼の古代史、上代史研究もこの偉大なる疑ひの所産であり、彼の偉さもこの疑ひを披瀝して殘した所にあると言へよう。

もとより白石も時代の人であり、特に公職に永く在つて公人として行動して居つた。だからその著作を通じての彼の學問も、公人としての立場がある。「藩翰譜」や「讀史餘論」に於いてはその色彩が最も著しい。この點は既に種々指摘せられてゐる。だから今日學術史上からその學問を検討する場合は、かゝる公的の制約を充分に分析してその學問的精神を汲み取る必要があらう。

白石の歷史的研究の體系は略々古代上代と中世と近世の（當時に於いては現代史）三部門があり、「古史通」と「讀史餘論」と「藩翰譜」とが夫々これに該當してゐる。この他に對外關係に及んだ「西洋紀聞」、その他佐久間洞巖・安積澹泊等との往復等に見ゆる考古學的考察を加へる時はその視野の廣いこと洵に比類なきものがある。この厖大な體系の裡で、如何なる部門が高く評價せらるべきであらうか。これに就いては一應彼とその時代との關係を念頭に置いて考察されなければならない。彼は下級武士の子として生れ、父の正濟は浪人もして

漸く出仕の道を得た。白石も又その青年時代は凡そ當時の武士としての生活苦をなめ盡し壯年時代に至つて計らずも甲府侯に仕へ、それから侯の宗家相續と共に幕政に參與し得意の時代を迎へたのである。だから彼は幼少の頃から武士としての觀念が骨の髓まで滲み込んで居つた。しかもその教養は木下順庵を師とし正統な儒學を學んでゐる。即ち彼の歩みは決して時代に抗すると言ふものではなく、それに即しつゝ遂に得意の時代を得た譯である。只その得意の時代と雖も、儒業より入つて將軍家宣に仕へた關係上、一方に儒官としては傳統を擁る林家があり、政治的にも内部的の對立があつて、彼自らこれ等と對立して抗爭的な態度をとつたが、全體として時勢に乘りしかも最高の政權の座に與つたのである。晩年の失意は吉宗將軍の登場による政治的情勢の變轉の結果に過ぎない。

白石が幕政に參與して居つたのは寶永六年から正德六年迄の約七年間である。この時代は幕府政治が既に初期を過ぎて中期に入つた時代である。やがて來るべき崩壞期を控へ一應その形式的な完成が要求されて居つた時代である。この形式的完成の底には賄賂の横行その他の弊害も甚しくなり、幣制の紊亂財政の窮乏と言ふ矛盾が既にその大厦に蝕ばむで居つた。更にその背後には封建政治の基礎となる農村經濟が停滯的となりつゝあつた。こ

れ等の諸問題に對して白石が如何なる見透しを持つて居つたか、それ等は寧ろ彼の政治的經綸の裡に見出されなければならない。而してそれが又史觀の上に如何に投影して居つたか。これ等は彼の史學說檢討の上に重要な意義を持つものであらう。

白石の史學思想の特質はあまり内外の傳統に捕はれず、自らの考へなり、疑問なりを率直に披瀝した點にある。彼の史學的著作は少數の史論を除き皆な平明な國文で書かれて居り、その形式も親房の「神皇正統記」に負ふ所もあつたらうが、大體に於いて獨自の見解の下に史論を展開して居る。特に古代史に於いては言ふ迄もないことであつて、全體として獨創的である。この點は江戸時代の儒者の史學說に比較して洵に比類がない。國學者の本居宣長伴信友等と並んで高く評價されなければならない事である。「本朝通鑑」や「大日本史」は白石の場合とは事情が異り、官業の修史であつたとは言へ著しく形式主義であつたに對し、白石の自由な研究態度は異色としなければならない。併し遡つてその史學的素養の根底にはやはり支那史學思想があつたのである。これは彼の歷史教育の態度によつて窺はれる。彼が甲府侯に講史の順序を見るに「三代より以下、歷世治亂興亡の事をも、兼ね聞召されん事いかゞあるべきと仰下さる。仰下さるゝ所、誠に斯道の大幸也、さらば司馬

資治通鑑・朱子通鑑綱目の冊を以て、講學ばせ給ふべき御事かと對へ申せしかば、通鑑綱目の書を講學ばるべし」。某また進講すべき由仰下さる」（『折たく柴の記』）次にまた春秋を講じ、それから「修撰の故事屢問はせ給ふ」た、ついで日本歴史に就いては「國初より此かた、その封祿萬石以上の人々の事ども進講の暇あらむをり／＼に、いかにもしるしまゐらせよかしなど仰られ」その結果作られたのが「藩翰譜」である。この書は家譜の集成で後の寛永系圖の作成と同樣、徳川氏中心の家系整理事業と相通ずるものである。同書の凡例によると慶長五年より始められたのは、關ケ原と言ふ徳川氏の政權確立に決定的動因を與へた年に筆を起したので、萬石以上の大名に限り「史漢世家の例になずらい」て書かれたとみる。そこでこの諸家傳は支那史の紀傳體に於ける列傳に該當するものであると見られる。即ち宗家が本紀として書かるべき筈で、それに對し諸家がこゝに列傳の形で書かれたことは蓋し推測し得る所である。そこで諸家の配列も親藩・譜代・外樣と言ふ徳川氏中心の順序に置かれてゐる。宗家の譜は出來なかつたが、強ひて求むれば「讀史餘論」に於ける武家史論がこの徳川氏本紀の前奏曲たる役割を爲すものと言へよう。して見ると「讀史餘論」と「藩翰譜」とは合して徳川氏中心の紀傳史を構成するものと言へよう。儒官としての白

れ等の諸問題に對して白石が如何なる見透しを持つて居つたか、それ等は寧ろ彼の政治的經綸の裡に見出されなければならない。而してそれが又史觀の上に如何に投影して居つたか。これ等は彼の史學説檢討の上に重要な意義を持つものであらう。

白石の史學思想の特質はあまり内外の傳統に捕はれず、自らの考へなり、疑問なりを率直に披攊した點にある。彼の史學的著作は少數の史論を除き皆な平明な國文で書かれて居り、その形式も親房の「神皇正統記」に負ふ所もあつたらうが、大體に於いて獨自の見解の下に史論を展開して居る。特に古代史に於いては言ふ迄もないことであつて、全體として獨創的である。この點は江戸時代の儒者の史學説に比較して洵に比類がない。國學者の本居宣長伴信友等と並んで高く評價されなければならない事である。「本朝通鑑」や「大日本史」は白石の場合とは事情が異り、官業の修史であつたとは言へ著しく形式主義であつたに對し、白石の自由な研究態度は異色としなければならない。併し遡つてその史學的教養の根底にはやはり支那史學思想があつたのである。これは彼の歷史教育の態度によつて窺はれる。彼が甲府侯講史の順序を見るに「三代より以下、歷世治亂興亡の事をも、兼ね聞召されん事いかゞあるべきと仰下さる。仰下さるゝ所、誠に斯道の大幸也、さらば司馬

氏資治通鑑・朱子通鑑綱目の間を以て、講學ばせ給ふべき御事かと對へ申せしかば、通鑑綱目の書を講學ばるべし、且また進講すべき由仰下さる。」（折たく柴の記）更に又春秋を講じ、それから「倭漢の故事等問はせ給」ひ、ついで日本歷史に就いては「國初より此かた、その封祿萬石以上の人々の事ども進講の暇あらむをり〳〵に、いかにもしるしまいらせよかしなど仰られ」その結果作られたのが「藩翰譜」である。この書は家譜の集成で彼の寛永系圖の作成と同樣、徳川氏中心の家系整理事業と相通ずるものである。同書の凡例によると慶長五年より始められたのは、關ヶ原と言ふ徳川氏の政權確立に決定的動因を與へた年に筆を起したので、萬石以上の大名に限り「史漢世家の例にならい」て書かれたとある。そこでこの諸家傳は支那史の紀傳體に於ける列傳に該當するものであると見られる。即ち宗家が本紀として書かるべき筈で、それに對し諸家がこゝに列傳の形で書かれたことは蓋し推測し得る所である。そこで諸家の配列も親藩・譜代・外樣と言ふ徳川氏中心の順序に置かれてゐる。宗家の譜は出來なかつたが、強ひて求むれば「讀史餘論」に於ける武家史論がこの徳川氏本紀の前奏曲たる役割を爲すものと言へよう。して見ると「讀史餘論」と「藩翰譜」とは合して徳川氏中心の紀傳史を構成するものと言へよう。儒官としての白

石の日本歴史の體系はかくして形成されて居る。

右の如く凝し得るとは言へそれによつて彼の自由な史觀が抹殺されるのではない。唯支那の學問が覆ひかぶさつてゐたあの時代の人たること、又時代の歴史觀の裡に在つた事を看却しては彼の史學思想の本質を把握出來ないと思ふのである。「讀史餘論」などは元々進講の草案であり、直ちに公にするものではなかつた。林家や水藩の場合とは全く成り立ちが違ふのであるから、その形式の違つたことも或は當然であつたとも言へる。彼の獨創性を認むるも、それを過重に評價する事は時代を離れて論斷するの謬れを生ずるものと思ふ。併し彼の後世に及ぼせる影響と言ふ觀點より見る時は、「日本外史」。「日本政記」や、更に明治の「日本開化小史」を見ても、我史學進歩の爲めに彼の播いた種は著しかつた。

「古史通讀法凡例」の裡に「凡經史おの〳〵其體を異にす、史は實に據て事を記して世の鑑戒を示すものなり」と言つてゐる。そしてその研究法として言語學的研究・文獻の比較研究等を主張してゐるが、その目的は異端荒譚の附會說を排して儒教的の合理主義を以つて實を求めんとしたのである。卽ち「日本書紀は又舊事本紀に據りて撰錄せられし所なりといふなり、たとひ其體制異朝史漢の書に同じからざる所有といふとも、其史たることは

これ同じ、然るに後の日本書紀を講解するもの上古の事に至りては詭辭鑿遂て一つに異端に出ず、其言の得ざるに及びては神道不測以て論ずべからずといふ。」（前掲書）とか、又佐久間洞巖に宛て「日本紀並に古語拾遺又は歴朝國史風土記等のごとき、正史實錄に見え候事共をのみ採用ひ、異端曲學の僞説を除き候て古史通と名づけ候云々」（仝書、五ノ五五八）とあるが如く、即ち林羅山などの歴史觀と互に相通ずるものがあるので、彼が時の史學思潮に棹さしてゐたことが分るのである。だから彼の神秘主義の打破と言ふ精神も公式的でなくどこまでもその時代の精神に即して理解されなければならないと思はれる。尙言ふ「凡此書專ら舊事本紀古事記日本書紀を以て本據とすといへども或は名敎における或は事實における斷ずるに義を以てせざるを得べからざるに至りては其說を註下に附書すこれは事既に僭踰に涉るといへども敢て其罪を遁くべからざる所あるが故也」（古史通讀法凡例）

斯くて春秋の法と言ふ事は白石も又重じた所であつたが、これに就いては何處迄も自らの見識を以つて臨まんとした處に又彼らしい剛直さがある。濟伯に與へた書翰の一節に「本朝の是非は勝候かたいつも〳〵是にて負候かたいつも〳〵非なり候樣に候か古を書はさもこそと申候ても諸候はゞ書候べく、今日前の是非も又右の例にかたづき候樣に見え候は再に

も角にもかたづきかね候是非にて百年以後公議定る所恃みがたき事の樣に存ぜられ候此等の事思召被仰下候はゞ何よりの學問と奉ㇾ存候事に候」(全集、五ノ三四〇)この樣な態度は白石の公人としての文治主義の結果で、彼の史論を支配せる大きな力であつた。

白石の活動時代は幕府に於いて林家の史學があり、水府には「大日本史」の編纂が進捗中であつた。この三ツは共に近世史學史上の代表者である。林家は信篤の時代で、「本朝通鑑」は夙に完成して居つたが、水藩の方は安積澹泊・栗山潛鋒・三宅觀瀾等が集つて居つて、最も活氣のあつた時代である。その裡澹泊とは晩年書信の往復を爲し「新安手簡」を殘して居る。

水戸史學に就いての批評は彼の書簡の裡に見える。佐久間洞巖に與へたものに、古代史研究の態度に就いて次の如く言つて居る。「水戸にて出來候本朝史などは定て國史の訛を御正し候事とこそ賴しく存候に、水戸史館衆と往來し候て見候へば、むかしの事は日本紀續日本紀等に打任せられ候體に候、それにては中々本朝の實事はふつとすまぬ事と僻見に候やらむ老朽などは存じ候、本朝にこそ書もすくなく候へども後漢書以來異朝の書に本朝の事しるし候事共いかにも／＼實事多く候、それをばこなたに不吟味にてかく異朝の書の懸

聞之訛と申しやぶり（中略）本朝國史々々とのみ申す事に候、まづは本朝の始末大かた夢中に夢を說き候やうの事に候」（全集、五ノ五一八）これは彼の比較研究法からの批評であるが澹泊もこの注意には服して居る樣である。（全集、五ノ三五八以下）

白石の史學思想の根底に獨自の世界觀や歷史哲學的思想が無かつたことが指摘されて居る。彼の得意とする所は考證學的の方面であつた。根底は當時一般の儒敎思想であつた。そして封建史學に對して反抗者と見るより寧ろその完成者であつた。彼は德川氏政權の中心に立つて歷史を考へ、この立場から武家中心の日本歷史は「讀史餘論」と「藩翰譜」の二書によつて一つの體系として築き上げられたのである。この點に於いて「大日本史」や「本朝通鑑」などより、遙かに日本的であり、且又より武家的であつた。

更に彼の對外國の思想に於いても、「西洋紀聞」に於ける立場は、西洋研究と言ふ點に於いて正に近世洋學の基礎を置いた人であつたが、その西洋觀はやはり當時の一般に相通ずるものであつた。儒臣としての立場を離れたものではなかつた。

白石の史學に就いては論考頗る多い。單行本として勝田勝年氏の「新井白石の歷史學」があり、その參考書目には既往の文獻が大體網羅されて居る。

# 第五章　歴史的認識の諸問題

近世初期德川氏の政權が確立され、それを中心に封建制が再編成されると共に、儒教が爲政者の手に採り上げられ官學としての地位が與へられた。近世の形式文化は儒教的と稱せられる。そこでこの儒教が一層その地位の安定を得ると共に、諸々の觀念型態を儒教的に編成替へをする。例へば當時の武士道論などもこれを儒教道德によつて說明を與へると言ふ事が行はれて居る。山鹿素行や中江藤樹の仕事はそれであつた。これと同樣に國史學に於てもやはり儒教的に構成すると言ふ事が行はれて居る。林家の「本朝通鑑」や「大日本史」はそれであつた。修史に於いて編年・紀傳等の形式が正確に守られ、支那正史に倣つた國史が出來上つたのである。この二大史書が正に近世史學の代表者として重んずべきは、かゝる由來によるものである。

そこでこの時代の歴史的認識は外部から與へられた形式があつた。この形式がその認識の範疇の役割をしてこれを支配して居つたのである。これは支那に於いて發達した正史と

しての形式で、特に紀傳體に於いては本紀を正系として、王室歴代の紀を立て、列傳には忠義・烈女・叛逆等の目次があつて夫々に自から褒貶の意が寓されて居る。これに志表を加へ、歴史的認識が一定の形式に固定されて居る。唯この形式に準しつゝ、或は某王を本紀に入れるとか、又某々を何々の傳に編入するとか、又は或る王統を正統とし、又は閏統とする等の價値判斷をする。これが所謂春秋之筆法であり、史官の筆誅となるのである。勿論この支那の史體と言へども其間に多少の變遷はあつたであらうが、併し大體固定したの形式を二千年も墨守して居ると言ふ例は殆んど他にない。この様式を日本の近世史家は受けたのである。徳川光圀が「史記」を讀んで修史を思ひ立つたとの傳へはこれを裏書する。唯「大日本史」の列傳や志目の立て方が、日本の事情を色々と採り入れて居ると言ふことは前にも指摘したが、併し全體の構成に於いては與へられた形式を忠實に守つて居るのである。

　この支那正史の形式は元來國全體の歴史と言ふより、或る王朝の歴史である。紀傳體の如きは特にこの目的が明かであり、從つてこの點で、我國に移す事は甚しく無理がなかつた。殊に支那には史官と言ふ特殊なものがある。これは王者天命を受けて立つと言ふ革命思

想に伴ふ制度であるから、日本には移し得ない。我上代に支那の制度をあれ程採り入れ乍ら常設の史官が置かれなかつた事はこの爲めであつた。故に筆法の如きも決して支那史官を學ぶ事は出來ないのである、斯樣に彼我の同一であり得ないものがあつたが、本紀と列傳を立てる方法に於いては共通性があつた。そしてこれが採り入れられた譯であつたが、共處には明治となつて福澤諭吉が「日本國の歴史なくして日本政府の歴史あるのみ」(文明論之概略)と批評した樣な結果が現れたのである。編年體の方は紀傳體に比してこの點は融通が出來る。林家が編年法を用ひ、水藩が紀傳法を採つたのは無意識の裡にもかゝる作用が働いたのかもしれない。

かくて歴史の形式が政治の主體を中心に構成されて居つたから、自からその認識が一定の方向に固定されてしまつた。そして哲學的の深さも、社會史的の視野も貧困であつて、そこに進歩も變化もなかつたのである。歴史的の價値判斷も唯形式を整へる爲めに行はれたり、形式に追從して行ふと言ふ傾向が多分に見えるのである。所謂事據直書と言ふ標語が盛んに用ひられて居る。併しこれも元來支那史官の筆誅の爲めの意であつて、近代的の意味に於ける事實の追求や描寫ではない。從つてこれを當時の日本の歴史家が用ひて居る

のもやはり儒教倫理的の意味であつた。(明治初期に重野博士などがこの語を用ひて居るが、これは餘程近代化した意味に用ひられて居るのである。)

この形式は當時歴史の正體として殆んど常識的となつて居たから、多くの史書は何れもこれを踏習して居つた。これを打破して新しい様式へと進んだものは稀である。その裡で新井白石の如きはあまりこれに捕はれず自由な表現をした點に於いて特筆に値する。白石の「讀史餘論」は元來武家史として組立てられて居ることは、その著述の由來によつても明らかであるが、この爲めに支那史の形式を借らず、寧ろ「神皇正統記」の跡を追ふて、しかも獨特の構成を採つた處に歴史家としての卓識を感ずる。光孝天皇より以前を上古として分ち、それ以降を公家の代と武家の代と二大別し、公家時代を更に外戚專權の始より九變に區分し、又武家の代は頼朝より五變して徳川氏に至るとした。而して公家の代と武家の代は互に交錯し、足利時代以降を全く武家の代として居る。この見解は公家と武家と言ふ二元的な政權、即ち日本の政治史上に於ける特性を基礎として構成せられし點に於いて政治中心の歴史として紀傳體や編年體を採るより遙かにその把持は適確である。併し彼の史觀が全く支那的の形式を打破して居つたとは考へられない。この點に就いては前章に

いさゝか考察して置いた。

次に「日本外史」の構成に就いて見るに、この書は著述の當初「日本世史」又は「日本覇史」と稱せられて居り、「史記」の世家に據つたとは山陽自ら言ふ所である。本紀を立てなかつたのは正史でなく、私乘だからと言ふのである。目的は將家の興廢を記するに在る。唯貫くに帝系年號を以てして大義の繫る所を明らかとした。卽ちその體裁は支那正史を崩したものと言へる。この點に就いて「讀史餘論」の獨創に及ばない。

近世の歴史が何れも武家政權の下に書かれたこと。從つて武家政治の必然性が基本觀念となつて居ることとは屢々指摘されて居る。これは著者が必ずしも意識しなくともそうなることは自然であつた。唯この武家政治必然性認識の原理は中世の「愚管抄」等の樣な宗教意識でなく、之に代るに現實的な觀點であつた。封建は勢であると言はれるが、その勢は寧ろ實際の力であつた。これに對しての說明は神の攝理と言ふ樣な宗教意識でなく、現實倫理たる道や德であつた。

認識の範圍が概して政治的潮流の動きに限られて居つた事も當代史學の特色であつた。これは支那の王朝中心の史學の影響もある。又この時代の歴史が殆んど實學的の立場から

書かれて居るによる。山陽は自ら私乘と言つて居るが、その歴史意識はやはり史官風の亞流である。純粹の野史・私乘の出でなかつたことは近世史學の大きな特徴である。それは封建社會の齎らせるものであつて、近代的個人主義の成熟しなかつた爲めである。個人意識が全體意識の裡に吸收され、常に類型的なものしか發現しなかつた。明治の福澤諭吉や田口卯吉がこの類型を破壞して、近代的の個人意識を歴史學の裡に導入した功績は、時代の轉換の結果とは言へ、その功績は大きいのである。

歴史の發展が政治的勢力の交替によつて把握され、單に少數の動きのみによつて説明されて居り、近代に於けるが如く、その發展の基礎と爲す社會機構や民衆の動きの分析は未だ殆んど見出されて居ない。

近世史學の特色は、それが政治史的であることであるが、更にその政治史的なものが政策的な傾向史學・目的史學と言ふ方に發展して居ることを指摘しなければならぬ。これは既に「大日本史」に於いても見られ、下つて「日本外史」以降幕末の國史學に於いて强烈な色彩となつて居る。即ち「日本外史」が幕末志士の教科書となつて居つたことによつて

も分ることであるが、又所謂史論の流行もこの現れである。就中吉田松陰・有馬新七・横井小楠・會澤安・藤田東湖等の人々が史論を書き、又史論を闘はしたのは或は尊王論の、又討幕論の、又は攘夷論の、或は開國論の歴史的根據を求むるに在つた。玆に於いて歴史は單なる事實の集積や追求でなく、その實踐に奉仕するものであつた。「日本外史」や「日本政記」が純正史學としては種々の批評があるにしても、傾向史學としては一代の傑作たること何人も否む能はざることである。

この様な歴史學の傾向は、元と支那史に於ける目的觀が原因を爲して居ると言へる。更に儒教の目的觀が一般の學問觀を支配せる結果に外ならない。更らに幕末明治初期の對內的對外的の情勢が、冷靜なる學問的研究を許さず、直ちに實踐的なものを欲求せる結果である。

この幕末の傾向史學は明治となり情勢の轉換、實證主義的史觀の擡頭等によつて後退してしまつたが、この傾向はかの民權運動の勃興時代に民權的な史學として起つた。傾向的な史觀は何時の時代にもその時々の情勢を反影して絕えないものである。

支那史の形式が守られると共に、その觀念型態も又史觀構成の原理として受入れられた。正統論・名分論等これである。勿論支那の正統論などはこれより早く既に輸入されて居るが、この問題が史學理論上の中心問題として激しく論議されたのは近世に於けるものである。

「大日本史」は撰者光圀が「史記」の伯夷傳を讀んでその志を立てたと傳へられたるが如く大義名分を明かにすると言ふ意圖があつたのである。この名分論が公理として與へられし結果、それが日本の自己認識に對して力強く働き國體論が論議さるゝに至つたのである。

近世の初期に儒者の間に神儒一致論が唱へられた。これは神道を儒教と習合せんとする試みで、上代中世を通じて試みられた神佛習合思想と相對するものであらう。藤原惺窩が神道は堯舜の道と名はかはり心は一つなりと言へるを始め、（千代もぐさ）その門人林羅山はこの思想を益々強調して居る。「本朝神社考序」にも神道王道儒道を同一のものである。即ちかく神道を解して居つた所に日本は神國也と言ふ主張が特殊の意義が生ずる譯である。山鹿素行の日本中朝の思想もその根據に共通のものがある。更らにこの神儒一致思想と連關して華夷中外の論がある。支那は元來、自らを中華・中國として、他國を夷國とした。

そこで日本中朝的の立場と、支那中華的の立場と、或はその折中說と言ふ立場が見られる。日本は異朝には何事も及ばず聖人も異朝にこそ出來候と思ふは誤れりと言つた山鹿素行と、自ら日本國夷人物茂卿と稱した荻生徂徠との對立は江戸時代の儒者國體論上兩極端を示すものであらう。更にやはり儒者の間に問題を生んだのは王道覇道の論・湯武の放伐可否論であつた。王覇の論を我國に移せば御親政と武家政治との問題となる。儒敎には元來王道天下の思想があるが、これをそのまゝ極端に主張する事は當時としてははゞかるべき結果となり、結局に於いては支那の覇道に該當する武家政治を是認する樣な史論とならざるを得なかつた。そして何れも德川幕府の出現を歷史的に是認することゝなつて居る。そして武家が皇室を奉じ勤王の道立てつゝ人民に臨んだと言ふ所に一種の王覇調和論を立てゝ巧みにこの斥覇論の鋭鋒をさけてゐる。近世の武家史論は何れも平安朝に於ける公家政治の弊に論を發し、保元の亂や皇家中興の失政を論じ、更に足利氏や織田豊臣二氏を酷評して、家康に神性を附し、從つて現世謳歌の實を擧げた。山鹿素行の「武家事紀」然り、新井白石の「讀史餘論」然りである。これが殆んど公式の樣になつてゐる。併しその史論が公家政治の發生に起點を置く所に、王政の復古論の發現の餘地が殘されてゐる。卽ち再び

公家政治以前に返るべしとの論旨が伏在してゐる。これが幕政の弛緩と共に擡頭したのであつて、「日本外史」が幕末の尊王論・復古論者に教へた所もこれに外ならない。

湯武の放伐は支那の天命思想や革命思想からは當然是認せらるべきものである。併し我國に之を移す事は國體論の上から許されない。この放伐論の最も嚴しかつたのは崎門派であつた。山崎闇齋は「湯武革命論」(垂加文集)に於いてこの擧は權道であるとし、文王が紂王に忍んだ至徳を天地の大經とした。又韓愈が文王を詠じた「拘幽操」を尊重したのもこの立場からであつた。これに和したのは谷秦山・淺見絅齋・強齋であつた。然るに支那思想を遵奉して正面から是認する者もあつた、即ち佐藤直方・三宅尚齋これである。もともと支那思想を受け入れて論旨を貫けば是認も出る譯である。今その是認否認の可否は別として、ともかくこの樣な兩說の發生せる事は儒教思想を受け入れたこの時代として興味ある問題を投ずるものである。即ち當時の儒教系の史學の背後にこの樣な思想の存せることは當面の問題として考へて置かなければならない事である。

次にこの支那思想に關聯するもので、當時の國史上の問題となつたのは、正統論である。即ち南北朝正閏論である。元來王朝に正閏の別を立つる考へ方は革命によつて次々と王統

の變る支那に於いては歴史の見方の有力なる指針となるものであつた。併しこの考へ方が日本の場合にそのまゝ輸入される餘地は無かつた。これは日本の歴史が支那の事情と非常に異つてゐるからである。所謂南朝正統論を歴史上論じた嚆矢たる「神皇正統記」の正統論はこの點に於いて吟味されなければならない問題がある。(津田左右吉博士「愚管抄及び神皇正統記に於ける支那の史學思想」) 然るに江戸時代となつて支那史學の形式論がそのまゝ踏襲される樣になると再びこの正閏論が問題となつた。「大日本史」が南北朝問題に對して南朝を正統とし北朝を閏位に置いたことはその三大特筆の一として最も峻嚴であるが、この外にも史家の間にこの問題は頗る多くの論議を生んで居つた。所謂南北朝時代に於ける主張は、夫々の立場からの議論と言ふ風に見らるべきものもあるのであるが、下つて江戸時代に至つての正閏論は尊王論。國體論として、又名分論として論ぜられた外に、史學上の形式論として見らるべきものもある。玆には史學上の問題として採り上げて見よう。尙この問題に關しては幸ひ「南北朝正閏論纂」と言ふ便利な本があつて、この時代の兩說の材料が蒐集されてゐるから、それによつて一應問題を概觀して見る。

江戸初期には一般に所謂北朝が正統と考へられて居つた。これは足利時代からの引續き

と見られる。慶長十六年頃の「大日本國帝王略記」・「續本朝通鑑」・「日本王代一覽」等がその例である。併し林羅山・春齋は南朝正統説を抱いて居つた。これは「春秋」・「綱目」などの名分論から割出された議論で、(味池修居「南狩錄」に引用せる羅山の論贊)羅山が「通鑑綱目」を熟讀して居つたことから然るべきを覺ゆる。この外山崎闇齋がやはり朱子學の名分論から南北朝問題を取扱ひ「倭鑑」を編纂して南朝正統論を立てた。爾來崎門派の史論は何れも祖師闇齋の衣鉢を受けてこの説を主張した。正親町公通・跡部良顯・淺見絅齋・栗山潜鋒・三宅觀瀾・若林強齋等がそれで、就中「保建大記」と「中興鑑言」の二書は最も有名である。この潜鋒と觀瀾が水戸藩の修史事業に與つたことは史學思想史上極めて重要性を持つ。(内田周平氏「崎門學者と南朝正統論」參照)

南朝正統論を史學上から殆んど鐵案を下したと思はれるものは言ふ迄もなく「大日本史」であらう。これに就いて重ねて説く迄もないが、その議論が支那の名分論に示教された點が多いことは近世に於ける儒敎系史學の特質を最もよく表明するものである。所がこの主張は又林家の修史と關係があることを一言して置きたい。それは寛文四年十一月二十八日に春齋が光圀を訪ふてこの問題を談合してゐる。光圀は「執以爲二正統一乎」と問ひ、春齋は

縷々意見を述べてゐる。通鑑の例に倣つて直書する事が尙障あると言ふ樣な事を言つて居り、この問題が當時の史學上決定を要すべき問題であり乍ら中々困難であつた機微が窺へる。（國史館日錄）然るに「大日本史」は最初の紀傳が成つた時には北朝五主を列傳に下すと言ふ書法であつた。併しこれはあまりにも支那の形式論に拘泥した書法であり、安積澹泊の批評によつて單に正閏の差別を設くる事となつた。これが爾後水藩の定論となつた事は言ふまでもない。

扨てこの問題は種々の事情もあつて、實際問題としては何れとも決着せず、或は兩朝併立說も出た。京都の公家間では尙北朝說を採る者多く、巖垣松苗の「國史略」は「大日本史」に據りつゝも尙北朝說を採つてゐる。右に指摘した樣にこの問題が形式論の上から支那史學より多大の暗示を得てゐることは林家・水藩又崎門派の何れもの實際によつて明らかなことゝ思はれる。この形式論が幕末に至つて現實的な尊王論・討幕論と結びつき實踐的の指導力を持つて來たことは言ふまでもない。

林羅山は幕府史官と言ふ立場と、儒者の立場から日本歴史の再編成に第一の鋤を入れた

人である。その意味から彼の史學思想は複雜なものである。彼はその立場、特に幕府史官としての立場から古代中世の史學に對して批判的の態度を採つてゐる。その立場の一つとして合理主義的な見方がある。これは儒教思想の影響と見る事が出來よう。この合理主義の見地から考證的な研究も開始されてゐる。歴史を現實的な道徳觀念で組立てゝ行かうとするのがこの立場であるが、其處に自から現實的な歴史の解釋が生れて來る。例へば又新井白石の古代史研究にしてもその方法の科學的であることが高く評價されてゐる。勿論それに異論はないが、之れも現實的な關係に於いて歴史を考へると言ふ、當時の現實主義的思潮の産物と見なければならない。故に「古史通」も「讀史餘論」や「藩翰譜」と同じ系統の内に在る事が決して怪しむべきものではないのである。

こう言ふ現實主義、合理主義的な考へ方は江戸時代の史觀を通じて流れて居つた。幕末の考證主義もこれの現れである。この合理主義の歴史家として幕末期の山片蟠桃を考へて見たい。同期に於ける林羅山とこの蟠桃とは時を隔て、又その身分を異にする。羅山は史官であつたが蟠桃は大阪の町人學者である。懐徳堂の中井竹山に師事して學統としては朱子學に屬して居つたが、その學問は頗る廣汎で洋學の影響をも多分に受け、西洋の新しい

宇宙論や地理學的の智識を多分に持つて居つた。この洋學の齎した科學的精神が本來の儒教思想と結び、更に町人的の境遇に醸し出されたものが彼の史觀であつた。彼が西洋智識を採りつゝもその人生觀に於いて儒教的、と言ふよりも當時の町人道德の遵奉者であつたことは、「夢之代」に於いて、耶蘇教を邪宗として儒の道を擧げてゐることでも明らかな事であるし、又その經歷が主家山片家に厚く仕へ「町人としてその道を全うしたことによつても分る。（龜田次郎氏「山片蟠桃翁の事蹟」）

彼の歴史觀は大著「夢之代」の神代及び歴史の章に見ゆる。特に神代の篇に於いては儒教の立場から神道說や本居宣長等の國學的の見解を批判してゐる。そして「大日本史」の如く神代は除くべしとの意見である。「日本書紀ハ舍人親王及太安麿等ノ五臣ニ勅シテ著ス所ニシテ本朝第一ノ正史也、淺學ノ兒輩ナンゾ是ヲ議セン、然リト雖モ疑シキハ疑ヒ議スベキハ議ス。即チ天下ノ直道ニシテ我私ニ非ズ。」即ち上代史觀に對して批判的態度に出でてゐるが、この點は水戶の史學者のそれにやはり相通ずるものがあるとしなければならない。この神代史の解釋に於いて天地創造神話等に關する中世の一條兼良や下つて渡會延佳。山崎闇齋。加茂眞淵。本居宣長等を皆妄說牽强至らざる可なしと言つて居る。それから又

儒教道徳よりも排佛論の立場をとつてゐる事は、その聖徳太子論に於いても見る事が出來る。
白石の「古史通」の方法に對して「天神七代ノ間、神名ヲ多ク常陸ノ地名ヲ以テ附會ス、マスマス甚シ」と言ひ、寧ろ解釋を加へざる「大日本史」の態度に從ふべしとしてゐる。この點は白石程の獨創性はないが、又より徹底せるものであるとも言へる。尙國學や神道說の解釋に反對したのは、洋學の影響と言ふことも考へられる。國學派の宇宙論たる服部中庸の「三大考」を「無用ノモノナリ」。「珍說古今ニ類ナシ、其知及ベシ、其愚及ベカラズ」と酷評してゐるのは、一方「暦象新書」の地動說を擧げ「コレマデノ天地ハミナ地ヲ不動トセシニ、コノ書ハ天ヲ靜トシ地ヲ動ト」して「千歳ノ大疑ヲ決ス」と是認して居る所から當然であらう。(但し西洋に學ぶべきは文武の外、天文地理と醫術とであると言つて居るのは當時の一般の對外文明觀と變らない。かくて彼の合理主義。現實主義的の考へ方の由來は略々了解されたで　所で問題の一ツは宣長一派の國學者との思想上の關係である。これは結局に於いて儒教と國學との對立である。
蟠桃の國學批判は儒教及び洋學の合理論の立場から爲されてゐる。この批判が妥當なりや否やは別問題とするも、國學の裡に伏在する非合理性に對して鋭く批評を下せることは

注意すべきものがある。國學が學問方法論として精緻な文獻的言語學的方法を採りつゝも、中心の古道說の持つ宗教性よりして非現實的な絕對觀念を抱含してゐる。これは篤胤により或は洋學知識を攝取して彌縫されてゐるが破綻を隱し得るものではない。蟠桃が歷史に於ける神秘性を摘出して、歷史の姿を現實的合理的に考へようとしたことは近世史學思想史上特筆せらるべきものと思はれる。

## 考證史學

近世史學の諸傾向の裡に考證學的の一項を加へる必要がある。これは或は史學研究法と言ふべきものである。歷史を書く場合に一應その事實を資料によつて眞僞を考證して確定すると言ふ方法である。そこでこの態度から古文書學や史料學が次第に導き出され、これに對して史料批判をすると言ふ事が行はれてゐる。この考證主義は幕末に於いて頗る優勢となつたが、旣に近世初期に擡頭してゐる。前述せる如く林羅山の態度の裡にこれを檢出する事が出來るので、一種の合理主義・現實主義の史觀がその背後にあると見なければならないと思ふ。かくてこの學風は近世文化の特質を示すものであるが、又その發生、特に

史學に於ける考證的傾向の發生は我國史學界の特殊事情に依る處も少なくなかつたのである。即ち「本朝通鑑」の編纂にしても又「大日本史」にしても共に從來にない大規模な歴史を作る事であつたので、勢ひ先づ古書・古記錄等の史料蒐集から着手された。そこで此等の史料を用ひて、實際の筆を下す場合は一應それを吟味する。又異本が現れれば兩者を對校して定本を作ると言ふ事は必然に起る過程である。だからこの考證學的の傾向の發生は必ずしも時代思潮の上からのみ解釋さるべきものでなく、又實際の技術的要求から起つたものであると言ふことも考へなければならない。この點に於いて最も大きな仕事を爲した水戸の修史事業に就いて考へて見よう。

「大日本史」の編纂は周知の如く極めて大規模であつた。古書・古文書の採訪だとか、異本を集めて參考本を作るとか言ふ樣な地味な基礎的の仕事をかなり行つて居る。この史料學は加藤博士の指摘された樣に、支那清朝の考證學より早く、むしろ獨立的に起されたものであつた。つまり實際の事情から自然に起つたものであると言ふことも考慮しなければならない。

水戸の考證學と同時代に新井白石があつた。白石も又この方面には多大の關心を持つて

居り、安積澹泊と意見を交換してゐる。この樣にして先づ近世初期から中期にかけて考證史學・史料學と言ふものが發達したのである。中世の末迄は歴史は書かれたが、史學的研究・史料蒐集と言ふ樣なことは殆んど發生してゐなかつた。これは支那と比べると非常に後れてゐる。この時代となつて漸く史料の蒐集が行はれ出して、その整理・批判が起つた譯であつた。この點に於いて近世の考證史學は我國の史學界の特殊事情、その未開拓と言ふことから生れたので、獨創と言へば言へるし、又その遲滯の爲めとも言へる。

右の如くして我國の史學界の特殊事情から史料學とその考證が發達しつゝあつた所に幕末に至つて支那淸朝の考證學が入つて來た。抑もこの考證學は宋・明儒學の反動として起つた學風で經學研究上の問題であつた。事實求是と言ふ態度であつて、これが又史學の上にも現はれた。この學風が日本に移入されたのは、大體に於て文化文政時代頃のことである。もつとも朱子學に對して古學派が起り、初期の山鹿素行や中期の荻生徂徠の如き人もあり、考證的方法を歴史に應用してゐる。（徂徠の「南留別志」の如き）然るに寬政年間に幕府は朱子學以外を異學として抑壓した。そこで又折中學派と言ふものも發生した。この折中派の中に井上金峨・大田錦城等の人々が出で、更にこの金峨の門人から考證學の祖と言

はるゝ吉田篁墩が出たのである。篁墩は清朝の考證學こそ遵崇してその學風を受けたことは明らかである。彼は經學者で、主著も「經籍通考」・「論語集解考異」等であつたが、これより少し後れて狩谷棭齋が出た。棭齋も經學者で漢唐の古註學を仰いで居つたが、更に說文學・金石學にも傾倒して、その結果日本の金石文の研究に手を延ばして「古京遺文」を作つた。それからこの考證・勘校の學を、我が古典に及ぼして「日本靈異記考證」・や「扶桑略記校譌」・「上宮聖德法王帝說證註」・「日本現在書目證註稿」等の力作を殘して日本考證學の樹立とも言ふべき偉業を殘した。棭齋と同時代に松崎慊堂があり、後に澁江抽齋が出で、我國の考證學は支那に逆輸入さるゝの壯觀を呈したのである。（中村久四郎博士「清朝考證の學風と近世日本」讀史廣記所收）

右の清朝考證學の系統とは別に、國學に於ける考證學がある。この系統の源流は、近世の初期に遡る。卽ち中世の歌學が宗教に囚はれ、又古典の解釋が佛教や神道說に附會され、或は秘傳の蔭に隱されて、古代詩歌の眞の姿が失はれて居つた。これに對し近世人は先づ反抗の聲を擧げ、その附會說を批判した。戶田茂睡・下河邊長流に端を發し契沖に至つて一應の大成を見た。これは近世的な自由討究の精神と、中世を越えて直ちに古代に復する

と言ふ復古的精神を國文學の裡に吹き込んだので、經學に於ける伊藤仁齋等と相通ずるものがある。これが春滿・眞淵を經て宣長に傳承された。宣長に於いてその古代主義は絶對觀念として形成され、これが文献批判の方法に結びつき國學の體系が完成されたのである。そこでその絶對觀念たる古道を見出す爲めには古代の眞の姿を求めなければならない。故に古文献に對して一切の附會説を排し、特に漢意は勉めて排撃をした。かくて研究方法として言語學的に古の言葉を研究して、其處に自から精緻な考證的態度が生じた。彼の所説は山片蟠桃が妄説牽強と非難したが、その方法に於いて學問的であつたと言はなければならない。しかも斯くなり得たのはその復古主義の御蔭である。この點に於いて近世國學が史學上に與へた貢献は、頗る大い言はなければならない。（村岡典嗣氏「史家としての本居宣長」本邦史學史論叢所載）唯その方法の重點が古代主義に在つて、考證の方法は從であつた。だから科學的な歴史學に發展するには其間に尙相當の距離の存したことは否み難い。その裡には觀念論的分子を多分に藏し、末期國學に於ける宗教的傾向の發生を約束するものであつたのである。

この考證的傾向を史學的な方面に發達さしたのは直系の平田篤胤より寧ろ伴信友であつ

た。信友は宣長の古道說を受け神道の研究もしたが「神名帳考證」の樣な質實な考證をしてゐる。更に歴史的領域に研究を進め「中外經緯傳」や「長等の山風」を書いてゐる。この考證學風はその後の國學者・和學者の間に次第に廣まり、幕末明治初期に渉つてその業績は著大なるものとなつた。夫等に就いて一々說く事は出來ない。單に名前を列擧せば塙保己一・屋代弘賢・小山田與清・黒川春村・岡本保孝等があり、それが更に明治初期の小中村清矩・木村正辭・黒川眞賴と言ふ樣な人々に傳へられた。

かくてこの水史系・清朝考證學系・國學系の三つ考證學は相寄つて遂に明治の學界に受繼がれ、史學に於いては修史局を中心とする考證史學に流れ込んだ。これが更に西洋史學の影響を受けて現代へと進んだのである。この明治初期の考證史學が幕末の夫を如何に受けたかは重野安繹博士の「學問は遂に考證に歸す」(明治二十三年)と言ふ論文によつて知る事が出來よう。考證學と言ふものは、以上略述した樣に、近世の初期以來諸種の事情から發達し、それに支那の考證經學の思想も輸入されて幕末に至つては特殊の發達を爲し、特に官學に對して反抗的な空氣を背景として一種の批判者的意義を持つものとなつた。この意味で重要性があり、今問題とする史學思想に於いても看却出來ない存在である。そこ

で少しくその思想の內容に就いて分析を加へたい。右に擧げた論文に於いて重野博士は考證學者には町人が多い。と言ふことを指摘してゐる。棭齋は津輕屋三右衛門と言ふ江戶湯島の町人であつた。藩士だと異學禁に觸れるが町人はその點自由であるし、又資力と暇がある。そんな譯でこの方面に走る者が出たと言つてゐる。つまり考證學は官學でなく在野的、武士的より市民的、或は浪人的の性格を持つてゐたのである。そこで又考證學は市民の間に一つの流行となり、遂には何々考と稱する隨筆風の讀み物などが陸續として出版された。京傳や種彥・馬琴等の戯作者なども盛んにこれを書いたのである。こうなると全く市民の學問で、彼等の有閑の手すさびであり、市民文藝と相通ずるものが多いのである。現實を離れて考證に遊び、又官學に反抗しその野暮を笑殺して自ら高しとする氣持があつたのである。彼等考證學者は市民の最高知識階級であり、又洗練された趣味と教養の持主であつた。森鷗外の書いた「澁江抽齋」を讀むと彼等町人學者の雰圍氣が細々と描かれてゐる。主人公の抽齋にしても、中に出てくる森枳園にしても一流の考證學者であつたが、彼等は一面に劇を嗜み、洒落を解する。そして枯淡な考證の世界に面白さを感ずる文化人であつた。卽ち幕末のこの學風は末期封建文化の生んだ華であつた。故に同じく經學にし

ても朱子學に根ざしてゐる道學的なものは一切拔き棄てられ、その束縛から解放されたものとなつて居る。この幕末の考證學は江戸が中心であつた。これに對して大坂市民の間にも市民的な學統があつた。懷德堂はその中心であり、全く市民の獨力により築き上げられたものであつた。この學風に就いては曾て内藤虎次郎博士が興味を持たれ「大阪の町人と學問」（日本文化史研究）と言ふ有益な論文があるからそれに讓つて置く。又平田派の國學にしても市民階級の間に深く流布して居つた。その反儒教、反官學的の性格が末期封建社會の市民意識と相通ずるものがあつたのである。（伊東多三郎氏「國學の史的考察」）

この樣にして幕末の考證學は反官學的の所産であつた。併し幕政時代は遂に在野的のもの以上に出ることは出來なかつた。これが明治となり支配機構の轉換と共にこの在野的の勢力は次第に擡頭して、遂に史學の世界に於いては反つて官學系の人々に採り上げられ、朱子學的の封建史學打破の武器となつたのである。この點に就いては第三編に於いて再び述べて見たい。

# 第六章　史學研究法

## ——古文書學——

所謂古文書學と言ふ組織的な學問乃至研究法が我國で始められる樣になつたのは、勿論明治以降のことである。それは西洋の史學研究法乃至古文書學 Diplomatik の影響によるものであつた。リース・坪井九馬三博士等によつて將來せられ、ついで重野安繹・久米邦武・星野恒・黑板勝美の諸博士によつて次第に組織立てられて來た。これ等の問題は後の話であるが、この日本の古文書學の組織さるべき素材、即ち研究の對象たる古文書の蒐集・分類・鑑定・利用等は既に江戸時代には盛んに行はれて居つた。現代の我古文書學はこれを組織的學問的に再編成せるものである。この間の過程を示すものとして重野博士の「古文書學」と題する講演（「重野博士史學論文集」上卷に收む）を擧げたい。明治二十八年東京學士會院に於けるものであるが、それは坪井博士から西洋古文書學の話を聞かれ、我國では古文書學と言ふ名こそ無かつたが、（重野博士によるとこの名稱は修史局で設けたもの」とある。）

二百年も前から事實は立派に行はれたと言ふ趣旨から、江戸時代の古文書の採訪・考證・鑑定・利用・印章等に渉つて話して居られる。内容は一場の講演であるが、我古文書學の成立を語る資料として興味があるものである、右の様な次第で古文書に關する研究は江戸時代に於いて洵に誇るべきものがあつたのであつて、近世史學史上逸すべからざるものなのである。我國の古文書學、換言すれば廣義の史料學であるが、これは外國の影響と言ふより寧ろ、我國の史學研究上の特殊事情から自然と發生せるものである。これに就いては前章に一寸指摘して置いた。以下その實際に就いて概述して見よう。

　支那には金石學や說文學が早く發達して居つたが、古文書學は起らなかつた。これはその材料たる古文書が次々と逸散堙滅されたからであらう。然るに我國ではその古文書が澤山殘つて居る。勿論散逸し勝ちなものであるが、それにしてもよく保存されて居る。これには色々の事情もあつた。「六國史」以來正史の編纂打絶へ、修史事業は中世を通じて殆んど行はれず、鎌倉幕府の「吾妻鏡」の如きは稍これに近いものと言ひ得る位である。(この裡には文書が收錄されて居る。)その爲めに記錄・古文書等は一ケ所に蒐集されず、方々に散在して反つて保存されて居つたのである。是でこの古文書は先づその家系を示すもの

であり、又特に所領の相傳を示す根本の證據であり、更には土地所有權がこの證劵たる文書によつて代表され、手繼文書の形式で相傳された、その他賣買・契約等は皆文書によつて行はれたので、上は大名・社寺より武士・農民に至る迄これを大切にして居つた。

斯樣にして文書が分散して居つた爲めに、場合によつて堙滅もされたが、又災害もまぬかれる結果となつた。今日舊家・社寺に古文書の殘つて居るのはそれが爲めである。次にこの古文書は土地其他の紛爭に際し唯一の證據であるから、裁判などの際には證據物件となる。そこでこれが眞僞等の判定等も行はれて居つた。更に一方支那から書道が輸入され大陸文化の華として仰がれ、又我國でも名家が輩出して書を珍重する風が盛んとなつてゐる。この書の鑑賞と言ふことが起ると共に特に「手鑑」と言ふ形式が創案された。古筆の蒐集は茶湯の流行などに伴ひ室町から近世にかけて流行すると共に、その僞物も作られ、その結果は古筆の鑑定を職業とする古筆家が出來た。この書道並びにその鑑賞は古文書研究の關係があると言へよう。發達に深い

次に故實有職の學の一部として早くから書札禮が起つて居る。これは書道とは異り、文書の作法、即ちその形式の研究で、これは古文書研究とは密接の關係あるものと言へよう。

併し之等は文書に就て多少の研究的意識は認められようが、史學の一翼として古文書研究と言ふ意識は無いと言つてよい。古文書が史料たる意識の下に蒐集され、研究され、利用されるに至つたのは近世卽ち江戸時代に至つてからの事である。

近世に入つて愈々修史事業が勃興するにつれて史料として古文書を求むる事は自ら起つたと言つてよい。卽ち六國史以來修史と言ふ事は殆んど打絶えてゐる。其所で若し史を編まんとする場合は先づ資料を蒐集しなければならない。その資料として先づ指を屈すべきは古文書と日記其他記錄及び古典籍である。德川家康が慶長元和の頃舊家社寺から古典を蒐めた事は古書保存の上に著しい功績があつたのであつたが、當時は古文書には及ばなかつたであらう。そこで羅山の研究には成書を用ふるに止まつて居り、しかも資料の不足を歎じてゐる。ところが寬永頃から古文書の整理や採訪が段々と行はれ出してゐる。その起因となつたのは同十八年の寬永系圖編輯であつて、この時諸家では夫々家傳の古文書が利用された跡がある。それから「本朝通鑑」・「大日本史」の編修開始と共に實際の必要上愈々本格的に古文書の採訪が始まつて居る。「本朝通鑑」は羅山の事業を完成するものであつたが、その記述の範圍は神代より後陽成天皇に及び、資料の蒐集には多大の骨を折つて

# 第六章　史學研究法

## ——古文書學——

所謂古文書學と言ふ組織的な學問乃至研究法が我國で始められる樣になつたのは、勿論明治以降のことである。それは西洋の史學研究法乃至古文書學 Diplomatik の影響によるものであつた。リース・坪井九馬三博士等によつて將來せられ、ついで重野安繹・久米邦武・星野恒・黑板勝美の諸博士によつて次第に組織立てられて來た。これ等の問題は後の話であるが、この日本の古文書學の組織さるべき素材、卽ち研究の對象たる古文書の蒐集・分類・鑑定・利用等は既に江戸時代には盛んに行はれて居つた。現代の我古文書學はこれを組織的學問的に再編成せるものである。この間の過程を示すものとして重野博士の「古文書學」と題する講演（「重野博士史學論文集」上卷に收む）を擧げたい。明治二十八年東京學士會院に於けるものであるが、それは坪井博士から西洋古文書學の話を聞かれ、我國では古文書學と言ふ名こそ無かつたが、（重野博士によるとこの名稱は修史局で設けたもの とある。）

二百年も前から事實は立派に行はれたと言ふ趣旨から、江戸時代の古文書の採訪・考證・鑑定・利用・印章等に渉つて話して居られる。内容は一場の講演であるが、我古文書學の成立を語る資料として興味があるものである、右の様な次第で古文書に關する研究は江戸時代に於いて洵に誇るべきものがあつたのであつて、近世史學史上逸すべからざるものなのである。我國の古文書學、換言すれば廣義の史料學であるが、これは外國の影響と言ふより寧ろ、我國の史學研究上の特殊事情から自然と發生せるものである。これに就いては前章に一寸指摘して置いた。以下その實際に就いて概述して見よう。

支那には金石學や説文學が早く發達して居つたが、古文書學は起らなかつた。これはその材料たる古文書が次々と逸散堙滅されたからであらう。然るに我國ではその古文書が澤山殘つて居る。勿論散逸し勝ちなものであるが、それにしてもよく保存されて居る。これには色々の事情もあつた。「六國史」以來正史の編纂打絶へ、修史事業は中世を通じて殆んど行はれず、鎌倉幕府の「吾妻鏡」の如きは稍これに近いものと言ひ得る位である。この書には文書が收錄されて居る。その爲めに記錄・古文書等は一ケ所に蒐集されず、方々に散在して反つて保存されて居つたのである。處でこの古文書は先づその家系を示すもの

であり、又特に所領の相傳を示す根本の證據であり、更には土地所有權がこの證劵たる文書によつて代表され、手繼文書の形式で相傳された、その他賣買・契約等は皆文書によつて行はれたので、上は大名・社寺より武士・農民に至る迄これを大切にして居つた。

斯樣にして文書が分散して居つた爲めに、場合によつて堙滅もされたが、又災害もまぬかれる結果となつた。今日舊家・社寺に古文書の殘つて居るのはそれが爲めである。次にこの古文書は土地其他の紛爭に際し唯一の證據であるから、裁判などの際には證據物件となる。そこでこれが眞僞等の判定等も行はれて居つた。更に一方支那から書道が輸入され大陸文化の華として仰がれ、又我國でも名家が輩出して書を珍重する風が盛んとなつてゐる。この書の鑑賞と言ふことが起ると共に特に「手鑑」と言ふ形式が創案された。古筆の蒐集は茶湯の流行などに伴ひ室町から近世にかけて流行すると共に、その僞物も作られ、その結果は古筆の鑑定を職業とする古筆家が出來た。この書道並びにその鑑賞は古文書研究の關係があると言へよう。發達に深い

次に故實有職の學の一部として早くから書札禮が起つて居る。これは書道とは異り、文書の作法、即ちその形式の研究で、これは古文書研究とは密接の關係あるものと言へよう。

併し之等は文書に就て多少の研究的意識は認められようが、史學の一翼として古文書研究と言ふ意識は無いと言つてよい。古文書が史料たる意識の下に蒐集され、研究され、利用されるに至つたのは近世即ち江戸時代に至つてからの事である。

近世に入つて愈々修史事業が勃興するにつれて史料として古文書を求むる事は自ら起つたと言つてよい。即ち六國史以來修史と言ふ事は殆んど打絶えてゐる。其所で若し史を編まんとする場合は先づ資料を蒐集しなければならない。その資料として先づ指を屈すべきは古文書と日記其他記錄及び古典籍である。徳川家康が慶長元和の頃舊家社寺から古典を蒐めた事は古書保存の上に著しい功績があつたのであつたが、當時は古文書には及ばなかつたであらう。そこで羅山の研究には成書を用ふるに止まつて居り、しかも資料の不足を歎じてゐる。ところが寛永頃から古文書の整理や採訪が段々と行はれ出してゐる。その起因となつたのは同十八年の寛永系圖編輯であつて、この時諸家では夫々家傳の古文書が利用された跡がある。それから「本朝通鑑」・「大日本史」の編修開始と共に實際の必要上愈々本格的に古文書の探訪が始まつて居る。「本朝通鑑」は羅山の事業を完成するものであつたが、その記述の範圍は神代より後陽成天皇に及び、資料の蒐集には多大の骨を折つて

居る。その經過は「國史館日錄」によつて窺はれるが、この蒐集に就いて幕府當局の多大の支援があつたのである。その一端は編修開始と同時に次の如き命が出て居るので分る。「其頃編年錄御用ニ付諸國之寺社傳持候舊記類可ㇾ書出ㇾ旨被ㇾ仰出ㇾ之」（林氏先祖書控寛文四年八月の條）この樣な背景のあつた爲めに諸大名等からも古書・古文書が段々呈出されて、これを筆生に抄寫せしめてゐる。（日錄寛文四年十一月十日等）「本朝通鑑」の引用書を見ると金勝寺官符・寺社舊證文・多田院證文・公家證文・武家舊證文・異國贈答等の文書類が擧げられてゐる。

「大日本史」編纂の爲め水戸藩の行つた古文書採訪は全國的であり極めて大規模である。由來水藩の修史事業はその基礎事業として資料の蒐集に勉めたことは驚くべきものであつた。獨り古文書のみならず古典古記錄あり、これで參考本の作成が行はれて居る。併し地方の史料採訪は自然古文書が主となつて居つた。天和元年に吉弘元常・佐々宗淳等が畿内紀伊の古社寺を巡囘した。この時の成果が「南行雜錄」である。貞享二年宗淳及丸山可澄が山陰山陽西海の三道を採訪した。この成果が「西行雜錄」として殘つてゐる。この後屢々採訪を行はしめた。その結果「古簡雜纂」・「金澤蠹餘殘簡」・「續南行雜錄」・「又續南行

雜錄」・「史館古簡留」等の編纂が殘つて居る。この古文書採訪を始めたのは光圀で、その存生中は編纂よりも資料蒐集に力が盡された觀がある位である。この採訪が成績を舉げ得たのは親藩たる水戸家と言ふので頗る便宜を受けたのであるが、又其間には色々手も盡し費も投じたらしい。この採訪に對する光圀の方針は「一紙半紙にても御用に立可申候物反古之内にても見出し候事も可有之間捜覽尤之由被仰候」とある如く頗る徹底的である。當時やはり古文書の蒐集を熱心に行つた加賀の前田綱紀がある。有名な松雲公であるが、これは蒐集のみが目的であつた。水藩の方は資料として求めるのが目的であつたから、大抵は必要の部分を抄錄せしめてゐる。即ち修史上に古文書利用と言ふ意識から出てゐるので「南行雜錄」等を見てもそのことは窺はれる。この點は加賀藩と水藩の著しき對象であつた。

水戸藩の古文書採訪に關する記錄は今日京都帝國大學に所藏されてゐる。この文書によつて大體が紹介せられたものに三浦周行博士の「大日本史の史料採訪」（日本史の研究第二輯）がある。

幕府の古文書採集に「貞享書上げ」がある。諸大名以下町人遊民迄三河以來德川氏關係

の文書を書き出さしめ、凡そ九十三冊百三十卷あつたと言ふ。（好書故事）この材料が「武大成記」として編成された。尋いで古文書の調査採訪は八代吉宗の時に青木昆陽が御書物御用として元文寛保年間に行つたものが大きい。元文元年四・五月に駿河國一圓に今川北條兩氏の證狀等其他の古文書の寫出しを命じた。（この時の書上げた古文書四十八册、今內閣文庫に「判物證文寫」として殘つて居る。）更に元文五年七月に昆陽をして採訪に出張せしめてゐる。この時は甲州信濃に行つた。寛保元年には武藏國、二年には相模伊豆遠江參河を巡廻した。この結果は重要なものが影寫され、「諸州古文書」として殘つてゐる。この時の影寫は頗る精密で印章の如きも細かく寫され、古文書に對する研究的態度が見ゆると言ふ。その採訪の範圍が皆德川氏に關係のある土地であることはその目的が奈邊にあつたかを知らしむるものであらう。

尋いで江戶時代には諸國の地誌の編纂が行はれてゐるが、この資料として古文書が蒐集され又利用されてゐる。この編纂に於いて一種の歷史地理的研究が爲されてゐる事は注目に價する。この歷史地理的研究に古文書が盛んに用ひられてゐるので、爲めに諸國の古文書が蒐集され今日に殘つたものも少たくないと思はれる。幕府編纂のものは「新編武藏風

土記稿」(文政十一年成)、「新編相模風土記稿」(天保十二年成)等あり、その他紀伊家の「紀伊續風土記」(天保十年)、松平定能の「甲斐國志」(文化十一年成)等がある。(内務省地理局の「地誌目錄」等參照)

右の如くして幕府を始諸大名等に於いて夫々古文書の採集を行つてゐるのである。その目的が如何なるものにせよ、これによつて古文書の保存と研究上に至大の貢献のあつたことは疑ひない。これがやがて歴史的研究への利用へと進むのである。古文書の蒐集はやがてその整理と分類へと進ましめる。この分類は凡そ科學的研究方法の基礎たることは言ふ迄もない。江戸時代の古文書學はこの分類學的のものであつたと言へよう。

古文書を分類整理する事は近世の初期に諸家で行つて居るのに萠す。前述した樣に我國では古文書はいたく尊重されてゐる。つまり家々の家系由緒を示すものとして相傳され、これを傳ふる者が正系とされて居つたからである。江戸時代に入つて家系家格を一定せしめると言ふ事は色々な意味で重要視されたので、寛永系圖の作成や、貞享書上げの命令などもこの爲めに行はれた。そこで諸家の古文書整理もすべてこの線に添ふて爲されて居つて、系圖に照して嫡流庶流により整然と分類される樣になつた。江戸時代の初期迄は古文

書が主として差出人を主として一托されて居る傾向であつたが、やがて文書の受取人を本位として整理されてくる樣になつた。これは家々の家系系圖を本位として古文書を見ると言ふ傾向の然らしめたものであつた。寛永年間周防岩國の吉川家の整理はこれを最もよく現すものと言はれてゐる。これは極めて興味あることであると思はれる。

相田二郎氏「武家に於ける古文書の傳來」（史學雜誌五十ノ一）

右の樣にして古文書なるものが段々史料的となり、且時代に卽して整理され來つたのであるが、勿論未だ一般的な分類ではない。古文書を一般的に分類したのは松平定信の「古文書部類」が最初であらう。定信は古書古物を愛好し、又その堙滅を懼れて色々の仕事を行つてゐる。「集古十種」・「古書類聚」の如きその一例である。「古文書部類」もその姉妹編として作られた。八十二冊より成り、その內容は宸筆・綸旨・勅宣より釋書・書牘・雜に至る迄五十四種に分類してある。內容は何れも江戶時代以前のものでこの點から言つても史料として蒐められたことが分る。又編纂に就いては「古きものゝ俤をだに長く世に傳へて、歷代の史のたすけともなさん」と侍臣に語つた。弘く史料として集成すると言ふ意識があつたのである。（樂翁公傳）今日原本は失はれてゐるが、恐らく精密な模寫であつ

たらう。而してこの書は不幸刊行の意企ははたされなかつたが、その寫本が帝國圖書館に殘つてゐる。定信にはこの外「白河證古文書」がある。この他當時編纂された古文書集には小宮山楓軒の「楓軒文書纂」・新見正路の「賜蘆文庫文書」・伊勢御巫清直の「徴古文府」・「釋古帖」あり、又諸藩の編輯には毛利家の「萩藩閥閲錄」・島津家の「舊記雜錄」・山内家の「蠧簡集」の如き大部のものがある。

古文書研究には花押の事も缺くべからざるものがあるので、自然この方面にも注意されてゐる。花押に就て水戸の丸山可澄と言ふ人が「花押藪正續」を編し、松崎慊堂の「古押譜」がある。又印章を集めたものには古印では穗井田忠友の「埋麝發香」や藤井貞幹「集古印譜」がある。忠友は正倉院文書の整理などもした人で古代文書の研究には記憶さるべき人である。この「埋麝發香」も今日は一部の「印部」だけ殘つたがその目錄によると古代文書に關する大著述であつたらしい。(彌富濱雄氏「穗井田忠友家集小傳」參照)次に金石文の研究もある。この金石文の研究は元來支那で早く發達して居つた。これが幕末の考證學者に強い影響を與へて、奈良朝時代の金石文の蒐集や研究を行はしめてゐる。即ち狩谷棭齋・藤井貞幹等があり、棭齋の「古京遺文」・貞幹の「好古小錄」・忠友の「觀古雜帖」等

は先づ指を屈すべきものである。

右の様な古文書の研究の外これを實際の史學研究に着目したのは山鹿素行の「武家事紀」であると言はれてゐる。寛文十三年の著作であるから早いとしなければならない。續集二十九卷以下を「古案」として武家の文書を家わけにして蒐めてある。日下寛氏が曾て「古文書を歴史に應用するは何人に昉る耶」（史學雜誌四ノ四二）と題してこの素行の書を紹介した。但し實際の叙述は主として戰記類に依り古文書は單に收錄しただけであるが、少くとも資料編とでも言ふ様な形で附載してゐることはその史眼の勝れたることを示すものであるとしなければならない。（古田良一氏「山鹿素行の史學説」文化一ノ一）

右の如くして江戸時代には古文書に關する蒐集と分類とが段々行はれ來つてゐる。且又之を史學研究に利用する傾向も見えてゐる。勿論それが充分に發達したのは明治以降であるがその萠芽的なものは立派に發生して居つて、後の古文書學成立の準備を爲して居つたのである。

重野博士「古文書學」（重野博士史學論文集上卷）。黒板勝美博士「國史の研究總説」。相田二郎氏「江戸時代に於ける古文書の採訪と編纂」（本邦史學史論叢）。同氏「元文寛保年間に於け

る幕府の古文書採訪—(歷史地理五三ノ六・五四ノ一)參照

# 第二編

# 近世に於ける西洋史の研究

# 第一章　近世初期に於ける西洋文明觀

我國に西洋史研究が本格的に開始されたのは勿論明治以降である。江戸時代の西洋史研究はこれに比してあまりに懸隔があり、且つその研究の系統も別個と言つてよい。だから同日の談ではない。極端に考へると史學史上の問題と爲すより、寧ろ洋學史上の一部門として取扱つた方が妥當である。併し明治二十年代以降の西洋近代史學移植はその前提として明治初期の所謂文明史觀の輸入があり、その前提として洋學の一部門たる西洋史知識の研究が考へられる。この江戸時代の西洋史學は明治初期の文明史觀輸入の上から見ると決して看却出來ない問題と思ふ。斯樣な見地から以下この問題を取り上げて見たいと思ふのである。のみならず、管見に於いてこの方面の研究は比較的等閑に附されて居つた。本論の如きも甚不充分な資料より構成したもので尙遺漏も多いと思ふ。

從來この方面に關しては吳秀三博士の「箕作阮甫」。同博士「洋學の發展と明治維新」（明治維

新史研究所收）に簡單な記載がある外、池田哲郎氏の「明治三十年以前の西洋史」（明治以後に於ける歴史學の發達所收）の裡に言及がある。

江戸時代の西洋歴史の知識は最初世界地理知識に附屬して輸入された。吳秀三博士は佐藤信淵の「西洋列國史略」を以つて西洋史の嚆矢と言はれてゐる。西洋通史としての著作はこれ以前にはない。併各國史としては既に前野良澤の「魯西亞本紀」（寛政五年）などがあるから必ずしも西洋歴史の嚆矢とは言はれない。更にその內容を分析して見るとその源流と見らるべきものがその以前に見出される。

信淵の著作以後幕末にかけ西洋史に關するものは相當見出される。これによつて西洋文化の理解は單に空間的に爲されたのみならず、時間的に擴大され、やがて明治の西洋知識へと發展し、これが日本歴史の研究の發展に對して推進力を附與し、更に又所謂文明史の勃興をうながしたのである。卽ち明治初年の文明史への理解の爲めにこの江戸時代の西洋史學に對して檢討の鍬を下さなければならないと思ふのである。

日本とヨーロッパとの直接の接觸はポルトガル人の來航に始まつた。南歐人の東方進出

の浪が遂に天文十二年我九州の南端種子島に押し寄せ來つたのである。この時に新文明の利器を表象する鐵砲が傳へられた。この劃期的な事件は直ちに同十八年耶蘇會士ザビエルの渡來を召致し、茲に切支丹宗の傳道が始つて、西洋の精神文明の一端が日本に植つけられたのである。邪宗門として間もなく追放の悲運に際會したが、この宗門に伴ふて入り來つた西洋文化は近世日本の發展の上に金線の如くつき纏ふて、鎖國日本の國際化に對して消し難き作用を爲したのである。ザビエルの傳道は歐船の初渡來より僅か七八年の後である。彼等の東洋侵略の上から見れば東方更に一島國を見出したので、その活躍の舞臺は一歩その境域を廣めた譯である。そこでその浸入の歩調は急速に進められ鹿兒島より平戸・豐後と急流のそゝぐ樣に奔流した。

當時の日本は戰國騷亂の混亂せる社會が漸く信長・秀吉の力によつて近世封建社會へと再編成せられつゝあつた頃である。中世の庄園的農漁村から近世的商都市の形成が漸次進められ、商業資本の萠芽的發生を見つゝあつた。更に諸大名も土地資本家より商業資本家的へ轉化して夫々の領國に於いて自己の領主權の確立を計ると共に武力的と經濟的の侵略をする勢に迫られ、日本全體の大きな轉換期の渦中に投ぜざるを得なかつた。この變革の

過程の歸する所は信長秀吉家康と言ふ一聯の事業によつて表象される大きな歴史的展開となつたのである。かくて庄園的の自己經濟から貨幣經濟に發展し、中世の分立的經濟網が破壞され、全國的の經濟圏成立へと進むと共にその餘波はやがて國を越へて海の外へと流出せざるを得ない、この形勢の所へ丁度西歐の商業資本が手を差し延べ來つたのである。

ヨーロツパの東方進出に就いてその社會經濟的背景は茲に說く迄もなからう。唯その經濟的進出は宗教權の消長と密接な關係を有した。東方にこの頃最も力のあつたポルトガルスペイン等であつた爲め、プロテスタントに對する抗爭と再興の爲めにロヨラによつて起された耶蘇會士の强烈な戰鬪的傳道意識が東洋の島國に襲ひ來る樣になつた。そこでこの初期の日歐交渉はその一面に於いてカソリツク的の文化を將來し、後の新教的の文化とはその趣を異にするものとならざるを得なかつた。

斯樣にして近世初期には日本の統一と發展が西歐文化との交渉と言ふ劃期的な事件と結びつゝ進められた。この海外交渉が當時の歴史的進行の上に如何なる影響を及ぼしたかと言ふ樣な問題は茲に問はない事として、その文化的寄與のみに就いて述べて見よう。最も大きなものは言ふ迄もなくキリスト敎と言ふ西洋文化の一支柱と我思想との接觸であるが

その問題は後に觸れる事として、この宗教と共に西洋の知識がやはり輸入されて居る事を見逃してはならない。卽ち天文學・地理學・數學・醫學・兵學等の知識が僅かながら傳へられてゐることは日本が漸く世界文化史の上に第一頁を開いたものと考へなければならない。特に世界地理知識の輸入は日本人の空間意識を擴大せしめ、廣義の我洋學の曙光と見るべきものであつた。世界地圖や地球儀は南蠻渡來の寶物として珍重せられ、のみならず我國でも製作され、絢爛な桃山藝術に彩られて大名や巨商の居間を飾つて居つた。更にこの海外交通の結果我國人の南方進出に作ひ實際上の必要上から天文學、特に航海術が學ばれて居つた事などは寧ろ驚くべきことであり、彼の「元和航海記」の如き記錄が今日迄殘されてゐる。兵學に於いては鐵砲の傳來と共に、築城術が傳はつた。

次に之等の形而下の文化に對してデウスの救ひを說くキリシタンの傳來はこの時代の日歐交涉をして多彩なものたらしめた。ザビエルの傳道は鹿兒島に於いて早くも百數十人の信者を得て前途を祝福された。そして平戶から博多山口を經て京都に上つた。併しこの時は未だ戰亂の餘燼去らずして、引返したが、その後トルレスは遺鉢を繼ぎ、大內・大友等の諸侯の信を得、この宗門の興隆は目覺しいものとなつた。天正年間には大友・有馬・大

村の三侯より遣歐使節の派遣と言ふ如き反應を見た。然るにこの歐行使の出發と殆んど時を同じうして秀吉の統一政策と衝突し、遂にその傳道の運命は逆轉し、茲に迫害の手がさし延べられ、引續く壓迫と闘はねばならなくなつた。そして邪宗と言ふ恐しい烙印を押され遂に追放の運命をたどることゝなつたのである。

この禁教政策の出現は勿論政治的の理由が先づ數へ上げられなければならない。併しその裏には精神文化として我國の既成宗教を主體とする思想體系との交錯の存せし事も見逃してはならないであらう。既成宗教として佛教がある。佛教は中世の國民思想の支柱として、廣大な寺領を背景とする寺院勢力の上に立ち、この時代に於いても尙傳統的勢力は依然たるものがあつた。そこでこの外來宗教に對しては直ちに對立と排撃の抗爭を生じ、所謂排耶論を展開した。これに次いでは新興思潮たる儒教の排耶論がある。この儒佛と切支丹との思想爭闘は近世初期思想界の大きな問題で、それは間もなく禁教と鎖國と言ふ決定的な事件によつて自然に解消されたが、西洋の精神文明に對する日本思想の批判として、茲に少しく注意して置きたい。

近世を通じてキリスト教は、カソリツクと言はずプロテスタントと言はず、一樣に邪宗

異教として排擊されて居つた。後期に於いては水戸藩の排耶論を代表とし、終始思想史上一つの主潮を形作つて居つた。耶蘇邪教觀はその根底に耶蘇教は日本を浸略する手段であると言ふ樣な誇大に失した謬見に捕はれ、それが遂に拭ふべからざるものとなつて居つた併し江戸時代の人々が總てそれを邪教として懼れ近づかなかつたかと言ふに中には荻生徂徠の如く「吉利支丹宗徒ノ書籍ヲ見ル人無キ故ニ其教如何ナルト云ヲ知ル人無シ、儒道佛道神道ニテモ惡ク說タラバ吉利支丹ニ可紛モ計難シ。是ニヨリテ吉利支丹ノ書籍御庫ニ有ラバ儒者ドモニ見置レテ邪宗ノ吟味サセ度者也」（政談）と言ふ如くその教義に對する無識を憂へて居つた者もあつた。更らに幕府の嚴重な監視にもかゝはらず、その禁書に屬する漢籍も潜入して居り、その他諸種の機會を通じて耶蘇教に關する知識は少しづゝ流布して居つた事は今日それを證明する資料が殘つてゐる。

この禁教政策が崩壞するに至つたのは、幕末の開國に端を發し、明治社會に至つて信教自由制の確立によつて終るのである。かくて近世初期以來邪教觀によつて曇らされて居つた西洋文明觀は漸く一掃された譯である。

右の如くして近世初期には一端西洋の精神文化が輸入され、しかもそれに對し相當確か

な理解に迄進んだこれが鎖國禁教によつて遮斷されてしまつた。爾來は天文・醫學等の形而下の知識のみが攝取され、精神文化の方面は寧ろ排撃に傾いて居つた。この偏重が西洋の歴史的知識の理解にもブレーキをかけて居つたことは否み難いであらう。

後述する如く、近世中期以後に漸次現はれた西洋史への關心も、その立脚地が西洋文化の理解と言ふのでなく、やはり鎖國的な立場から、如何にして外國の浸入を防禦せんとするかと言ふ排外論・國防論の見地よりするものであつた。從つて其所に描き出されたものは彼の僞らざる姿でなく、擴大的に歪曲されたものが多かつた。或は又その侵略的態度を誇大に書いたものが多く、到底西洋史學として優れたものではない。醫學天文學等の眞直な學徒とは相當の距りのあるものであつた。從つて明治以降の近代史學とは殆んど關係なく幕末の開港と共に鎖國的の根底が解消すると共に跡方もなく後退してしまつた。只其の間に多くの眞摯な洋學者の努力のみは、今日洋學史の上に不朽の名を止めて居るのである。

切支丹の傳道が副産物として西歐文化の種々相を我國に傳へた事は前に言つた。その種

に學問の體系に關する知識の在つたことは我洋學史上興味をひくものである。「契利斯督記」の裡に「學問之事」の一項がある。下つて新井白石の「西洋紀聞」や「采覧異言」にもこれに關する記述がある。西洋天文學や地理學の優秀なることは近世初期の學者が既に認識する所であつた。所でこの方面の知識を一層組織的に齎したのは支那に於いて耶蘇會の宣教師の著した漢籍であつた。その一つとして「西學凡」(天啓三年に成る、我元和九年)を擧げよう。これは艾儒略 (Giulio Aleni の著で西洋の學問や學校制度の事を書いたものである。これによると諸國夫々小異大同があるが學問は六科に盡きて居る、文科(勒鐸理加)、理科(斐錄所費亞)、醫科(黙第濟納)、法科(勒義斯)、教科(加諾搦斯)、道科(陡祿日亞)是れである。この裡文科は先づ語言・文字の學が第一である。文藝の學に四種あり、一を古賢名訓、一を各國史書、一を各種詩文、一を自撰文章議論、是である。學校に於いては文學を習ふ者先づ其文筆を試み後その議論を試む。議論を試むる法に五端がある先づ物を見、事を觀、人を觀、時勢を觀ると爲し、それより種々論じて居るが、要之先づ修辭學辨論法と言ふ樣な事を敎へる事となつて居る。斯くてこれを一通り學んでから、理學卽ちヒロソヒアに進むと爲して居る。理學は義理之大學也と言つて居る。この書の意す

る間は尚これに盡きる譯ではないが、今問題とする史學は文科の裡に置かれ人を觀、時勢を觀る學問と言ふことになつて居る。

更に又同じ著者の「職方外紀」の歐邏巴總說中にも學校の事を說明して、各國に大學・中學・小學が在りと爲し、その小學に文科があつて、その科目を古賢名訓・各國史書・各種詩文、文章議論學の四種として居る。卽ち「西學凡」の說く所と同樣である。この學問の分類は當時の西洋に行はれたものを傳へたものであらう。これによると歷史は事實を觀る學問で、哲學に入る前提となつて居る。學問として高い位置は與へられて居ないが、敎科や道科とは別個に取扱はれて居る點が注意される。

右の學問論が當時何れだけ實際の影響を及ぼしたか。「西學凡」・「職方外紀」は共に寬永七年に禁書となつて居る。併しそれ等は若干潛入して流布した跡もあつたが、勿論當時の史學思想を動かすと言ふ樣なことはなかつた。近世の洋學が大體に於いて和蘭を經た新敎系であるに對して初期の西洋文化はカソリツク系であつた。そこでカソリツク系の文化は禁敎と共に殆んど一掃され僅に潛在せるものに過ぎなかつた。「西學凡」などに盛られた知識もこの情勢から後の學界への影響も殆んど無かつたのではなからうかと考へられるので

に學問の體系に關する知識の在つたことは我洋學史上興味をひくものである。「契利斯督記」の裡に「學問之事」の一項がある。下つて新井白石の「西洋紀聞」や「采覽異言」にもこれに關する記述がある。西洋天文學や地理學の優秀なることは近世初期の識者が夙に認識する所であつた。所でこの方面の知識を一層組織的に齎したのは支那に於いて耶蘇會の宣教師の著した漢籍であつた。その一つとして「西學凡」（天啓三年に成る、我元和九年）を擧げよう。これは艾儒略 Giulio Aleni の著で西洋の學問や學校制度の事を書いたものである。これによると諸國夫々小異大同があるが學問は六科に盡きて居る、文科（勒鐸理加）、理科（斐錄所費亞）、醫科（默第濟納）、法科（勒義斯）、教科（加諾搦斯）、道科（陡祿日亞）是れである。この裡文科は先づ語言。文字の學が第一である。文藝の學に四種あり、一を古賢名訓、一を各國史書、一を各種詩文、一を自撰文章議論、是である。學校に於いては文學を習ふ者先づ其文筆を試み後その議論を試む。議論を試むる法に五端がある先づ物を見、事を觀、人を觀、時勢を觀ると爲し、それより種々論じて居るが、要之先づ修辭學辨論法と言ふ樣な事を敎へる事となつて居る。斯くてこれを一通り學んでから、理學卽ちヒロソヒアに進むと爲して居る。理學は義理之大學也と言つて居る。この書の論ず

る所は尚これに盡きる譯ではないが、今問題とする史學は文科の裡に置かれ人を觀、時勢を觀る學問と言ふことになつて居る。

更に又同じ著者の「職方外紀」の歐邏巴總說中にも學校の事を說明して、各國に大學・中學・小學がありと爲し、その小學に文科があつて、その科目を古賢名訓・各國史書・各種詩文、文章議論學の四種として居る。即ち「西學凡」の說く所と同樣である。この學問の分類は當時の西洋に行はれたものを傳へたものであらう。これによると歷史は事實を觀る學問で、哲學に入る前提となつて居る。學問として高い位置は與へられて居ないが、敎科や道科とは別個に取扱はれて居る點が注意される。

右の學問論が當時何れだけ實際の影響を及ぼしたか。「西學凡」・「職方外紀」は共に寬永七年に禁書となつて居る。併しそれ等は若干潛入して流布した跡もあつたが、勿論當時の史學思想を動かすと言ふ樣なことはなかつた。近世の洋學が大體に於いて和蘭を經た新敎系であるに對して初期の西洋文化はカソリツク系であつた。そこでカソリツク系の文化は禁敎と共に殆んど一掃され僅に潛在せるものに過ぎなかつた。「西學凡」などに盛られた知識もこの情勢から後の學界への影響も殆んど無かつたのではなからうかと考へられるので

あるが、ともかく右の様な學問の體系と、それに歴史の學問も見える事は一顧に値するであらう。

# 第二章　西洋知識の資料

幕末開國前後以降は別として、それ以前に於ける我國の得た外國知識は極めて限られたものであつたが、決して日本人が世界の動きから全く盲目となる程に貧しくはなかつた。その僅か乍らの知識が次々と集積されて日本の世界史的發展の基礎を與へた。以下その源泉となつた重なるものを列擧して見よう。先づ當時輸入された洋籍に就いて見る。

江戸時代に如何なる蘭書が何時輸入されたかと言ふことは、洋學史研究上最も重要な基礎工作であるが、今日は大方逸散し又書目のみ傳へられる程度で調査は困難である。併し相當の種類が入つて居つたと思はなければならない。幕府の官庫を始め、諸侯の秘庫、其他蘭學好事家の許にあつたものである。幕府のものでは近藤正齋の「好書故事」に一部の名を止めて居る。諸侯では平戸の松浦家のものなどは今日も尚多く襲藏されて居る様である。（長崎に於ける洋籍の輸入に就いては古賀十二郎氏の「海外交渉中心地としての長崎」開國文化

所收を參照）

江戸幕府は切支丹の潛入を極度に防止する方針をとり、從つて支那和蘭人以外の入國を禁止する外、文獻による切支丹の傳播を嚴しく取締り、所謂禁書政策を勵行したが、それは直接蘭書には關係なく、漢籍にして西敎の說に觸れたものを禁じたのである。そして禁書の書目は法定され、長崎の役官が一々輸入書に就いて取調べた。蘭書の方はこの意味の禁書には關係なく、吉宗の享保の解禁令もこの問題に因んで從來誤解があつたとされて居る。蘭書にしても基督敎關係のものは當然許されない譯であるが、それ以外のものは禁ぜられては居なかつた。天文・醫書・本草書・地圖などは早くから時折甲比丹によつて幕府に獻上されて居る。「通航一覽」所載の拜禮獻上品の目錄の裡にも見えるし、現に白石がシドッチ訊問の際に使用したヨハンブラアの世界地圖の如きもその一つであつた。

もとより一般的の流布は殆んど見られなかつた。併し特別の範圍には段々蘭書が輸入され、蘭學が發達するに伴つてこれ等の書を解する力が普及して來、文獻を通じての西洋知識が發達して來なければならない。この蘭書による西洋知識の普及の問題は極めて廣汎な問題である。そこで玆では少しく西洋の地理歷史に關するものを擧げよう。

この時代に西洋の國勢沿革等の知識に關する文献の一つは世界圖である。ヨハンフラアの圖の附説が天明六年桂川甫周・大槻玄澤によつて譯出され、爾後に影響を與へた。更に當時最も行はれた種本の一つは新村博士の「天明時代の海外知識」などで夙に解説されてゐるヒユブネルの「ゼオガラヒ」Johan Hübner: Allgemeene Geographie. である。「ゼオガラヒ」の名で弘く通つてゐる。題名の示す如く地理書であるが、當時の西洋家が金科玉條としたもので、その一部は屢々譯出され、又この書名の散見するものは少なくない。一七六九年の出版とあるから明和六年に當り、その後の輸載であるから丁度天明寛政頃より海外の物情瞭然となる時代の洋學者が最新の西洋知識の源泉としたのも當然であつたらう。この書名の散見するものを舉げてみるに天明元年脱稿した球卿工藤平助の「赤蝦夷風説考」下卷に「國名をヲロシアといふ根元を尋ぬるに、阿蘭陀書物の内々」とし、その參考書として「千七百六十九年明和六年開板のゼヲカラアヒ」と誌してゐる。

それから林子平の「三國通覽圖說」にも「安永年中小子肥前ノ鎭台館ニ遊事シテ崎陽ニ至リ和蘭人アーレントウエルヘイトニ會フ、ヘイト其地理書ゼオガラーヒノ說ヲ談ジテ云々」とその書名がみえる。甲比丹もこの新版の地理書を持參して大いに日本人の心眼を攫れし

めたのであらう。

又桂川甫周の「北槎聞略」や大槻玄澤の「蘭學階梯」にその名がみえる。甫周・玄澤ら一派の蘭學者達はこの書をみて居つた事が分る。そこで玄澤に師事して親交のあつた福知山侯朽木龍橋の名著「泰西輿地圖說」の如きも確かにこれを利用して居り、その卷九に書名がみゆる。

下つて箕作省吾の「坤輿圖識」にも參考書として用ひられてゐる。以上は容易に目に觸れたものであるが、未だその利用された例は多いと思はれる。又その飜譯としては前野良澤の「東砂葛記」・桂川甫周の「魯西亞志」等がある。

次に同じヒユブネル著の「コウランテントルコ」、Johan Hübner: Kourantentolk　この書は新村博士の解說によると「予のみた京都帝國大學本は一七四八年（寬延元年）ライデンの刊本で矢張舊幕時代舶來の書であるが、內容は十八世紀前半期の智識を集成したものである。コーランテントルコとは時事通覽とも義譯すべき世界地名辭書にして是も最後まで蘭學者の寶典となつた本である」（天明時代の海外知識）。「增譯采覽異言」・「邊要分界圖考」・志筑忠雄の「鎖國論」もこの書を參考して說明を補つてゐる。「蘭學階梯」にも前書同樣書

名がみゆること勿論である。その抄譯は宮内省圖書寮所藏にかゝる古賀洞庵の舊藏本に「コトランツトルコ地誌」・「和蘭國談」の二書があつた。

近藤正齋の「好書故事」卷八十、蘭書三、歴史の部には三種の書名がみゆる。第一は「興兎弗利以鐸西洋全史一冊」（原名ゴツトフリーヂ、ヒストリゼゴロネイキ）。これは獨乙書の蘭譯で、一六六〇年出版でかなり古い本である。古代より一六六〇年に至る西洋史である。次の「花蓮感舊集」は西洋史に直接關係はない。第三「先哲小傳」（原名ビヲグラピスウァールデンブーク、デルネーデルランデン）即ち和蘭人名辭書、著者カルモツト、一七九八年刊の三部である。

この他には尚後述する前野良澤・山村才助・宇田川榕菴・箕作阮甫等の譯書の原本となつたものが數部ある譯である。これ等に就いては充分調査の機を得ないが、以下各譯書の解說に少しく述べた。

例へば鷹見泉石の舊藏本に「學校用和蘭史」（一八一六年版）、「和蘭略史」（一七五八年版）等がある。（寛永以前西洋輸入品及參考品目錄」幕末の蘭書普及を見る資料として「典籍叢談」（日本古典全集本）の蘭本の部は、元來この書が本屋の手控だけに面白い。この裡に西洋史關係のも

の若干あり、中に箕作阮甫が鑑定したと註記も見ゆる。

洋籍と並んで當時の西洋知識の源流となつたものは支那では出來た世界圖及び世界地理書である。世界圖では支那に布教中の耶蘇會士利瑪竇のものが行はれた。次に地理書では同じく艾儒略（Giulio Aleni）が天啓三年（元和元年）に編輯した「職方外紀」、南懷仁 Ferdinand Verbiest の「西方要紀」・「坤輿圖說」・「坤輿外紀」等である。この裡「職方外紀」は禁書となつた。（享保五年に解禁）併し之等の書は相等に流布して居つて西洋研究の上に有力な資料を提供して居つた。「職方外紀」は西川如見の「增補華夷通商考」・新井白石の「采覽異言」・山村才助の「增譯采覽異言」等に直接或は間接利用されてゐる。（鮎澤信太郎氏「江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外紀に就て」地球二四ノ二）

更に下つて幕末に至ると漢籍を通じての西洋知識の吸收は力强く行はれてゐる。これに就いては曾て中山久四郎博士が詳しく調べられたものがある。（中山博士「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響」史學雜誌二五編）これは獨り歷史地理方面に限らない。例へば法律方面も然りであつて、彼の國際法の思想の如き幕末外交問題の急迫と共に實際の必要にせまられた結果、ホイートンの原書をウヰリアム・マルチンが漢譯して出版した「萬國公法」

が飜刻され、それが非常に讀まれた。又西洋の立憲思想が同樣にして學びとられたものであつたことは尾佐竹博士の研究によつて周知の事である。

尾佐竹猛博士「維新前後の立憲思想」・同博士「萬國公法と明治維新」(維新史叢說)

扨てこの西洋知識の媒介となつた支那本はその數は相當多い。大きなものには「海國圖志」がある。これは米人ブリヂメンの原著を林則徐が漢譯せしめ、魏源が諸書を輯錄して出版したるもので漢文の地理書としては最も良かつた。これが我國に入つて當時の識者に世界の形勢を教へた。嘉永七年以降箕作阮甫・鹽谷宕陰等により訓點が附されて順次飜刻され一層普及をした。正木篤の譯した「美理哥總記和解」の如き通俗的の譯本もあり、この他和文に譯した本も散見する。又「聯邦志略」が箕作阮甫によりて訓點を附され、「地理全志」は安政六年岩瀨忠震により飜刻せしめられ、清の徐繼畬の著「瀛環志略」は文久元年井上春洋・森荻園・三守柳圃の訓點を以つて出た。右は大體地理書であるが、この外史書も存する、之等の地理書は地理と言ふもその內容は極めて廣汎で、歷史的記述も含まれてゐる。寧ろ廣義の海外情勢の教科書と言つてよいものであつた。

中山久四郞博士「近世支那より維新前後の日本に及ぼしたる諸種の影響」(讀史廣記)

扨て支那書媒介による西洋知識の吸收は「職方外紀」以來幕末に至る迄相當重要な役割を爲したが、併しこの時代を最後にして維新後はその情勢で用はれたに過ぎず、これに代つて福澤諭吉の「西洋事情」の如く直接日本人の見聞を基礎とした西洋文物の紹介が登場するに至るのである。

文献以外に海外情勢の耳目となつたのは、和蘭風説書、即ちニユースである。出島商館長の日記には Nieuws 即ち News とある。この風説書の起原は寛永末正保の始頃で、現在殘つてゐるものでは正保元年のものが最も古い。その目的は當初鎖國禁令の對照たるポルトガル・イスパニアの所謂南蠻諸國、特に切支丹潜入の防衛の爲めであつた。然るに段々年の下ると共に幕府の要求する所は廣くなつた。歐洲一般の情報・印度の風説・支那の風説に及ぶ樣になつた。之を和蘭は日本に對する御奉行筋・御忠節（通航一覽）として提出して居つた。その內容は遡る程正確で、自國には不利な報道すらしてゐるが後には虛報も少なくないと言ふ。之等は日蘭貿易の必迫と共に外交辭令として或は已む得ないであらう。勿論之等の風說書は有司以外嚴密とされて、「あやまりでも、彼地方のこと藥をいひしもの

は嚴刑をまぬかれず、たとひ其言葉を聞傳しものも敢て口より出すべき事にもあらず」（西洋紀聞）と言ふ有様であつた爲「西洋紀聞」中卷イスパニア王位繼承戰爭（一七〇一－一七一四）に關する記事は寶永七年以降の風說書を利用せること歷然である。この樣にして極めて嚴密であつたが、特別の人々はこれを利用して居つた。

最近板澤武雄氏が延享二年に至る一五七通を複刻され、附するに解題を以つてし「阿蘭陀風說書の研究」として刊行された。右風說書の說明は板澤氏の解題に據つたことを御斷りして置く。

風說書は板澤氏の研究によつて知らるゝ如く、極めて價値が高い。今本論の問題に限るも右に述べた樣に白石が利用をして歐洲の史的情勢を書いて居る。勿論風說書はニュースであつて歷史ではない。又それは非合法的に漏れることがあつたとしても一般に流布はされたものではなかつた。故に當時の西洋の史的研究の材料としてはたしてどれだけ役立つたか否かは問題であらうが、併し少なくとも長崎の和蘭通詞の間にはその知識が殘つて居つた譯である。それが段々彼等の間に蓄積され。それが又一般に流布したと言ふことも考へなければならないであらう。この故に於て當時の西洋知識の源泉であり、又その史的知識の一つの源泉であつたとしなければならないであらう。平澤元愷や林子平が北方問題を

高唱するに至つたのも、元は長崎種の風說であつた。「通航一覽」卷二四六に引用の「暎詠餘話」に幕府が風說書を徵した由來を述べ、これにより我國は「滿世界萬國の治亂・興廢・風俗・事情をもしろしめ給ふの益少からずと覺ゆ」とある。即ち各國の治亂興廢、當時の言葉で言ふ歷史を知つた譯であつたのである。

この風說書は幕末に至る迄繼續した。そして明治の新聞は純然たるジャーナリズムとなつたが、幕末のものは未だ風說書の延長である。面白いことにはヒコの「海外新聞」やペリーの「萬國新聞紙」には特に西洋歷史の講座の樣なものが揭載されてゐる。これなどは封建時代的のものでなく、新しい西洋史知識の啓蒙と言ふ色彩のものである。

次に外國人と直接の交涉は長崎の出島に渡來した歐人によるものと、我が漂民が直接彼地に於いて得た見聞(即ち漂流記の類)である。江戶時代は周知の如く長崎の蘭館には甲必丹以下の館員が滯在して居り、その中には必ず醫者も加へられて居つた。この甲必丹を始め醫官の裡には學者として優れた人々も多く、彼等は傍ら日本に關する硏究を試みその結果を公にして歐洲に日本を紹介した。ケムペル・ツンベリイ・チツイング・ツイツセル・

シーボルト等はその代表的の人々である。彼等の裡には和蘭商館員の資格で來てゐるが實は蘭人以外の者もあつた。ケムペル・シーボルトは獨乙人である。特にシーボルトなどは表面は醫官であつたが、實は日本の研究を目的に派遣された者であつた。そういふ譯でこれ等の歐人は高い教養の所有者であつたから彼等が我洋學者に與へた影響は實に大きかつたのである。特に彼等は一度は江戶に上つて將軍に謁するのを例としたが、この江戶參府は又江戶其他の人々が直接歐人に接觸して知識の獲得に勉める唯一の機會であつた。「專ら官醫の志ある方々は年々對話といふ事願て、彼客屋へゆき療術方藥の事を問給ひ、又天文家の人も同じく其の家業の事を問ひ給へり。當時は其人々の門人なれば同道し給へる事も自由なり。左あるにより其方々の門人と唱へ出入もありたり。長崎は御常法ありて猥りに旅館への出入はならぬ事なるに、江戶は暫くの間の事なれば、自然と構もなき姿なりき」と「蘭學事始」に書いてある樣に蘭人との對話によつて新知識の獲得に努めた。この對話の記錄されたものが色々と居つてゐる。例へば「阿蘭問答」・「紅毛譯問答」等の外大槻玄澤の「西賓對晤」は學術的價値が最も高い。斯樣にして歐人との學問的交涉は相當に行はれて居つた。この交涉の最も大規模であつたのはシーボルトを中心とするものであり、そ

の周圍に多くの洋學者が集つて居つた。長崎には鳴瀧にゼミナールを開いて門人を養成し、又門人を助手として日本研究をした。（吳秀三博士「シーボルト先生」。日獨文化協會編「シーボルト研究」）

嚴令を布いて國民を一歩も洋外へ出すまじとした鎖國の禁は皮肉にも天風に導かれてこの島國民を蠻夷の國へ行かしめたことによつて事實上破られたのであつた。幕府の威もこの漂民の發生は如何ともする事が出來なかつたのである。彼等は何れも微賤の商人か漁民であつたが、その裡には遠く首都に赴き皇帝に謁し歐洲を巡廻して無事歸還せる者もある。我國は島國で舟行の便に惠まれ沿海の航路は盛んに利用されて居つたが、稍もすれば颶風潮流に災され絕域に漂流する者が少なくなかつた。彼等にして幸ひ生還る者はその流浪の話を殘したので所謂漂流記の類は數多く殘つてゐる。（石井研堂氏編「漂流奇談全集」に代表的のものが收めてある。）この漂民は色々の意味で近世日本の動向に深い陰影を投じたものであつた。先づ日本に通交を求むる諸外國特にロシアはこの漂民を利用ぜずに置かなかつた。公式に始めて日本の門戶を叩いた露使ラックスマンは伊勢の漂民幸太夫の送還を名とした。又この漂民の裡にはロシアの對日本策研究の爲め、日本語教授などに用ひられて居つ

た。かくて我が漂民は計らずも、彼が日本開國運動の先導となつたのである。彼等漂民はもとより教養識見に秀でた者ではなかつたが、泰西文明の一端を親しく見聞して歸つた者である。この知識が當時の日本としては實に貴重ものであつた。彼等の觀察は淺く記憶も曖昧であつたが、幸ひにも我國の洋學者によつて整理され組織され組織的な見聞記となつたものもある。幸太夫の漂流記たる桂川甫周編の「北槎聞略」と仙臺の津太夫の記たる大槻玄澤編の「環海異聞」はその双璧と爲すものである。この兩者の如きは飜譯祖述でなく、日本人の立派な西洋研究である。しかも臆說獨斷なく能ふ限り正確な資料を用ゐたる點その價値は頗る高い。之等の漂流記の價値に就いては新村博士の「伊勢漂民の事蹟」や復刻本「北槎聞略」にある龜井高孝氏の解說等に詳である。

# 第三章　新井白石と山村才助

中世末期より近世初期に渉る日歐交渉の曙光時代にはその對照は主としてポルトガル・スペイン等の南歐諸國であり、これに尋いでイギリス・オランダが登場した。洋學史上よりすれば未だ所謂蠻學の時代である。この時代に切支丹教義が傳へられ、又これに伴つて地理學・天文學・醫學・兵學等の泰西學術が輸入されたことは既に述べた如くである。この時に西洋に關する全般的の知識は地理學、と言ふより彼の世界圖や地球儀による極めて粗雜なものであつたが、ともかくこれによつて我國の地理知識の擴大されたことは爭はれないであらう。

鎖國時代に入ると、我國の世界知識は急激に後退する。鎖國の嚴令と、對外關係の一應の清算によつてその必要も未だ中期以降程に見られなかつた。寶永年間の新井白石の研究はこの惰眠を破るものであつた。これに就いては後述するとして、その以前には長崎の西川如見の「四十二國人物圖」や「華夷通商考」などが注意される位である。「華夷通商考」

は元祿八年に二冊本として刊行され、後寶永五年「增補華夷通商考」五冊となつて再版が出た。華は支那で、これと通商する夷即ち東洋南洋諸國とヨーロッパのオランダ・ムスカウベア・ドイチランド等の諸國に關する粗雜な記述がある。通商考とある通り長崎商人の目から見た西洋で、各國とも日本からの距離とその風俗・風土を誌し、これに土產と題して物產を列擧してある。だから歷史的記述は必要でなく全く無いと言つてよい。この書は長崎に於いて支那人や和蘭人から出た話その他「職方外紀」・西吉兵衛の「諸國土產書」(寬文九年)や、「異域叢話錄」(延寶九年)などがその粉本であると推定されて居る。この書は凡そ長崎通詞の持てる西洋知識の大略を推察せしめるものである。これに對して寶永六年新井白石が直接シドツチに質して得た世界知識は遙に水準の高いものである。往々白石を以つて洋學の祖とする說もあるが解釋によつては當つて居ようと思ふ。ともかく「まさに五十三歲の活きざかりを、非常な意氣込を以て事に當つた一代の俊英な彼と單身生命を堵して絕東の異域に布敎を志した偉僧とが互ひに些か知り得た異語の覺束ない知識ながら渾身の智能を注いで質問應答相繼ぎ相駁した有樣は單にめざましい一場の壯觀であつたのみならず、その結果としては實にわが國洋學の興隆の端緒ともなつた意義深いものであつたので

ある。」（岩波文庫版「西洋紀聞」村岡氏解題）このシドッチと對質の結果「西洋紀聞」を作り、更に又甲必丹にも質して「采覽異言」を書いた。この二書は近世西洋研究の發祥を爲すものであり、特に後者は後年山村才助により增補された意味に於いて極めて意義が深い。以下主として前著に就いて解說を加へよう。

「西洋紀聞」は東西の俊才の間に生れた驚異すべき記錄である。先づその概要に就いて述べて置く。その內容は三卷となり、上卷はシドッチと對問の次第、中卷は對問の結果得た世界地理等の記述、下卷はシドッチ渡來の處志と天主敎儀の大要と之に對する批評とより成つて居る。然らば中卷の記述はどうして成立して居るか。彼がシドッチに質す前に持つて居つた豫備知識はどんなものであつたか。

この寶永六年は寬永鎖國以來七十餘年、キリシタンの潛入も殆んど跡を斷ち、シドッチを以つて最後とする。そして吉宗の洋學獎勵や靑木昆陽の蘭語硏究の始まる以前である。つまり西洋知識は一般に最も乏しかつた時代である。白石は儒家として立ち、大名將軍の諸問によつて經書や日本史を講じて居つた。その上政治的問題に對しても識見と手腕を持つて居つた。併し西洋に關する知識はそれ迄殆んど持つ必要もなかつたのである。然るに

このシドッチの潜入は幕府に於いても極めて重大視し、特に信任のあつた白石をして訊問せしめたのであつたから白石も又精魂を盡してこれに對し、傍ら西洋知識の獲得に勉めた。訊問の用意として奉行書から參考としてキリシタン關係書三冊を借りた。又地理に關しては官庫藏のヨハン、マテアの世界地圖(この地圖は、恐らく寛文十二年三月甲必丹 Camphuijs 獻納のものと言ふ)を示して問ふた。口繪に掲げたのは宮内省圖書寮所藏の白石自筆謄寫の「山海輿地圖說」である。恐らく「釆覽異言」・「西洋紀聞」著作に際して參考として自ら寫したものであらう。末に「萬曆壬寅孟秋吉日歐邏人利瑪竇謹誌」とある。

白石はこの利瑪竇の世界地圖を詳しく研究し、更に又「三才圖繪」・「月令廣義」・「天經或問」・「圖書編」等の世界圖を參照して記述をして居る。利瑪竇の地圖は我國でも權威を持つたものであつたが、白石はこれに滿足せず、その誤を正さんと意氣込んで居る。その結果に於いて反つて誤を犯した點も少なくなかつたが、又白石によつて利氏の譯の誤の指適されて居る部分も少なくない。白石は世界をエウロパ・アフリカ・アジア・ノヲルトアメリカ・ソイデアメリカの五大洲として居る。然るに利氏の圖では歐邏巴・利未亞・亞細亞・南北亞墨利加・墨瓦蠟泥加として居る。白石はアメリカを南北としてメガラニカを削

つて居る。これはフラアの地圖によつて削除したらしいが、これに就いて色々と考證を述べて居る。我國で出來た世界圖は白石の後も依然このメガラニカを描いて居る。白石がこれを削つたのは卓見であつた。斯樣にして世界地圖を色々比較して立派な考證をして居る事は時代に先んじた業績であつた。（藤田元春氏「新井白石と利瑪竇」史林十六ノ二）

勿論この書は歷史的知識が目標となれるものではない。地理書と言ふのも狹きに失する。「紀聞」の二字こそ本書の性質をよく表現する言葉である。史的記事としては先づ舊約聖書の天地創造神話が記されて居る。造物主たるデウスから、パラダイスに於けるアダム・イブ追放等の記述で、これは當時歷史として取扱はれたのでなく、天主教義の根據として問題とされたのである。勿論之等の神話は白石以前より知られて居つた事は、幕府の宗門改方の記錄と言はれる「契利斯督記」などの裡にも大體見られる。そして排耶論の眼目として論議され、旣に林羅山が慶長年間耶蘇會の不干ハビアンとの問題の際にもこれを採り上げて居る。白石もこの神話は荒誕淺陋辨ずるに足らず、皆佛氏の說によつて作る所なればと斷じ、且つ「卽今共說によりてヲ、ランド鏤板の地圖に據るに、そのデウス隆生の地ジユデヨラのごときは西印度の地方を相去る事遠からず、又共說にヱイズスいまだ生れざる以

前、ジュデョラのみデウスの教ある事をしる。其他はことぐ\く皆佛教を尊信したりといふ。さらば西天浮圖の説、其地方に行はれし事、ヱイズスが法のさきにあり。今ヱイズスが法をきくに造像あり受戒あり、灌頂あり、誦經あり、念珠あり、天堂地獄輪廻報應の説ある事佛氏の言に相似ずといふ事なく其淺陋の甚しきに至りては同日の論とはなすべからず」と言へるは東西文化の接觸を地理的の立場から論ぜるもので、その論の當否は別とするも白石にしてある卓見である。これによつて見ても世界圖の輸入は地理的立場から世界の事情の解説に多大の力の存した事が分る。さてこの天地創造神話は其後の書物に引續き記されて居る。山村才助の「西洋雜記」から佐藤信淵の「西洋列國史略」なども古代史をこの開闢説によつて始めて居る。即ち後にはキリスト教義宣傳の意味のみではなく、歴史的立場から人類創生の傳説として取扱はれるに至つて居る。ほかに天主教の教義の説明があるが、それは別として、日欧交通史的記載、又天主教渡來のことを説いて居る。即ち中卷ホルトガルの條に詳しく見え、その他フランデヤ・アンゲルア等の條にもある。之等は日歐交渉史的記事と見てよいものであらう。

中卷は大體に於いて世界地理の説明で、前述した樣に二三の世界地圖を幅ョにして説い

てあるからどうしても地理的說明に終始して居るが、中に歷史的にその國の成立を說明して居る所もある。例へばオランダの條ではイスパニアとの關係などを說ける如きものがあり、又その卷末には附記として當時のヨーロツパの形勢を書いて居るのも又我々として注意に價する。その最後に「按ずるにゼルマニア、フランスヤの戰始りし事は、本朝元祿十三年庚辰に當れり。兵運なる事十四年にして事たいらぐ、此年本朝正德三年癸巳也。」とある樣に最も新しいニユースであつて、敢へて歷史とは言へないが、當時歐洲を騷して居つたスペインの王位繼承戰爭、即ちスペイン王チヤールス二世嗣なく、その王位をねらう佛王ルイ十四世の孫フイリツプと獨帝レオポルト一世の孫バヽリア侯ジヨセフフエルヂナントがあり、これからやがて獨佛の勢力爭ひとなり、遂に兩派の戰爭となつた事を書いて居る。この記述が和蘭風說書に據つて居ることとは別に記して居た。

右の樣にして拾ひ上げて見ると白石は世界の形勢を考へるのにやはり由來に遡り歷史的に考へようとする態度が見ゆる。もとより當時は世界地圖と甲心丹やシドツチの話を唯一の材料とするより外なかつたから、これ以上歷史的考察を展開する事が出來なかつたが、若し白石をしてもう少し後に生れしめたならば西洋歷史に關する優れた研究を爲さしめた

であらう。

幕末の西洋史研究の先驅者として新井白石と共に山村才助を擧げたい。白石は蘭語の研究こそしなかつたが、鎖國以後の西洋研究者として筆頭を飾る人である。近世の西洋學は彼によつて開かれたと言つて過言でない。然るに寛政・享和年間に至つて大槻門下の俊髦山村才助によつて白石の「采覽異言」が增訂された。即ち白石の研究はこの時代に至つて一段と發展せしめられたと言はなければならない。才助及びその師大槻玄澤等の輩出した天明より寛政享和時代は我洋學の興隆から全盛の期である。青木昆陽・野呂元丈等によつて培はれたものが「解體新書」の譯述によつて型態を整へた。そこで又地理、尋いで歷史的方面も白石の研究が一段と飛躍を遂げ、蘭文原書による正確且つ廣汎な研究となつたのである。この新學風を代表する者が實に山村才助であつた。

山村才助、名は昌永、字は子明、號は夢遊道人、土浦の藩士である。始め杉田玄白に蘭學を問ひ、後大槻玄澤の門に入つた。(「蘭學事始」「新撰洋學年表」は寛政二年入門とす)

歿年より逆算すると明和七年の誕生である。幼少より輿地の學を好み、その結果「訂正增譯采覽異言」の大著を完成し、世界地理學に於いて屈指の大家となつた。才助が玄澤の門に入つた寛政の前後は江戸蘭學界に名家が多數輩出して居つた。桂川甫周・大槻玄澤・司馬江漢・橋本宗吉・朽木龍橋等は何れも地理學方面にも多大の貢献を爲した人々である。

此より先き江戸の初期には利瑪竇の世界圖が舶載され、これが流布して我國の世界知識に典據を與へて居つた。その影響を見るべき世界圖も色々刊行されて居つた。（蘆田伊人氏「本邦地圖の發達」）その間に新井白石の研究があるが、これは世に公にせられては居ない。從つて坊間の世界知識は依然停滯の狀態に在つた。然るに享保五年の禁書令一部の解禁があり、次いで明和・安永・天明と我北邊はロシアの南下が表面化して急を告ぐるに至り、洋外の情勢を等閑に附することが許されなくなつたので、茲に朝野の間に西洋地理の研究が蓊然として起る形勢となつた。

天明六年の春曾て新井白石がシドツチに示して西洋の地理を問ふたと言ふ官庫秘藏のヨハンフラアの世界圖を司天臺に見出し、桂川月池（甫周）と大槻玄澤が圖の附說を譯述した。これが「新製地球萬國圖說」で譯述の由來は同書の凡例に詳しい。又玄澤の隨筆に關係記事

があつた。「白石先生ノ嘗テ西圖（采覽異言ニ）ト稱スルモノハ官庫御藏輿地大全（和蘭ニハンフラア撰）ナリ。昔シ今ノ堀田原天文臺新築アリテ後舶來天地球及此西圖軸ノモ其館中ニ發下ス。寛廿四五ノ時天明初年桂川國瑞甫周君ニ陪シテ其館中日官吉田靱負の官舍に到り、請フテコレヲ拜見スル事ヲ得タリ。シカルニ其圖幅ノ周邊ニ數行ノ横文アリ。コレ其各地ノ略說ナリ。吉田氏ニコノ譯說ヲ請フ。桂子爲メニコレヲ謄寫ス。寛亦加功シテ寫了其功ヲ竣ヒテ持歸ル。桂子コレヲ譯スルニ當テ寛亦會議校正ニ與ル云々」（槃水先生隨筆卷之十九）との譯述は白石以來殆んど忘れられて居つた地圖が再び世に出たことであつて、寛政以降の世界地理研究の勃興の種を蒔いたものであつた。かくて甫周・玄澤とはこの研究に關心を寄するに至つたが、偶翌七年に當時來朝中の西醫斯突都兒（ストッツル）より西刻の地球全圖を得た。（「家藏西刻地球全圖記」槃水漫草收所）

更に兩人は杉田玄白がヒユブネルの「ゼオガラヒ」を獲たるを聞き、これを熱心に研究した。（「題地球全圖」寛政三年、槃水漫草所收）斯樣にして世界地理の研究は甫周・玄澤などを中心に極めて活潑な動きを見せて居つた。これが更に又西洋史の研究の誘因ともなつたのである。（蘆田伊人氏「橋本宗吉著喎蘭新譯地球全圖に就いて」歷史地理七四ノ五）才助が西洋

地理學研究の志を抱いて玄澤の門に入つたのは丁度この時代であつたのである。

才助の西洋地理研究は彼自ら言つて居る如く師玄澤に負ふ所が多い。玄澤は杉田玄白の門より出で、蘭學の地位を確立するに最も功績のあつたことは喋々を要しない、醫學を主としたがその學問は視野廣く、蘭學發達期に於ける啓蒙的の仕事を爲した。名著「蘭學階梯」その他の啓蒙的著述が及ぼせる影響は頗る大きい。又芝蘭堂を開いて多くの門人を養生し、その裡よりは多數の俊才を出した。著作頗る多く、一部は「磐水存響」に收められて居る。今日大槻家に殘る「磐水雜抄」。「磐水先生隨筆」等を見ると學は和漢洋に渉り、醫學。本草其他歴史地理各方面のものがあつてそゞろ博渉の跡が忍ばれる。玄澤の西洋地理的著述には「環海異聞」を推すことが出來る。漂民の斷片的記憶を土臺とし、廣くロシア關係の文献を參照して作り上げた結果は見事なものである。(同書序例附言を參照)才助は頗る學才を愛せられ、特に西洋地理歴史の方面に於いては最も重じられた。その自筆稿本が玄澤によつて鄭重に保存されたものが今日大槻家にある。(寫眞に掲出した「讀鳴蘭新譯地球全圖」もその一つである。)

才助の著作は數多い。中に「西洋雜記」と「訂正增譯采覽異言」の二書は名高い。後者

は十三冊の大著である。その自序によると地理學を好み夙に白石の「采覽異言」を愛讀し、異本を集め、遂に自己の研究の結果を增補して完成した。撰述の年代に就いては享和二年の玄澤の序があり、大槻如電氏の「大槻磐水」には享和三年三月完成とある。玄澤の序に「其說精詳明備、增績重訂之功、蓋白石先生所未能盡之地海云々」と激賞して居る。その完成には非常の努力を注いだもので玄澤も「鑽研不倦雖疾風雷雨、咫尺可辨、寒往暑往、幾無虛月、知天地唯介茂賞」と言つて居る。この努力はその卷首を飾る引用書目を見ても窺はれる。西籍三十二・漢籍四十一・和書五十三の多きに上つて居る。漢籍の中には「坤輿全圖」・「艾氏萬國圖說」・「坤輿外紀」等がある。和書には「泰西輿地圖說」・「魯西亞本紀」等當時の關係文獻は大方擧げられて居る。洋籍はこれ又豐富なる點當時として博覽を誇るに足るものであらう。地圖・紀行等の外に歷史では「西洋全史ゴツドリィト撰」・「拂郞察國王羅德勿乙吉第十四世實錄」・「魯西亞國志」（恐らく才助の譯出した「魯西亞國志」の原本）等がある。增譯として「萬國航海圖說」Peter Goss : Zeeatlas. と「萬國傳信紀事」Johan Hübner : Kourantentolk. の二書より抄出せるものを揭げて居る。本書の特色は說く迄もないが、才助が單に西書の說を傳譯せるのみならず、至る所に「昌永按」として自

の創造說を述べペルシヤ・ギリシヤよりローマに至り、中興革命即ちキリストの誕生に至つて居る。この革命とは西洋紀元元年を意味し、西洋諸國は皆これを正朔として奉じ別に年號は立てないと言つて居る。この他にも斷片的ではあるが、西洋暦法の說・西洋天文の原始等歷史に因ある記事もある。中には荒唐な記事もあるが、その記する所は歷史・政治・風俗・宗教の各方面に涉り彼の西洋知識の博大を窺はしめる。所々に按を附して居る。聖書の創造に就いて「是は今の神道者と稱するものども强て己が私意を以て上古の事へ理を附會するに同くして此說最怪誕なるべし」と言つて居るのは興味ある批評であるが、山片蟠桃と同じ樣な儒教的の思想からと解釋したい。

才助の著譯は前揭二書の外に「外紀西語考」（寛政八年、自筆本大槻文庫藏）・「讀喎蘭新譯地球全圖」（享和元年、自筆本大槻文庫藏）・「大西要錄」（飜譯享和三年、自筆本大槻文庫所藏）・「魯西亞國志」（飜譯、文化三年）・「印度志」（飜譯、文化四年）・「飜譯東西紀游」（飜譯文化初年）・「華夷一覽圖」（文化三年）・「地學初問　坤輿約說」（飜譯、自筆本大槻文庫藏）等がある。

才助の學風は一々正確な典據によつて立言して居る。又考證に頗る長じ、全體として緻密である。飜譯に就いては原本と參照して見ないが、恐らくその學風から考へて立派であ

山村才助自筆　讀喎蘭新譯地球全圖　大槻茂雄氏所藏

つたらう。且つ翻譯と雖へども自らの考證を附記するを忘れない。右に舉げた「外紀西語考」は初期のもので、罫紙十六葉計りのものである。「職方外紀」所載の地名に羅甸語と和蘭語を對照記入せるもので、所々に「坤輿全圖」等も參考されて居る。「采覽異言」增譯中の研究の一端であらう。又「讀喎蘭新譯地球全圖」（挿入寫眞參照）は「若水樺抄」十九に合綴されて居る十三葉計りの稿本である。これは橋本宗吉の「喎蘭新譯地球全圖」（岡田氏前掲論文參照）の詳密な駁論である。玄澤が宗吉の地圖の誤謬の指摘を才助に命じ、才助はその稿を作つて玄澤に呈出した。これが玄澤により保存され今日に殘つたのである。宗吉は才助と同時代に一度玄澤の門をくぐり、大阪に歸つて寛政八年早くもこの世界圖を出版した。才助の方は當時未だ緻密な研究に沒頭中である。そこでこの世界圖に對するやこれを精査し、遂に宗吉の研究は蘭文原典にも當らず、僅かに「采覽異言」。「泰西輿地圖說」等を種として作つたもので、從つて「采覽異言」等の誤謬も引繼ぎ、且己れの臆說を加へたる等を逐條辯斥して居る。例へば歐羅巴の說に「三部ニ分ナ各天子アリ」の文句に「永按スルニコレ乃チ泰西（輿地）圖說ナヨミタガヘテ自分モ未タ解セサル事ヲ記スモノ也、歐羅巴ノ中ニ三ノ帝爵ノ國アリト云ヘルヲヨミ誤リタルナリ、歐羅巴ヲ三部ニ分ツト云事ハ未ダイ

ヅレノ書ニモ見エズ」と言ふ樣な精細なものである。地理學に關しては宗吉は勿論才助に比肩し得ない。才助と宗吉との個人的な感情も織り込まれて居るかもしれない。又才助の考證必ずしも總て妥當でないかもしれないが、その論駁は才助の深い學識を窺はせるものである。「増譯采覽異言」は柴野栗山の推擧により幕府に内獻され、尋いで「魯西亞國志」の飜譯を命ぜられ、まさに幕府に登用せられんとして不幸文化四年九月十九日僅か三十八歳で世を去つた。（「蘭學事始」・大槻如電氏「大槻磐水」）

# 第四章　日歐交渉の展開と西洋知識

寛永の鎖國以後日歐との關係は表向和蘭の一國に限られ幕末開國に至る迄持續された。所謂祖法としてこれが墨守されたのは幕初の鎖國禁教の政策を固守せんとするもので、怪しむに足りないが、攘夷思想が盛んとなると共にこの幕府の祖法はあたかも日本古來の祖法の如く止揚されて極端な排外論となり、開國論と對立するに至つた。若し假りに西洋の東方植民政策の進出がなく、依然和蘭以外の壓迫がなかつたならば、江戸時代の對外關係は洵に平板なもので終つた。日本の西洋知識も又一向の進歩をしなかつたであらう。然るに既に近世の初期以來ロシアは南下の端を發して居る。南歐諸國とイギリスは印度より支那に進出して居る。商業資本は夙に東洋が原料生産地として又販路として注目されて居り、又産業革命を經て近代的資本主義の發展を見ると共に植民地としての重要性が強く認識され來つた。この事は當然この島帝國にも及ばざるを得ない。江戸時代の中期以降はこの壓迫が現實問題として襲ひ來つた。これが當時の我對外問題を力強く動かし、遂に明治以降

に於ける我國の國際的舞臺への進出を誘導せるものであつた。

蘭學發達の源流を爲すものは語學の研究と西洋知識の輸入であつた。それ等は何れも長崎を經由せるものであつたから、先づ長崎の蘭通詞によつて着手された。この蘭學の萠芽は前の蠻學に接續して居る。この蘭學は種々の制限のありしとは言へ、先づ公認されて居つた。研究も公許され、それに關する文獻も公刊されて居つた。然るに和蘭以外の國々に關するものは國禁の範圍に在つたから公然と研究が進められると言ふ譯には行かない。唯蘭學を通じての知識として、即ち地理的の方面を主として紹介されるに止まつて居つた。即ち江戸時代の世界知識は原則として鎖國を前提としてのものであつた。然るにこの世界知識はその前提たる鎖國を脅す第三國の壓迫によつてその歩みが動かされ、又進められねばならなかつた。西洋への關心は常に之等の外的動因によつて刺戟されつゝその歩調を早めたのである。

かくて西洋知識の展開は、和蘭以外の國々との關係の動向により反つて支配されることが多かつた。故にこの方面より考察の歩を進むるのが最も妥當となるのである。斯様な見地よりすると近世に於ける對外關係はこれを大別して對北方・對西南方・對東方の三者と

爲すを得る。對北方の對照となつたのはロシアであり、對西南方の對象となつたのはイギリス、對東方の對照となつたのはアメリカである。而してこの三方面の問題は凡そ前後して擡頭したが、就中北方問題は先づ現れ、尋いでイギリスの來航となり、最後に太平洋を舞臺に來つて鎖國日本を突いたのはアメリカであつた。故に諸外國への關心も凡そこの順を以つて進められて居る。

## 魯西亞

北海を中心とする日魯交涉は近代ロシアの發展史に添ふて徐々と開始された。ロシアの極東への進出は寧ろ必然の運命であつた。これを積極的に開始したのはペートル大帝であつた。大帝がベーリングに北太平洋探險の命を下したのは一七二四年我享保九年であつた。ベーリンはその命を奉じてカムサスカに至り第一回の探險を終り、更に第二回を行ひ遂にその犧牲となつた。更らに又スパンベルクも一七三三年(享保十八年)日本探險の途に上りオホツクに至り、一行は一八三八年出航して千島列島に添ふて南下し、一七三九年には遂に我沿岸に現はれ、下つて一隻は陸前牡鹿郡網地島沖に現れ薪水補給物品交換を爲した。

更に下つて安房・下田に迄その姿を現はした。これ實に我元文四年のことである。スパンベルクの日本探險は第三回を以つて終りを告げた。この時代は我國に於いてはロシア南下の眞相などは殆んど知られず、吉宗將軍の洋學奬勵があり、青木昆陽や野呂元丈が漸く蘭學に志して、江戸に於ける蘭學の曙光のさしそめた時代である。この後ロシアの南下は次第に頻繁となり北海にその姿を現はす樣になつた。この所謂赤蝦夷の出現は最初こそ現地的の問題であつたが、次第に中央に於ける國防問題へと進展した。この進展に拍車をかけたのは實に明和八年のベニヨウスキーのロシア南侵警告、有名なベンゴロウ事件である。この警告一件は直ちに移して我識者を動かした。そして對露問題の等閑に附すべからざる事を彼等が次第に聲を大きくして叫ぶに至つたのである。長崎の通詞の間にもこの問題は輕視されなかつたことは吉雄耕牛の例もある。(三浦梅園「歸山錄」)更に安永年間に長崎に遊び通詞松村君紀からこの一件を聞いたのは平澤元愷であつた。(新村出博士「平澤元愷の長崎松前漫遊」)然るにこの對露問題を國家的の問題として大いに世を動かさんとし、又動かしたのは林子平と工藤平助であつた。即ち「海國兵談」・「三國通覽圖說」と「赤蝦夷風說考」であつた。幕府當局も勿論この問題に風馬耳ではなかつた。この時代に前後して幕政に立

つた田沼意次・松平定信の二大政治家はこの北方問題に就いて何れもその智腦をしぼつたのである。更にこの問題は寛政四年ラックスマンの來航によつて愈表面化されたが、又この安永・天明・寛政時代にかけては對露問題に刺戟されて現はれたロシア關係の文獻が少なくない。

明和より天明の時代は我洋學の興隆期である。(新村博士「天明時代の海外知識」參照)かの「解體新書」の飜譯を促がした觀臟の行はれたのは明和八年(丁度ベンゴロウ事件の年である。)である。この劃期的事業に與つた前野良澤・杉田玄白・中川淳庵等を中心として江戸に蘭學界が漸く形成されんとした。この前野・杉田の後繼者として現はれたのが大槻玄澤・宇田川榛園等であり、更に玄澤の門下からは山村才助・橋本宗吉・朽木龍橋・稻村三伯・小石元俊等が輩出した。

敍述が稍問題を離れた。再び立返らう。この安永・天明・寛政時代は對露問題が正に我對外問題の中心となりし時代であつた。この對露問題に對して先づ聲を擧げたのは林子平・工藤平助であつた。工藤平助(河野常吉氏「赤蝦夷風說考の著者工藤平助」史學雜誌二六ノ五參照)の「赤蝦夷風說考」は天明元―三年に成つた。ロシアの南下を說くと共に進んで彼と交易

するの利を說いて居る。この政策論の根底としてロシアの實情を紹介し、且つその歷史を記して居る。即ち下卷の「年代の事」・「ヲロシア開業の次第」の二章はこれに當る。勿論極めて粗雜であるが注意を引くものである。この書の成立は長崎通詞・松前人の話と蘭書によつたと自記して居り、その蘭書とは一七六九年開版の「ゼヲガラアヒ」と一七四四年開版の「ベシケレイヒング、ハン、ルユスランド」の二書であると書いて居る。この「ゼオカラアヒ」は前述の如く當時よく行はれたものである。

平助の蘭學知識は前野良澤を介するものならんとの推定がある。(岩崎克巳氏「前野蘭化」四四六頁)

「年代の事」にはペートル大帝よりの略系を述べ、「開業之次第」は一五一四年以降の略史がある。そして「如此の記事を見れば破竹のいきほひとみゆ、恐るべし」と言つて居る。「三國通覽圖說」もその卷末の所に「ゼオガラーヒ」の書名を擧げ、ロシアの南下を述ぶるにカザリン女帝の極東政策よりその來航の由來を述べて居るがその記述は平助に及ばない。寬政に入つて最も世を動かしたのは漂民幸太夫の送還を名として互市を乞ふたラックスマンの來航であつた。之より先平助等の提唱があり、幕府に於いても北地の警備を計り

天明五年以降蝦夷唐太の探險隊を派して居る。この結果が文化五年の間宮海峽の發見となつて居る。國防計畫の樹立は幕府の最も苦慮せる所であつたが、地理的調査は歐洲の地理學者と覇を競ひ、その功績は世界の地理學界に不朽の名を殘した。斯樣な空氣の裡にロシア關係の文獻が次々と現はれ、その裡にロシア史が出づるに及んで居る。

江戸時代のロシア知識の發達に就いては曾て新村博士が「伊勢漂民の事蹟」の裡に述べられた事があつた。詳細はそれに讓るとして、寛政時代頃より以降現はれたものでは先づ前野良澤の「東砂葛記」・「東察加志」・「魯西亞本紀」・「魯西亞大流略記」を擧げなければならない。「東砂葛記」に「東砂葛記」は共にカムチヤツカ地方の簡單な地理書である。前者は寛政元年・後者は同三年に成つた。共にヒユブネルの「ゼオガラヒ」の抄譯らしく、恐らく其の筋からの依頼によつて譯されたものであると言ふ。(この二書は岩崎克巳氏の「前野蘭化」に複刻され、且詳しい解題がある。)

次に「魯西亞本紀」は簡單ではあるがロシアの歷史であつて、寛政五年に譯了された。この年は丁度ラツクスマンが幸大夫を伴ふて通交を迫つた翌年である。この書は重譯とある。原本は「赤蝦夷風說考」に見ゆる Beschrijving van Rusland. 1744. であると言ふ。

するの利を說いて居る。この政策論の根底としてロシアの實情を紹介し、且つその歷史を記して居る。即ち下卷の「年代の事」・「ヲロシア開業の次第」の二章はこれに當る。勿論極めて粗雜であるが注意を引くものである。この書の成立は長崎通詞・松前人の話と蘭書によつたと自記して居り、その蘭書とは一七六九年開版の「ゼヲガラアヒ」と一七四四年開版の「ベシケレイヒング、ハン、ルユスランド」の二書であると書いて居る。この「ゼオカラアヒ」は前述の如く當時よく行はれたものである。

平助の蘭學知識は前野良澤を介するものならんとの推定がある。（岩崎克已氏「前野蘭化」四四六頁）

「年代の事」にはペートル大帝よりの略系を述べ、「開業之次第」は一五一四年以降の略史がある。そして「如此の記事を見れば破竹のいきほひとみゆ、恐るべし」と言つて居る。「三國通覽圖說」もその卷末の所に「ゼオガラーヒ」の書名を擧げ、ロシアの南下を述ぶるにカザリン女帝の極東政策よりその來航の由來を述べて居るがその記述は平助に及ばない。寬政に入つて最も世を動かしたのは漂民幸太夫の送還を名として互市を乞ふたラックスマンの來航であつた。之より先平助等の提唱があり、幕府に於いても北地の警備を計り

天明五年以降蝦夷唐太の探險隊を派して居る。この結果が文化五年の間宮海峽の發見となつて居る。國防計畫の樹立は幕府の最も苦慮せる所であつたが、地理的調査は歐洲の地理學者と覇を競ひ、その功績は世界の地理學界に不朽の名を殘した。斯樣な空氣の裡にロシア關係の文獻が次々と現はれ、その裡にロシア史が出づるに及んで居る。

江戸時代のロシア知識の發達に就いては曾て新村博士が「伊勢漂民の事蹟」の裡に述べられた事があつた。詳細はそれに讓るとして、寛政時代頃より以降現はれたものでは先づ前野良澤の「東砂葛記」・「東察加志」・「魯西亞本紀」・「魯西亞大流略記」を擧げなければならない。「東砂葛記」に「東砂葛記」は共にカムチヤツカ地方の簡單な地理書である。前者は寛政元年・後者は同三年に成つた。共にヒユブネルの「ゼオガラヒ」の抄譯らしく、恐らく其の筋からの依賴によつて譯されたものであると言ふ。（この二書は岩崎克巳氏の「前野蘭化」に複刻され、且詳しい解題がある。）

次に「魯西亞本紀」は簡單ではあるがロシアの歷史であつて、寛政五年に譯了された。この年は丁度ラツクスマンが幸大夫を伴ふて通交を迫つた翌年である。この書は雜譯とある。原本は「赤蝦夷風說考」に見ゆる Beschrijving van Rusland. 1744. であると言ふ。

この原書は當時行はれたものらしく、吉雄耕牛にも飜譯があると言ふ。（新村博士、天明時代の海外知識）さてこの「魯西亞本紀」はもとより刊行されなかつたが「邊要分界圖考」や「通航一覽」にも引用され、ロシア史の權威であつたのみならず、純然たる西洋史書は本書を以つて恐らく嚆矢とするものであらう。

この書に就いては岩崎克已氏の「前野蘭化」に詳細な研究があるから、諸本の解說は同書に讓る。大槻文庫には三本があり、內一本は山村才助の書寫本で卷末に「享和二年十二月十九日夢遊道人謄寫」の識語がある。

本書の構成は魯西亞國王を中心とし、正に魯西亞の本紀と言ふ名稱に該當するものである。大槻本で六八葉（一本は四一葉）であるから別して大部とは言へない。太祖ヤヘツトよりカタリナ、デ、テウエエデ迄四十三紀、凡そ寶曆明和頃迄の記事に涉つて居る。かくて內容は飜譯であるが處々に譯者良澤の按が註せられて居ることは注意に價する。例へばカサアツウイス、アレキシス、ミカエロウイスの紀に國王の政治に對して民衆が反抗の聲を擧ぐる記事があるが、それに對して「熹（良澤）按スルニ、野人官ニ對シテ攝政ノ罪ヲ論スルニ直ニ而憚ル事ナク、又既自恣ニ三公ノ家ヲ墜テ、大官人ヲ殺シ方ニソノ餘ノ三人ノ

罰ヲ説ク、實ニ天ニ代テ罰ヲ行フト云フヘキカ、又ロマノウ彼ノ上ヲ犯セル狂蕩逆亂ノ民ヲ待ツモノカクノ如キハ即上天ノ心ト云ヘキカ、或然ラスンハ三日ヲ出スシテ國政更正シテ民萬歳ヲ呼、都鄙靜謐ナルヲ得ベケンヤ」と言つて居るのは、如何にも日本人の解釋として然るべきを覺ゆるものである、良澤はこの時七十一歳の高齢であつた。

この書は嘉永四年山崎七謙編とある「魯西亞史略」と言ふ本に殆んどそのまゝ、複刻されて居る。

良澤には更に「魯西亞大統略記」と言ふのがある。大槻本は四葉の薄本であり、「魯西亞本紀」の標目だけを拔いてその下に二三行の註を加へた程度のものである。（岩崎氏前掲書參照）

對露問題に就いて寛政時代に卓見を示したのは本多利明である。（本庄榮治郎氏編「本多利明集」解題參照）「西域物語」には開國貿易論カムサスカ經營論がある。この利明が良澤の「魯西亞本紀」の原本をその死後入手して更らに翻譯したと言ふ記事がある。（本多利明手簡）寛政五年には桂川甫周が「ゼオガラヒ」より抄譯して「魯西亞志」を作り、翌六年にはやはり甫周の手になつた「北槎聞略」が成つた。更に當時のロシア關係の文獻として浩瀚なものは山村才助譯述の「魯西亞國志」一八卷である。

大槻文庫本は美濃版七冊、譯出年代の記載はないが、同家の「紅毛譯書目」に文化四年の推定があり、「新撰洋學年表」は文化三年とする。「泰敎飜譯」とあり幕命を奉じて譯したものである。原本は一七四四年ウトレヒト刊、ヨハンネス、ブルウデレツキ撰の「ヒストリイ、ハン、リユスランド、エン、テス、ヒルフス、ユロオト、ホルステン」とあり、譯して「魯西亞國歴代大君ノ紀」とある。「魯西亞本紀」の原本との關係は研究を要する。

內容は八卷に分れ「魯西亞國名義並開基由來」より始まり、諸州の地理等を記し、卷七の「魯西亞建國以來諸主ノ記」と卷八の「魯西亞國中興ベテルコロオテ一代略記」の二卷がロシア史となつて居る。即ち卷七は內題が「魯西亞國志世紀」となつて居り、太古史より起筆し、ロリキ・イゴルより始まりヨハンネスバシリテス迄大體一千四百六十年代迄の略記である。この卷は僅か二五葉の冊子であるから記述もとより極めて簡單である。

右の「魯西亞國志」と同一の原本が後文化六年馬場貞由によつて「帝爵魯西亞國誌交易篇」として抄譯された。これも幕命によつて譯出されたものであるが、特に交易篇の部が譯出された事は我對外關係が漸く必迫せる情勢を反映して興味がある。

文化元年にはレザノフの來航があり、尋いでダビドフの北邊侵略など起り、文化八年に

はゴローニン事件があつた。この時代はロシア關係が最も緊張した時代であつたからロシア關係の文獻は頗る多い。又文化五年には馬場貞由によつてロシア語の學習の始められたことも特記すべきことである。當時のロシア關係文獻を列擧して見ると歴史的文獻としては「魯西亞世代略」(内閣文庫藏)・「魯西亞史穢譯」(曾古春譯、彰考館藏)・「魯西亞國史」(中山成德譯、大槻文庫藏)・「魯西亞來歴」(志筑忠雄譯、大槻文庫藏)等があり、又對露問題を目標として出來たものは大槻玄澤の「北邊探事」・古賀侗庵の「俄羅斯紀聞」・「同外編」・「俄羅斯情形臆度」等がある。最後の書は宮内省圖書寮所藏侗庵舊藏本中に版下清書本がある。弘化三年の自序によると文化十二・三年の著らしい。且又侗庵は大槻玄澤に師事して居つたらしく、各章毎に「磐水先生曰く」とその評語が附記されて居る。

幕末に出たものでは山崎士謙の「魯西亞史略」がある。「西洋學家譯述目錄」中に掲げられて居る。著者士謙は東奥人とあるのみで詳でない。木活本二冊である。嘉永四年の序を附し「頃者魯西亞ノ事ニ關スル諸書ヲ採集シ魯西亞史略二卷トス其文多ク譯書ノ舊ニヨリ或ハ自ラ改訂スル所アリ」と記されて居るが、本書は前に指摘した如く前野良澤の「魯西亞本紀」を殆んど複製せるものである。自ら改訂とあるがそれも若干文章を變じ又削除し

て居るに過ぎない。良澤の按文に「意曰」とある文字を刪除し、その按文をそのまゝ掲載して居るのは画竊の譏をまぬがれぬものである。

以上管見に入つたものを列擧したが、綜合して見ると先づ寛政前後より文化年間に至る間、卽ち北方問題の最も多事であつた時代が多い。然るにゴローニン事件の解決と共に北方ロシアとの關係は一應平和的の狀態となつた。これに引き換へて重大な威嚇となつたのはイギリスとの問題である。

## 諳厄利亞

英國人が日本に來たのは十七世紀、我が近世初期に遡る。ウヰアム、アダムスが蘭船リーフデ號に乘つて來たのは慶長五年であつた。當時東洋貿易の覇權を掌握して居つたのはポルトガルであつたが、英國も又これに伍して印度より次第に東洋に進出し、一六〇〇年に東印度會社を設立し東洋貿易に乘り出し、日本との貿易を開く希望を抱いた。そして慶長十六年ジョン、セーリスが平戸來航となつた。セーリスは國書を家康に呈してその希望が容れられ、平戸を根據地とし、リチヤード、コツクスを商館長としその活動が開始され

た。然るに同じく平戸に商館を置いて貿易をして居つた和蘭と競爭し英國は遂に日本貿易の利なきを見越し元和九年平戸を引上ぐるに至つた。その後日本の對外情勢は鎖國へと急轉した。英國は尚日本貿易を絶望視せずしてその復活を計り、延寶五年チャールズ二世の國書を乘せたリターン號が長崎に入港した。これはもとより容れらるべくもなく遂にその目的を達せずして終つた。その後尚英國の日本通商の計畫は繰返されたが實現されず漸く幕末に近づくに至つて再びその姿を現はすに至つたのである。これが皮切りをしたのはフェートン號事件である。文化五年八月十五日突如蘭船に擬した異船が長崎を騒かした。この事件に我當局の狼狽その極に達し、遂に長崎奉行松平圖書頭は責を負ふて刄に伏したのである。この後歐洲情勢の變動と共に英國は瓜哇を襲ひ、遂に我出島蘭館乘取の計畫を爲すに至つた。文化十年の事である。（齋藤阿具博士「ヅーフと日本」）

歐洲の政情は一七八九年我寛政元年のフランス大革命の勃發によつて惹起され、その波紋は各國に及び、遂に英佛の鬪戰となり、又フランスのオランダ併合となり、更らにイギリスのオランダ植民地の侵略となつた。これが我が日蘭關係に波及して日英關係の接觸を來たしたのであつた。フェートン號事件は幕府當局を刺戟すること甚しく、これが又我

國の英學發達の端緒となつた。即ち翌文化六年長崎の通詞をして英語の兼修を命じて居る。この結果出來上つたのが文化八年に成つた「諳厄利亞國語和解」十卷である。この英學開始の動機が國防にあつたことはその凡例の中に「年を積み功を累て此學の堂奥に入らば不虞に備る一大の要にして」とあるによつても窺へる。(新村博士「日英關係圖書展觀志」・豊田實氏「日本英學史の研究」參照)斯様にして英國に對する關心は次第に高められつゝあつた。大槻玄澤はこの時「捕影問答」・「英船雜誌」を書いて英國の形勢を述べた。又近藤正齋は「伊祇利須紀略」を編した。これ等は英國關係文献として早いものであらう。次に文政八年には高橋作左衛門の序を附した「諳厄利亞人性情志」がある。文政の初頃から近海には英國の捕鯨船が出沒し始めて居る。この譯書もかゝる情況に促されて出來たものである。譯者は吉雄宜(忠次郎)、浦野元周の校とある。高橋の序に「都て悍黠死を輕んじ己が爲んと欲する所號に必果し苟も逆詞を受くれば、却て激するに死を以てす。中古改革このかた政刑法典皆一國の議り立つる所にして王も背く能はず。乃政法は國の政法なり王の政法に非ずとし、執政權貴の威も其下を御するに足らず」など立憲政治の片鱗を窺ひ「政刑法典一國の議り立つる所にして、君臣一に能く遵奉して惑はざるもの、是其彊富を取るに足らん

乎。近頃其民遠く航して我が東海に出沒し、漁利を占て憚なく其蹤悪むべきあり。大凡遠夷を處する張弛亦その可に適するを悪せんのみ、若し彼が情態を知て此れが策を爲んは此編取べきあるに庶幾らん歟」と言つて居る。(本書の原本は不明、蘭文の百科全書類に依つたものか。「近時海國必讀書」に收められ、又近く「海表叢書」に複刻された。同書の新村博士解題參照)

右の如くして英船の帆影は北方の魯夷と共に我當局者や民間識者の夢を襲ふものとなつた。この間に英國は印度より支那に手を伸ばし廣東を根據地として、遂に他の諸國を凌駕するに至つた。この結果が勃發したのはかの阿片戰爭であり、この英國の勝利は直ちに我國に傳へられ、對岸の火炎今にも我に迫るかの思ひを爲さしめた。この阿片戰爭と殆んど時を同じうして我國では蠻社の獄が起つた。この獄はモリソン號事件として周知である。これは日本の漂流民の送還と貿易を目的とし廣東のオリフアント會社のキングがモリソン號に乘じて天保八年江戸灣に現れ、我砲火を受けて鳥羽より鹿兒島に至つて遂に目的を達せず歸帆した事件が眞相なのである。この一件の風説が後に漏洩して、計らず尙齒會の渡邊華山・高野長英・小關三英等の耳に入り、「愼機論」・「夢物語」の著となり事件が表面化して犧牲者を出した。この事件は林家や鳥居耀藏一派との軋轢など纏綿して居りその陰謀

に陷つたものであつたが、又故人たる英國支那學の鼻祖ロバート・モリソンと天保八年のモリソン號とを混同した自家撞着もあつた。併し事の如何を問はずとも英國に對する關心がこの一部の洋學者によつて爆發せる事は爭はれない。

「夢物語」はモリソン來舶の風說に際して英國の國情を說いて當局を警戒せんとせるものである。もとより英國史を說けるものでないがその裡には英國の强大と極東進出の有樣が大略乍ら記されて居る。著者長英は尙齒會中最も蘭學の達者で、旣にシーボルト門下の逸才であり、その指導により新井白石の「南島志」などの蘭譯をして居る。著譯頗る多く、その裡に西洋史關係のものも二三あることは注意に價する。これに就いて一言して置きたい。卽ち「和蘭史略」・「遠西語厄利亞」の二書の名が紹介されて居る。（高野長運氏「增訂高野長英傳」。但し刊行の豫告があるが、刊行の如何は不明で實物の所在も明らかでない。後者は律邏兒獨儸說述、高野讓長英譯、靑地盈林宗校とある。長英は林宗の女婿である。）この外西洋史關係の著作として全集第四卷に收められた「知彼一助」と「聞見漫錄」が注意を引く。前者は弘化四年宇和島侯に獻じたもので、內容は英佛を對照した國防論であるが通常の國防と異色あるは歐洲列國の兵制を說いて彼を知る一助たらしめんとした點、洋學者たる長英の特色

が見ゆる。この裡に歐洲の東洋進出の歴史がある。而してその脚註に馬爾知氏の「萬國史略」が擧げられて居る。以上によつて長英が西洋歴史に就いて相當研究して居つたことが分るであらう。

長英は周知の如く半生を流浪の裡に費した。その語學の才は拔群であつて、著譯の大半も諸大名其他の依頼によるものである。醫が本業であつたが、學績の範圍は頗る廣く、兵學關係の書が多いのもかゝる關係であらう。つまり彼の仕事の裡には當時の我國一般が要求して居つた西洋知識の諸相が遺憾なく投影して居ると考へてよからう。彼が西洋歴史に目を通して居つたのも彼自らの好學に依ること勿論ながら、其所に又彼をしてこれを讀ましめた空氣の存したことも我々として看却出來ないことである。

扨て翻つて對英問題に於いて、モリソン號事件にも增して我人心を刺戟したのは阿片戰爭であつた。その風說は直ちに報導され、英國の恐るべきことが唱導された。文獻として齋藤竹堂の「鴉片始末」などは名高い。更にこの空氣は幕末の西洋史書の裡にハツキリと見られるのである。その一つとして安積艮齋の「洋外紀略」を擧げることが出來る。諳厄利亞の項には英國近世史を略述し、その東洋進出に及び阿片戰爭を述べ、英國の我國に貿

易したのは既に慶元の時代にあつたが、今や再び來たらんとする。その由來深遠であるから大いに警戒すべきものであると言ふ事を累々述べて居る。この他この時代に現はれた西洋歷史・地理の書には何れも英國の事が記されて居るが、特に英國に關するものを擧げると支那の陳逢衡の著した「英吉利紀略」が嘉永六年津の荒木謇の訓點を附して複刻された。更にその以前に無悶子がこの書に據つて木活版假名交りの「英吉利新志」と言ふ本を出して居る。（著作年代不明なるも嘉永五年の「西洋學家譯述目錄」に書名見へ、著者は山崎士謙著となつて居る。版式も前掲山崎の「魯西亞史略」と同一であるから然るべしと思はれる。）原據の陳逢衡の本が丁度阿片戰爭の時に出たものであるから本書も自ら時事問題を主題とし、歷史的記述は少ない。著者の序に「外夷ノ情勢ヲ詳ニシテ內備ヲ修ムルノ裨益トセント欲スルノ微意ニ至リテハ讀者自カラ是ヲ知レト言爾」と言つて居る。この外「海國圖志」の一部を小野元濟の譯出した「英吉利廣述」があるが、英國史として最も大きなものは文久元年長門溫知社の複刻した「英國志」五冊である。原書は英國の托馬斯米爾納の本を英國宣教師慕維廉即ウヰリアム、ミュアヘツドの漢譯せるものである。溫知社とは江戸長藩邸內の西洋事情研究會である。（「防長回天史」卷四、並に新村博士「日英關係圖書展觀志」參照）

# 亞米利加

日米の關係は露・英と比べると新しい。併し日本に開國を迫つて、それを實現せしめたのは列國中米國が機先を制した。日本が始めて公式の使節を送つたのも又米國であつた。抑も米國の支那貿易の關係は最初英國商人を經由して行はれて居つたが、やがて直貿易を開始する樣になり、幾多の困難を突破して先進國に伍する樣になつた。初期の輸出品は野生人參で、やがて毛皮の巨利が知られ、カナダ其他からの捕獲品が送られ、やがて一七九五年以降は英國商人を壓倒するに至つた。この毛皮貿易と共に注意を要するのは捕鯨業の發達である。一七七五年英國が印度洋・太平洋に進出したのを始めとし、續いて一七九一年我寛政三年に米國の船が入つたと傳へられて居る。この太平洋進出は世界捕鯨業史上劃期的意義を有する。豐富なる鯨群が發見されその發展は目覺しいものであつた。この捕鯨船が何時か太平洋を横斷して鎖國の夢安かな我國の門を叩いたのであつた。

米船の渡來は最初和蘭の傭船としてであつた。寛政九年に長崎に入港したエリザ號が最初で、この後屢々入つて居る。この關係から日本貿易の知識が得られ、直接貿易をする計

畫が自然と起つた。先のエリザ號の船長スチユアートなどはその先驅者で、享和三年七月、一船を艤して長崎に現はれたことがあつた。更に又先の捕鯨業の發展と共に日本との國交の開かれることは最も必要視され日本開國論は米國に於いて次第に唱道されるに至つた。弘化二年國會議員プラツト日米貿易を開くべき事を國會に呈出し、特に大使を派遣して國際親善の意を通ぜしむべしと言つた。その結果翌三年ビツドル司令長官が東印度艦隊を從へて浦賀に入港したが、この擧で彼の希望は達せられなかつた。この後米國捕鯨船員遭難が屢々傳へらるゝに及び日本開國の要望は米國の輿論を動かす事愈々急となり、この様な情勢が遂に嘉永六年ペリー來航となつた譯である。

アメリカの名稱は新井白石の「采覽異言」に南亞墨利加・北亞墨利加の名が見ゆる。米國合衆國は我天明三年に獨立が承認された。山村才助の「訂正增譯采覽異言」や佐藤信淵の「西洋列國史略」には未だ合衆國の記述は見えないか、箕作省吾の「坤輿圖識」（弘化二年刊）の裡には米國合衆國獨立の顚末が記され「ワスヒントン・フランクリン席進テ颺言シテ曰、天時ハ失フ可カラズ、宜ク長ク英人ト交ヲ絶ツヘシ衆其議一決ス英人モ亦事ノ成ル

可カラサルト已レカ言ノ理ナラサルトヲ知テ共圖ミヲ解キ去ル事イデ我安永九年此地ノ政官某ナルモノ英吉利國人ト會シテ不羈獨立ノ國タル事ヲ約ス」たどの文字がある。Repu-blick の譯語に迷つた時大槻磐溪が「十八史略」から支那の例をとり共和の二字を撰んだので遂にそれを採つたと言ふ事が傳へられて居る。(吳博士「箕作阮甫」に寄せられた大槻文彥博士講演參照)

嘉永のペリー來航前後はアメリカへの關心は高まつて居つた。從つて文獻も多く見受ける。正木篤の「美理哥總記和解」・廣瀨達の「亞墨利加總記」・同續・鶴峰戊申の「米利幹新誌」・小關高彥の「合衆國小誌」等頗る多い。

## 阿 蘭 陀

日蘭の交渉は親交三百年と言はれ他の諸國とは自から異るものがある。古い所で白石の「采覽異言」にもヲ、ランデヤとして簡單な記事があり、その裡に歷史的素描も見ゆる。これを增訂した山村才助の書には和蘭史に就いて和蘭略記・西洋合史等に據つた詳しい記述のある事は別項に說明して置いた。この他和蘭の事を記した書物は最も多い。蘭學關係の書

物には大方和蘭に關する記述があるから一々列擧するにも及ぶまい。森島中良の「紅毛雜話」や後藤梨春の「紅毛談」は「文明源流叢書」にも編入されて流布して居る。これ等は一般的には風俗・地理等が主で、その他は夫々語學・醫學・天文と言ふ專門的知識に分れて居る。歴史的知識の方面は他の部門に比して少ないことは否定し難い。せい〴〵地理的知識と結びつけて記述される程度であつた。森島中良の「紅毛雜話」にも劈頭に「和蘭陀の開國」と言ふ簡單な記事があるが、これも和蘭の風俗事物を述べる序の口程度のものに過ぎない。斯樣に和蘭關係の文獻は色々あつても和蘭史を標榜した書物は管見に於いて少ない。又特殊なものとしては和蘭風說書の裡に自からその近世史の記事が揭出されて居り、少なくとも幕閣に於いてはその本國の動靜は分つて居つた譯であつた。

高野長英に「和蘭史略」七卷と言ふのがある。この外稿本「聞見漫錄」の中に「和蘭世紀」と言ふのがある。後者は簡單な和蘭國王譜である。長英は和蘭史に就いても隱れた研究家であつた。

「和蘭史略」は天保八年刊「避疫要法」に近刊の豫告があるが、刊行の如何、稿本の所在を詳にしない。（高野長運氏「增訂高野長英傳」）、「聞見漫錄」は天保六年の稿本で全集卷四に收む。

次に「和蘭紀略」と言ふ寫本がある。幕末に出來た「近時海國必讀書」卷二にも收められる。澁川氏稿本とある外に序跋もない。澁川六藏の譯と言ふ。幕末の天文方で機密漏洩一件で所罰された六藏であらう。内容は和蘭史で建國より天保元年に及ぶ編年略史である。更に弘化年間に宇田川榕菴の「和蘭史略」と言ふ稿本がある。大部のもので和蘭史として最も大作であらう。これに就いては便宜上次章に述べた。

以上露・英・米とその關係の起伏によつて研究が次々と起つた事を略述し來つた。然るに之等の問題は遂に開國の斷行によつて一應の歸結に到達した。鎖國の鐵則が撤回され、次には歐米列強との貿易關係によつて新生面へと移行した。茲に於いては我國の對外意識は各國別でなく、廣く西洋全體が視野に上つて來た譯である。其處で綜合的な西洋史の概念が形成される。幕末に至つて西洋通史の著譯が次々と出現したのは斯樣な鎖國より開國へと言ふ背景があつたからである。文化五年の佐藤信淵の「西洋列國史略」はその先驅を爲した著作である。それに就いては次章以下で言及したいと思ふ。

各國史としては略々以上列擧した國々に限り、何れも鎖國時代に何等かの交渉を持つた

物には大方和蘭に關する記述があるから一々列擧するにも及ぶまい。森島中良の「紅毛雜話」や後藤梨春の「紅毛談」は「文明源流叢書」にも編入されて流布して居る。これ等は一般的には風俗・地理等が主で、その他は夫々語學・醫學・天文と言ふ專問的知識に分れて居る。歴史的知識の方面は他の部門に比して少ないことは否定し難い。せい〳〵地理的知識と結びつけて記述される程度であつた。森島中良の「紅毛雜話」にも劈頭に「和蘭陀の開國」と言ふ簡單な記事があるが、これも和蘭の風俗事物を述べる序の口程度のものに過ぎない。斯樣に和蘭關係の文獻は色々あつても和蘭史を標榜した書物は管見に於いて少ない。又特殊なものとしては和蘭風說書の裡に自からその近世史の記事が揭出されて居り、少なくとも幕閣に於いてはその本國の動靜は分つて居つた譯であつた。

高野長英に「和蘭史略」七卷と言ふのがある。この外稿本「聞見漫錄」の中に「和蘭世紀」と言ふのがある。後者は簡單な和蘭國王譜である。長英は和蘭史に就いても隱れた研究家であつた。

「和蘭史略」は天保八年刊「避疫要法」に近刊の豫告があるが、刊行の如何、稿本の所在を詳にしない。（高野長運氏「增訂高野長英傳」）、「聞見漫錄」は天保六年の稿本で全集卷四に收む。

次に「和蘭紀略」と言ふ寫本がある。幕末に出來た「近時海國必讀書」卷二にも收められる。澁川氏稿本とある外に序跋もない。澁川六藏の譯と言ふ。幕末の天文方で機密漏洩一件で所罰された六藏であらう。内容は和蘭史で建國より天保元年に及ぶ編年略史である。更に弘化年間に宇田川榕菴の「和蘭史略」と言ふ稿本がある。大部のもので和蘭史として最も大作であらう。これに就いては便宜上次章に述べた。

以上露・英・米とその關係の起伏によつて研究が次々と起つた事を略述し來つた。然るに之等の問題は遂に開國の斷行によつて一應の歸結に到達した。鎖國の鐵則が撤回され、次には歐米列强との貿易關係によつて新生面へと移行した。茲に於いては我國の對外意識は各國別でなく、廣く西洋全體が視野に上つて來た譯である。其處で綜合的な西洋史の概念が形成される。幕末に至つて西洋通史の著譯が次々と出現したのは斯樣な鎖國より開國へと言ふ背景があつたからである。文化五年の佐藤信淵の「西洋列國史略」はその先驅を爲した著作である。それに就いては次章以下で論及したいと思ふ。

各國史としては略々以上列擧した國々に限り、何れも鎖國時代に何等かの交渉を持つた

國々である。その他の列國は交渉の無かつた爲めに關心もなく、從つて又單獨の文献もない。唯「采覽異言」等の西洋地誌の裡に綜合的の立場から簡單な記述を見るに過ぎない。

# 第五章　幕末に於ける西洋通史

前章に於いて江戸時代の西洋知識は對外問題の發展と共に强化され方向づけられたことを略述した。且つその章末に指摘した如く幕末に至つて西洋通史の著作が出現した。そこで章を改めてこれに移らうと思ふ。

西洋通史として形態を備へた著作は佐藤信淵の「西洋列國史略」が先驅者であらう。文化五年の著であるから、所謂幕末期に入らないが、この信淵を介して次々と「洋外通覽」。「西洋小史」と言ふ樣なものが著作されて居る。

これ等の通史類は直接の飜譯を除くと大低山村才助等の著譯類等を種本として作られて居る。その種本を一々指摘することは研究上必要なことである。以下諸本の解說に若干揭げたが元より盡したものではない。又あまりに枝葉に渉る嫌があるので簡略に從つた。次に便宜上西洋通史の目錄を揭げて置く、著作年代によつて列序して見た外、年代の分らないものは適宜順序を附した。

西洋雜記　四卷　享和元年序（嘉永元年刊）　山村才助

×　×　×　×

西洋列國史略　二卷　文化五年序（未刊）　佐藤信淵

西洋紀年稿　二冊　天保九年頃（未刊、自筆本）　宇田川榕菴

洋外通覽　三卷三冊　弘化五年序（木活本）　無是公子

西洋小史　三卷　嘉永元年序（未刊）　長山樗園

洋外紀略　三卷　嘉永元年序（未刊）　安積艮齋

泰西大事策（飜譯）七冊　嘉永元年起譯（未刊、自筆本）　箕作阮甫

蕃史　二卷　嘉永四年序（未刊）　齋藤竹堂

西史略（飜譯）三卷　嘉永四年起譯（未刊）　蟠泥散人

極西史影（飜譯）五冊（未刊、自筆本）　箕作阮甫

譯出年代不詳、但「西史略」嘉永七年の跋文にその名が見ゆる。

遠西紀略　四卷二冊　安政二年序（刊本）　大槻恒輔

倭蘭年表（飜譯）二卷　安政二年序（木活本）　魁山無懷子

大西史影（飜譯）一冊　安政三年序（未刊、自筆本）　箕作阮甫

通　史　略（飜譯）　神田孝平

譯出年代不詳、但し嘉永六年――安政六年間の譯

古今史略（飜譯）一冊（未刊、自筆本）　箕作阮甫

「カ、フ、ベクケル原本」とある、竹雨荊人虔儒繙抄とあり、安政年間以降晩年のもの。

泰西史略（試譯）三卷三冊　安政五年序（刊本）　手塚律藏

大西古史紀年（試譯）一冊　文久三年正月年起譯（未刊、自筆本）箕作阮甫

萬國史略（試譯）十一冊　慶應三年譯出（明治二年刊）　西村茂樹

西洋王代一覽　柳川春三

年表としては安政元年の序ある清宮秀堅の「新撰年表」がある。

**西洋列國史略**　佐藤信淵の著、未刊に屬す。上下二卷で防海策が附されて居る。（佐藤信淵家學全集下卷に收む）文化五年十一月の叙言がある。これによると阿波藩々老集堂氏に聘せられて德島に滯留中の著である。この頃信淵は阿波其他各地を遊歴中であつた。年齢四

十歳で學問も圓熟期に入らんとする時代である。本書の由來に就いて叙言に言ふ「集堂氏深く予が蕃說を嗜を知て、日夜予に問に西洋の事實を以てす。予嘗て槐園の宇田川玄隨先生に從學し、且亡友山村昌永氏と遊て、西洋諸史の所載を聞けり。於是西洋開闢より洪水及び四大洲沿革の事略と其他四大洲中の帝者、及び自立諸王國の小傳と諸國海舶の所」至と、交易の所」通とを筆記して上下二冊の書となし。西洋列國史略と題し以て是に贈る。蓋し國家の利益を興すは海舶通商より大なるはなし、斯編や蕞爾たる小冊子なりといへども悉く世界の機變、當世の要務を載す云々」これによつて著者の見解も大概語られて居る。彼の傳記の言ふ所によると若冠鄕關を出で江戸に遊學し、宇田川槐園の門に入つた。槐園に從學した事は彼の學問に洋學の影響を加へる原因となつたものであつた。彼自から槐園の學恩には他の本でも屢々言つて居るが、この西洋歷史に就いても又その名を擧げて居る。信淵は槐園から西洋史知識を獲得して居つた。よつて宇田川家には西洋歷史に關する知識があつたものと思はれる。その傳來の一つと見らるべきものに榕菴の「西洋紀年稿」と「和蘭史略」とがあるが、それに就いては後に紹介するつもりである。

山村才助に就いては別項で述べたが、ともかく信淵の西洋知識は言はゞ正統的な蘭學知

識の直傳と言ふべきで、この「西洋列國史略」の依つて來つた處も略々推知せられる。信淵の厖大な學系は集成知識であつて、これを子細に分析すると多くは何等かの原據を見出し得ると言ふ。彼は蘭學の影響は多分に攝取して居るが、自ら蘭語は解しなかつた。例へば彼の宇宙論を述べた「鎔造化育論」に於ける西洋天文學知識は吉雄俊藏の「遠西觀象圖說」を粉本とするものである。（羽仁五郎氏「佐藤信淵に關する基礎的研究」）

そこでこの「西洋列國史略」であるが、これも「鎔造化育論」などと同樣據る所があるので、その大要は彼自らも前述の樣に告白して居る。處で宇田川榛園に就いては文獻的に比較檢討すべきものは見るに至らないが、山村才助の著作との關係は明瞭にこれを見る事が出來る。

第一に擧ぐべきは「西洋雜記」である。これを信淵の書と對照するに明らかにこれに據り、殆んどその文章を引寫してある。試みに「西洋列國史略」の冒頭「造物主すでに」以下（全集本七六一頁）を「西洋雜記」の第一頁「世界開闢の說」以下と比ぶれば全くこれをそのまゝ使用して居ることが分るであらう。かくて上卷の七八〇頁（全集本）迄は大體「西洋雜記」の「世界開闢の說」・「洪水並聖人諾尼の說」・「西洋古今四大君の說」・「羅皐落係甫

並百兒西亞(ベルシヤ)の二大君歴代傳統の說」・「厄勒祭亞(ギリーキス)國大君の說」・「羅馬國大君の說」・「西洋中興革命の說」の章迄を典據とし、間々文を前後する等の工作が加へられて居るに過ぎない。

扨て上卷の中程に至つて「西洋開闢以來洪水及四大帝王の沿革の大略なり」（西洋雜記の「西洋古今四大君の說」に據つたもの）として一段落と爲る。これより以下は一轉して「四大洲の中の近來の自立諸國の略傳を記して大夫の爲めに今の世界の大概を說かんと欲す」と爲し、「予が聞ける所は僅に四十六に過ぎざるなり。今其自立國を略記するもの左の如し」と爲し各國史に入つて居る。歐洲諸國を帝爵の國と王國に分ち、前者には入爾馬泥亞・魯西亞・都兒格の三國を擧げ、王國は佛郞察以下十國と爲して居る。この分類は既に「泰西輿地圖說」に見ゆる所である。かくて魯西亞・都兒格・拂蘭察・伊斯巴爾亞・阿蘭陀・諳厄利亞等の諸國に就いて略述してある。この各國史は「泰西輿地圖說」・「訂正增譯采覽異言」・「魯西亞本紀」其他の諸書から綴合せたものであると思ふ。

下卷はその端書に「昔時より華人の大洋に航行し萬國に通津せし其の始末を記して以て航海通商は國家の要務なるを示し云々」とある。内容は西歐東漸史で、コロンブスのアメリカ發見より、バスコダガマの新航路發見よりポルトガルの東漸、マカオの占領に及び又

マルコポーロを導き尋いで日歐通交の開始に及び、日蘭の交渉よりロシアの南下、カムサツカの開拓を說いて居る。轉じてイギリスの優勢に及び、フランス・イスパニア・オランダ・ポルトガルと競爭して勝ち、近來はその勢に乘じて東洋に進出し、今やロシアとこのイギリスの二國が歷史的の形勢より最も怖るべきものなりと論じて居る。卽ち歐洲の植民政策の歷史とも言つてよいものである。この部分にも典據あること疑ひない。今その一として大槻家所藏の「西洋商舶原始並圖說」（寫本一冊、三九葉）を擧げる。內容は三部に分れて居る。第一部の「西洋昔時ヨリ航海ヲナシテ其國ヲ富ス說」が信淵の記述の粉本の一つであるらしい。本書は著作の年代及び、著者の名を表記して居ないが、第一部の末に「以上舊友山村昌永歐羅巴諸國の歷史を飜譯して以て予に示す處也海舶諸國に通商して城を開き貨をあつめ其國を富ます術の開けおこなはるゝに年歷を詳に記て實に未曾有の書也祕して他見を不許といへとも外冦海防衛にこゝろさす人の爲にしはらく記て後學に示す。」と言ふ附記がある。卽ち山村才助から出て居ることは明らかである。（この奧書が信淵たりや否やは遽に斷定出來ないが、或はそうであるかもしれない。）さてこの二書を比較して見たが、その間に因果關係の存せることは否定出來ない。冒頭を少しく引いて見ると「西洋

にて海舶に駕て遠方の國に通したる其始は上古代亞細亞洲弗尼祭亞（ヘニシマ）國の人其國の西海より船を發して遍く地中海上の歐羅巴、亞弗利加の海邊諸國に至て通商交易をなす。是彼國に於て遠方の地に航海せし始也。其後歐羅巴の中興の時を去る事千餘年前にテイリコス國(亞細亞ニ屬ス)の王又命して海舶を太海多嶋海地中海の諸國に通過せしめて大に其國を富せり」とあるが、これを信淵の文と比較すればその關係は疑ひないと思ふ。

信淵の書には「防海策」が附錄となつて居る。これは先の西洋歷史知識より直ちに歸納されたものたることは、その冒頭に「予既に西洋列國の小史を著し以て蠻人航海の事略を述ぶ云々」とあるによつて明らかである。この防海策は必竟ロシア及びイギリスの進出に對する對策で、退いて守るより寧ろ進んで彼等の根據地を突くべきを出張し、一方大いに通商航海を盛んにし富國强兵を計るべしと論じて居る。貿易論や、蝦夷開發、カムサツカ攻略論は本多利明の思想の影響と考へられる。利明の西洋知識は數學・天文學・航海學・地理學が主であつて、特に數理推步の學を基礎とするものであるが、その裡には自から歷史的知識も含有せられて居る。信淵に於いてはこれが更に發展され、世界史的知識の裡に對外政策が結論として提出されて居る。「西洋列國史略」の出來た文化五年はその跋文にも

ある通り、レザノフの來航があり、又フエートン號事件が起る等我對外問題は次第に急を告げんとする時代であつた。これが信淵を動かし、この書を著さしめた。以つてその歴史的研究の誘因が奈邊にあつたかを推知せしむる。

先に掲げた「西洋商舶原始並諸說」には第二部以下に「歐羅巴富國强兵之辨」・「歐羅巴洲中大國十九州」と言ふ部分がある。その前者には本多利明の開國貿易論の要領が述べてある。著者の名を缺くが利明の遺稿か、又その說を祖述せるものである。後者も同じと見られる。以上の推定を可なりとし、又本書を信淵の見たものとすれば、「西洋列國史略」の成立と才助・利明の思想との關係を裏書する興味ある資料である。

「西洋列國史略」は上に指摘した如き諸本を典據とし彼是と綜合して出來て居る。併しこれを「西洋列國史」と名づけ、大體西洋通史の形態に作り上げたことは信淵以前になく、最初の試みとして我西洋史學史上特筆すべきものと思ふ。その構成は「西洋雜記」に據りてキリストの誕生（西洋中興革命）迄を記し、その後は國別史と爲し、下卷は東西交涉史となつて居る。構成として敢へて奇とすべきものもないが、併し當時既存の資料を巧みに配列し、日本人の西洋史として曲りなりにも一つの形態を整へて居る點は可とすべきもの

である。この後の諸書がこの書を色々な形で繼承して居る事は當然なことである。

西洋史學が信淵の思想體系中如何なる地位を占むるか。本書は彼の著として初期のものである。後年の思想體系を樹立するには、尙多くの思想を攝取せる結果であつたが、本書に盛られた知識もその一部を形成した。例へば「天柱記」・「鎔造化育論」に於ける宇宙論にはこの種の知識が資料となつて居る。

尙又次の「洋外通覽」以下が軌を一にして幕末の攘夷論の代辯者の如くであるに反し、本書は趣を異にすることも注意すべきである。洋學者の開國思想の影響が頗る濃いのは信淵の浪人的境遇と比較的素直に洋學者の說を攝取して立論せる爲めである。然るにこの後の西洋史文獻は攘夷論の渦中に投じた。彼の地位はこの兩系統の中介的性質を持つものであつた。

**洋外通覽**　木活本三冊、弘化五年八月の序がある。著者は無是公子とあり、その人を審にしない。假名交り文の西洋編年史で、大古より一八四〇年、天保十一年に至つて居る。古代史の部分は大古・新世界・革命と分つて居り、敍述は大體「西洋雜記」の系統を追うて居るものと見られる。革命の後の記述は紀元三三九年より編年體の形式に移し、前述の

如く一八四〇年に終つて居る。

著者の例言には「洋外ノ事諸書ニ散見シテ其沿革ノ大勢ヲ知ルニ由無シ、今逐年ニ編集シ一覽了然タラシム觀ル者古今變遷ノ跡ニ就テ其旺衰興亡ノ故ヲ求メハ亦經世ノ一助タラサランヤ、余謏聞寡陋各國世次ノ詳ナルヲ知ル事能ハス故ニ其治亂興亡ノ最モ著シキ者ト攻奪離合ノ殊ニ彰レタル者トヲ擧ゲ旁ラ英雄功名ノ跡ヲ采リ世次ノ知ルヘキ者ニ係ケ其ノ事業ノ時ニ係ル事ヲ詳ニシ以テ時變ヲ察スルニ便アラシム」等とある。これによつて著作の意企も窺へる。著者は恐らくは漢學者流の人で、「西洋雜記」其他の西洋の事を記せるものを纂輯してこの書を成したのではなからうかと思はれる。この書の特色は、革命以後が純然たる編年體となつて居る事である。從つて信淵の書に比して稍平板的の感がある。併しこの樣な編年史はこの種のものではこれ以前にない。記述の材料となつたものは「增譯采覽異言」などと比較すると、それらしいと思はれる節も見出されるが、その他の諸書から記事を蒐集し編年體に羅列したものであらう。尙木活本で著者の本名を現さない所より見て恐らく内輪に刊行したものと思ふ。

**西洋小史** 三卷、桂園長山貫の著で未刊に屬する。卷末に地名參考を附す。大槻文庫並

に箕作文庫に所藏されて居る。嘉永元年の自序と同二年の東條耕の序文がある。著者には他に「清英戰記述」・「砲家須知」（安政三年刊）・「銃戰紀談」（文久三年刊）・「海防私議補遺」等の著がある。著者は江戸の儒者。「廣益諸家人名錄」には儒古學とある。

第一卷は太古より一四五三年東羅馬帝國の滅亡に終り、第二卷はトルコの勃興を以て起筆しフランス革命よりナポレオン戰爭を敍し、一八四〇年ナポレオンの柩が皇帝の禮を以つて巴里に改葬された時迄を、略々編年體に敍して居る。第三卷は歐洲の海外發展と東方通商發達史である。卽ちこの構成は大體「西洋列國史略」と「洋外通覽」を合せた樣なものである。更に第一卷の裡太古よりバビロン・ペルシヤ・ギリシア・ローマ・革命（中興革命）迄は佐藤信淵と同樣「西洋雜記」によつて居る事は著者の例言に明記され、且つ極めて簡單に取扱れて居る。

扨て著者の序には當時の西洋史の系統や組立てを見るに屈强な文字があるから少しく引いて見るに「西洋洪水（ジュントフルート）之後、帝者代起一統、彊宇自邏馬之帝業衰、各國立爭雄、一方然倚宗邏馬受王侯之爵、各有彊域不敢放僭越、那波列翁亂後、列國有會盟、欲誡相侵暴則闔州無事、而彼邦俗平居不悅無事、況於豪傑有爲之君豈可甘與犬馬偕老乎、是彼所以專力於外

域也。」即ち太古洪水以來バビロン・ペルシヤ・ギリシア・ローマと移り、ローマ衰へて歐洲列國が獨立して互に覇を爭ひ、ナポレオン亂後は列國が不可侵を會盟するに至つたと斷樣な理解は當時の一般的通念であつたらしい。次に又例言に「邏馬ノ帝業衰テヨリ各國自立シ互ニ相并呑スル事尙戰國七雄ノ如シ今ニ至テ一帝ニ歸セス伊斯把你亞、第那瑪爾加・波爾杜瓦爾・拂郎西・和蘭・諳厄利亞ノ如キ各一方ニ雄長タリ然レトモ尙邏馬ニ朝宗スルヲ以テ皆邏馬ノ記ニ附ス」と言ふ説明がある。これによるとローマ史が本紀で、各國史が列傳と言つた形である。この點に於いて「西洋列國史略」と別個の特色があり編年に紀傳を兼ねた形式と言ふ事が出來る。勿論この組立が妥當なりや否や別問題であるが、ともかく一つの見解で叙述されて居るのは單なる編年體と異り注意すべきものであらう。

次にその叙述の資料であるが、太古よりローマ迄は「西洋雜記」によつて居ることは著者も言つて居る。その後の記述はこれを「洋外通覽」をかなりを用ひて居る跡があるが、この他にも何粉本とするものが存したことは勿論であらう。

**洋外紀略** 安積艮齋の著である。

刊本はない。鹽田順庵の「海防彙議第二編」に艮齋の「洋外紀略」がある。中、下二卷はこの

書と同様であるが、上卷の歷史的記述の部分は全く異本で砲術の事が書かれてある。

嘉永元年の序文があるから、艮齋五十八歲の著である。漢文を以て記し、三卷に分れ中。下二卷は人物傳と互市。妖教。防海等の事が記され、上卷に歐洲各國の記事がある。歷史的記述はこの裡にある。本書全體は純然たる西洋史書とは言へない、寧ろ一種の海防論策とでも言ふべきものである。艮齋にはこの他海防論策として「禦戎策」がある。その他日本史に就いては「史論」二卷の著あることは周知の事であらう。歐洲列國を帝國と王國に分つことは既に「西洋列國史略」にも見ゆる所である。叙述は前に言つたが、寧ろ海防的史論と言ふべきもので、幕末西洋史の特色を發揮せるものである。試みに諳厄利亞の項を見るに舟行に巧みにして、兵術に妙、夙に東方に進出し南洋諸島を侵し遂に支那と鴉片戰爭を起した顚末に及んで居る。從つて記述も近世が主である。以つてその一班を推すことが出來よう。

**蕃史**　茫洋子著とあるが、齋藤竹堂の著である。昌谷精溪の序を附す。漢文にして上下二卷、未刊に屬する。（明治十五年「天香樓叢書に複刻」）著者竹堂は仙臺藩の儒者で、昌平黌に學び秀才を以つて聞え、後帷を下谷相生町に下してその名聲聞えて居つたが、嘉永五年

に僅か三十八歳で歿した。著作も多いが就中外國事情には當時の情勢に動かされいたく關心を持つて居つた。「鴉片始末」・「外國竹枝」等の著があるが、この「蕃史」二卷もその所産であつた、本書は嘉永四年の春の序文があるから著者の歿する前年の著である。

本書の全班を見るに、その結構は「洋外通覽」と殆んど軌を一にすることは否み難い。卽ち古代史の部分は太古・新世界・革命の三つに分ち紀元後はやはり紀元三三九年より編年體と爲し一八四〇年に至つて終つて居る。「蕃史」の記事は「通覽」よりも増補された部分もあるからその漢譯と斷定することは出來ないが、又漢譯したと見るべき處が頗る多いから、先づ「洋外通覽」を重なる臺本とし、之を他の參考書によつて補ひつゝ叙述されたものと推考される。唯この書には「論曰」として論賛風のものが所々に挿入されて居る點は前者と著じるしく異る點である、

序文には本書編述の目的を誌し、方今士大夫が防禦の策を立つるに、唯西洋人の用兵の巧拙器械の利鈍を商攉するのみで往々その盛衰興亡を知らざるは空言を立つるに等しい。然るに未だ彼土の通史がないから一つ編年史を作り古今の成敗、沿革の事跡を明にしたとある。これによつて著作の意向も分る。「蕃史」と名づけられた所は夷狄觀を如實に反映し

て居る。

**遠西紀略**　西磐大槻磐卿の著、二冊、安政二年の刊行である。著者は仙臺藩の儒者、昌平黌に學び經史を博渉し、特に詩文に秀でゝ居つた。彼も又時の海外情勢に動かされた儒者の一人で、安積艮齋の書いた序に「天地の氣運愈々開き、萬國の疆域愈々拓く、今の蠻夷は古の蠻夷に非ず、(中略)是に於いて西洋の士に就いて其梗概を聞き、又譯書を取つてこれを讀み、各國形勢の略を著して西洋新史と言ふ」(事實文篇)とある。安政四年二月四十歳で歿した。その著作中西洋關係のものは「西洋新史」・「外蕃通表」・「卜那把盧的紀略」がある。「西洋新史」はナポレオン其他の傳記と地理的記述を集めたものである。

本書は刊行の年より數年以前に成つたとあるが、勿論何年の著か質すよしもない。全部漢文であり、儒者の手に成りし點、齋藤竹堂の「蕃史」と同系統に屬する。例言に言ふ「余嘗有レ志ニ於西史ニ講經之暇閲ニ西洋譯書ヿ隨看隨錄餘歳月旺久裒然成レ冊、分立ニ四門ヿ以見ト夫各國治亂興廢英雄偉績之大梗上」本書の構成は帝國紀・王國紀・各國帝王傳・各國名將傳の四部より成つて居る。帝國紀の裡には太古よりバビロニヤ、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ、トルコ、オロス等を記してある。その叙述は既往の諸書と大差ない。又論賛が加へら

れて居る。これ又特に擧ぐべき論も見えない。例へば太古史に就いては荒唐信ずるに足らずとし、英吉利に就いては、支那侵略を特筆して警戒の要を論じて居る。

以上列擧した文献は大體才助――信淵の亞流に屬するもので、著者は大方儒者流の人々である。記述・見解共に大同小異である。然るにこの外洋學者の手に成つた飜譯の一群がある。以下これを列擧して見よう。

**宇田川榕菴**　西洋醫學者植物學者化學者として名高い。「植學啓原」・「舍密開宗」等の名著によつて知られ、又近頃では日本人で本當に獨逸語を研究した最初の人であることが考證され、洋學者として實に多能多面な偉人であることが明らかとなつた。（山岸光宣博士「幕末の獨逸學」圖書館雜誌三一ノ一）美濃大垣の江澤氏の出、洋學の名家宇田川家の人となり、その家學を嗣いだ。（藤浪剛一博士「宇田川榕菴」中外醫事新報一二三〇號）前述した如く佐藤信淵の西洋歴史知識は山村才助と宇田川槐園より仰いだ事は信淵自ら告白する所である。宇田川家の文書記錄は今日藤浪剛一博士・勝俣銓吉郎氏・岡村千曳氏の所藏に大方歸して居り、これは先年東京植物同好會の宇田川榕菴記念展覽會に出陳された。その際に藤浪博

士所藏のものとして「西洋紀年稿」と「和蘭志略」の二書があつた。藤浪博士の好意によりこの二書を見るを得た。共に從來學界には內容が紹介されて居ないと思ふから少しくこの機會を以つて解說したい。

「西洋紀年稿」和裝乾坤の二冊本、榕菴の自筆稿本である。內容は西洋歷史年表で紀元前四十五年より天保九年に至る。著作年代に就いては明記がないが天保九年迄の紀事があり、且全體の筆跡も略同じ時に書かれた樣であるからその頃のものと思はれる。「植學啓原」は天保四年に成り、「舍密開宗」が同八年脫稿になつて居る。この後弘化年間に「和蘭志略」の纂輯があり歷史的方面に注意を向けて居る。刊行の意志があつたか否やは分らない。併しその全體を通覽して見ると次の樣な特色がある。

先づ冒頭は紀元前四十五年「羅馬ノ由利安設沙爾太陽年ノ暦ヲ製ス」と言ふ處から始められ、それ以前の天地開闢說などは無い。科學者の頭から神話的な古代史を除いたものであらうか。各年の記事は一頁乃至二三行の簡單なものでやはり政治戰爭のことが多いのは怪しむに足りないが、中に科學に關する記事が散見して居ることは特色の著しき點である。醫學・天文・化學、特に彼が「舍密開宗」の著者だけに化學關係が多い。例へば「千七百

六十六年〔明和三年〕加賢實斯創テ水素瓦斯ヲ發明ス」とか「千七百八十三年〔天明三〕剌暉西爾水素瓦斯酸素瓦斯ヲ密器内ニ焚シテ生シ水發明アリ、此ニ就テ甚タ精工ノ裝置ヲ造リ加賢實斯ハ諳厄利亞ニ在リ門業ハ把例斯ニ在テ此器ヲ用テ試ミ其妙ヲ感ス」等の記述がある。斯様な西洋科學に關する豐富な知識は椿菴がショメールの飜譯等で得た所であらう。それから日歐交渉の事が記入されて居る。「千六百年〔慶長五年〕諳厄利亞ノ加比丹アンジン和蘭加比丹ヤンヨウスト共ニ大舶ニ駕シテ咬𠺕吧ヨリ泉州堺浦ニ來リ江戸ニ朝見ス」と言ふ風で、天文年間の歐羅巴人の渡來より記入し、平戸・長崎や邪宗門の事もある。信淵の如き祖述でなく自ら集めた材料によつて書かれた所に價値もある。

次に「和蘭志略」は十六冊より成る。全部椿菴の自筆にかゝる。この書は極めて大部であり、凡そ弘化年間の著作にかゝる。但し未完の稿本であつて内容も充分整理されて居ない。椿菴は弘化三年に歿して居るから正に晩年の大業で、恐らくその死によつて中絶されたものと思はれる。内容は何ゝ志・志略となつて居るから所謂事物志風に色々な事項を纏め上げるつもりであつたらう。例へば官職志略・制度志略・地志・河志・產物志略・時令志・器用志・雜志等の志目がある。これが完成された時は恐らく和蘭に關する一大全書とな

つたものであらう。これにより榕菴の學問の廣汎なことが分るし、恐らく當時の學界の持つた和蘭知識の集大成とも見られる。

この書に就いて曾て紹介した。拙稿「宇田川榕菴稿本和蘭志略に見ゆる文學記事」（書物展望十ノ五）參照

この志略の裡に和蘭史の部分がある。卽ち「和蘭史略」と稱するものが三冊あり、その他の卷にもその斷片的のものが若干ある。內二冊は一部を成し、これが十二篇に分れ一〇六一年より一八四〇年迄の和蘭史である。飜譯である。原本に就いて明記がないが、恐らくワーゲナールの和蘭史ではないかと思はれる。往々原文を一旦寫し、その行間に譯文が記入されて居る。識語によつて弘化元年四月より同年十月三日迄に成つたことが分る。

他の一冊は「和蘭史略窊業奈爾抄」（ワーゲナール抄）とあり、卷末に弘化元年十二月廿七日とある。前者に尋いで成つたものと見ゆる。內容は一六六六年より一七五二年に至る編年史風のものである。前者に比し稍完成して居る。ワーゲナールの外にシャルモツトの人物志。其他ボイス・ショメール・ウエイランド・ドーフ等の百科全書や辭書類が用ひられて居るのは紐氏韻府に云々・物氏家言・道氏譯曰等・の註解のあるによつて知られる。宇田

川家には蘭書は豐富であつたから、夫等を驅使してこの勞作を爲したのであらう。

ワーゲナルとシャルモツトとは榕菴が和蘭史研究に主として據つたものであるが、この書に就いては審にし得ない。共に天文方の藏書を用ひたと考へられる。と言ふのは勝俣銓吉郎氏の所藏にかゝる榕菴の子興庵の手記「紅海堂積學錄」中に天文方より拂下げを受けた蘭書の目錄がある。その末に「嘉永元年三月天臺頼受」とある。この裡このワーゲナールと推定されるもの及びシャルモツトのビヲカラピースウヲールテンブーク、デルネーデルランデンが見ゆるから、恐らくこの書を前から榕菴が用ひ、歿後ではあるが宇田川家の有に歸したのである。

**箕作阮甫**　幕末洋學界の名家であり、その一生の學問的歩みは色々な意味で重要性を持つ。醫家に生れ、はじめ漢方醫學を學んだが、後に江戸に出で西洋醫學に轉じ、更に醫學より廣い世界に躍り出して極めて廣汎な仕事を殘した。この裡に西洋歷史の研究があるのである。

阮甫の傳記、學問等に就いては吳秀三博士の「箕作阮甫」がある。

阮甫は天保十年四十一歲の時に津山藩士の儘で幕府の天文方の蠻書和解御用局の飜譯方に擧げられ、これから幕府との關係が出來。弘化三年江戸定府となり、引續き江戸に居住

する身となつた。嘉永六年ペリーが來航せる際幕府から異國書翰和解を仰付かり、プーチヤチンが長崎に來た時は川路聖謨の幕下として長崎に赴き、これから外交事務にも鞅掌する樣になつた。又蕃書調所創設にも與り、杉田成卿と共にその教授職となつた。又西洋醫學の方面では種痘館の設立にも力を盡して居る。斯くて當時の洋學界では年輩、學問共に長老の格となつた。阮甫は醫業は早く廢く廢して著作に親んだから、その分量も頗る多いし、又その事業としてこれが最も重要視すべきものであつた。吳博士はこの見地からその傳記中に著作を詳しく解題されて居る。その項目を見ると醫學・其他萬有學・地理・歷史・法律・兵法・造船及び電信・語學等であり、視野が頗る廣い。地理では養子省吾の名で出版された「坤輿圖識及補」があり、尋いで出た「八紘通志」は最も行はれた。この他「八紘勝覽」・「豪斯多辣利譯說」・「蘭噸(ロンドン)記」等がある。後繼者として西周・津田眞道・加藤弘之・神田孝平等を輩出せしむる伏線が既に整へられて居るのである。

歷史に關しては嘉永三年頃に西洋歷史研究の社中を作つた。恐らく我國の西洋史研究會の嚆矢であらうと言ふ事である。（吳博士「箕作阮甫」）又後蕃書調所でも大抵歷史か地理を講義して居つたと言ふ。「歷史は地理よりも餘程開けなかつたと思はれる。阮甫はかやうな

時世に出て西洋各國の文物制度諸般の事は我邦に引較べて取調べる必要があるが、殊にその盛衰治亂の跡はよく／＼研究しなければならぬと見込を付けた。されば阮甫は潛心西洋歴史を飜讀して書物などは色々のものを取集めて斷片でも猶ほ見棄てなかつた。」（吳博士「箕作阮甫」）箕作家はこの言を證明する手澤の書類が多く殘つて居る。

阮甫の西洋史關係の著作は數多い。吳博士の阮甫傳の書目には十五部の書名が擧げてある。その殆んどが飜譯であると言つてよい。從つてその西洋史研究は、新井白石・山村才助系の傳統とは殆んど關係なく、直接洋籍よりの研鑽であると言つてよい。

箕作家所藏阮甫手澤本の裡に前野良澤の「魯西亞本紀」一册がある。その表紙裏に阮甫の識語がある。それによるとこの書は安政三年に人から贈られたものである。然るにこの寫本が偶々良澤譯の文字を缺いて居るので、著者の名が分らず、恐らく桂川甫周の譯であらうと推定して居る。これで見るとこの相當流布した本を當時始めて讀み、且譯者の名を誤つた事は、阮甫が既往の西洋史研究の結果に對してよく知らなかつた事を推察せしむるものである。

十五部の裡嘉永元年以降譯出された「泰西大事策」七册が最初で、文久三年正月の「大西古史紀年」一が最後である。何れも稿本として箕作家に殘つて居るが、一部も刊行迄には

至らなかつた。由來阮甫の著作は殆んど飜譯と言つてよい。これは必ずしも獨創性の缺乏を示すものでなく、その地位や時勢の要求の然らしめたものである。この點は明治初期の啓蒙學者の先驅的な意味を持つて居ると考へられる。視野の廣汎なことも又同じ樣な立場の然らしめたものである。西洋史の場合もこの啓蒙的な意味から着手されたもので、著作とせずに飜譯の形を採つた所に反つて當時一般の西洋史家とは異つた進步性があつた。

阮甫の譯書は數多いから一と解說は省略する。若干氣付いたことを擧ぐると、「大西史影」その他の冒頭には緖論として歷史の意義や硏究方法の說明が付いて居る。簡單なものであるが西洋の史學知識の紹介として興味を引く。

「大西史影」(「極西史影」の訂正本で、Bosscha : Shets der algemeene geschiedenis en van die des vaterlands, 1838 の譯)の始めに小引として次の樣な記述がある。

一、ゲシキーデニス或はヒストリーは著大なる事體の聯絡せる者を其實に隨述て、文飾虛誕の言を交へず記錄し。其地其時其人を記載するを言ふ。是くの如くにして尼達蘭若くは佛蘭西ゲシキデニスあり。若し是體裁にして萬國人民に起れる著大なる事實を載るときは、之をアルゲメーネゲシキーデニス全史總史と繙す可しと名づく。

大西大事策一

第一篇　讀史習何事

按例ノ此世ニ生ルヽ前既ニ許多ノ人民此世ニ
生存シ或ハ戦陣ニ臨テ大将トナリ政官ト為リ
術家トナリ学博トナリ工匠手藝ノ人トナリ
畎畝ニ耕耘スル民庶トナル者土艱シク且明著
ナリ此等ノ諸人ハ皆善事ヲ興シ功業ヲ世ニ貴
シ後人ヲ利済シテ名ヲ不朽ニ垂ル喩ハ其人々
ノ發明ニ由テ各代民人ノ生理ヲ救ヘ学術大技

箕作阮甫自筆　大西大事策　男爵　箕作祥一氏藏

〔備考〕上文の述ぶる所を以て參攷すれば、史乘の自ら年記（コロニキ）、小說（フアーベル）、事紀（フルテンリング）、ロマン筆を弄して事故を、紀事（ロマンヒストリ）誇大華飾する文體（スロマン）と其體を略にするを觀るべし。

二、凡そ史乘を詳明せんと欲せば地輿の學（ゼオガラヒー）、算年月の術（コロノロギー）に通せざるべからず。又或は系統の說（ゼネアロヂー）を詳にするを要すべし。

地輿の學は著大なる事端の起れる土地の方置形勢を習ひ知らしむ。（備考省略）

算年曆の學は史中に載る事變の起れる歲月を詳定す、又此學は諸國の人民各其年月を算するに何の曆法を用ふる所以の故に通明することを得るなり。（備考省略）

右は地理學・系譜學等の補助學の說明をして居るのである。次に世界史の年代區分を立て、

史を大別して三部と爲す。曰く古史、曰く中史、曰く新史

次に又晩年の譯たる「古今史略」（カ、フ、ベツケル原本とある）の最初には讀史綱領の章がある。この裡には先づ自然界と人間社會の區別より、又諸民族夫々種族風習を異にすることを說き、特に人間社會のみが創出し得たものは開化又開敵（[illegible]）であ

る。又諸民庶は會同して邦國なるものを作る。邦國に數種の差別があり、邦國間に交易あり戰亂がある。これが史乘記事の材料となるものであると言ふ様な世界史的概念の片鱗が素朴な形で紹介されて居る。かくてこれ等の史學理論は簡單ではあるが、當時の支那風の史學とは著しく趣を異にし、明治以後の西洋史學の輸入に對する先驅として貴重な資料である。

この他の稿本中には「大西古史紀年」・「西史年表」・「極西勝史」・「極西勝史辨證」と言ふ様な研究的の稿本がある。何れも訂正書入などがあり。西洋史研究には隨分力を入れて居つたことが分る。只惜しむらくは稿本のみで世に出でなかつたから、學界への影響と言ふことは見られない。併し幕末の西洋史知識は阮甫によつて最も多くのものが吸收されて居つたと言へる。西周や津田眞道が明治初期の哲學・法律思想輸入の先驅者たると同じ意味で、阮甫は明治初期の西洋史學輸入の先驅者であつた。

**杉田成卿**　「蘭學事始」の著者玄白の孫で幕末洋學界に於いて箕作阮甫と並び稱せられた。蘭醫家の出身で、坪井信道の門に學んだ。併しその學風は醫より出でゝ兵學・地理・歴史・算數・物理に及んだ。この點に於いて阮甫と同じ型の人であつた。天保十一年幕府

天文方の譯官となり、尋いで外交文書の飜譯に從事した。後に蕃書調所の創立と共に教授職となつたが、僅か四十三歳で病歿した、語學に秀で蘭語の外獨逸語にも通じて居つた。飜譯に長じ、譯述には「海上砲術全書」その他數多い、又西洋の政治などにも注意して居つた。從つて又西洋の歷史にも多大の興味を持つて居つた。阮甫の樣に著譯はなかつたが、その遺稿を探ぐるに神田孝平譯の「通史略」の序、淸宮秀堅の「新撰年表」の序等によつて略々窺れる。「梅里遺稿」の編者大槻如電は言ふ「梅里先生嘗與ニ先人磐翁一(大槻磐溪)謀レ撰ニ泰西年表一。後及ニ淸宮氏之著(新撰年表)出一、止矣、蓋先生之通ニ史學一、衆之所レ知也、而未レ見レ有ニ譯史之擧一、誠可レ怪也、然如ニ落日橋歌一、述ニ佛王那波烈翁、與ニ戰魯橋之狀一、凛乎動レ人、苟非ニ熟ニ讀彼戰記ニ者一、則奚能臻ニ于レ此乎」と。即ち西洋史に對しては少からざる研究があつたのである。詩文に見ゆる「讀荷蘭史三首」。「詠那波列翁」。「詠荷蘭王威烈謨二世」等を讀むとその一端が分る。その外に「吾聞ニ西史一、繹ニ緒源一、興亡歷々有レ所レ根、又見東西塵ニ殊俗一、人類所レ在天理存」。然るに日本には既に西洋の天文地理の學は行はれて居るが唯恨むらくは史學の一科は未だ萬國を綜合するに至らない。「予竊以爲ニ闔輿一者、蓋記ニ一事一國而已經之事一、尚且非ニ浹旬可レ竣、況於レ編ニ全地之史一乎」(新撰年表序)斯樣な深い

興味と抱負を持つて居つた。若しその學識を以つて著譯に從事せば必ず見るべき成果を殘したと思ふが、その性格と死歿とにより遂に果されなかつた。

「梅里遺稿」。「梅里餘稿」參照。この裡に小傳及著書目錄もある。

**西史略**　蟠泥散人（又石舟散人と號す）の譯にかゝる。宮内省圖書寮の古賀侗菴の舊藏本中に寫本五冊がある。

吳博士の「箕作阮甫」によると安政の始頃に出版したとあるが疑しい。阮甫の「極西史影」と同じく Bosscha の譯である。序文によると嘉永四年の暮より五年に掛けて譯出された。又編中の人物に就いては他の原書より補つたとある。

内容は簡單な西洋全史で、上世紀・今世紀に分ち、今世紀には特に泥度爾蘭土即ち和蘭史がある。和蘭の兵學校用の教科書である爲であらう。

他の書が大方江戸產であるのに、この書は長崎で譯出された。幕末の長崎の西洋史研究を記念するものである。

譯者蟠泥散人は長崎の人である。その傳記に就いて、長崎の古賀十二郎氏に質した所、同氏も兼ねて調査せられたが、要領を得られない由、又「西史略」は本木昌造の譯もあるとの說もあ

るが確たる證據なく、且本木は石井散人とは號しなかつた云々の私信を得た。

本書に就いて奇とすべきは箕作阮甫が同じく譯出して居ることとである。即ち「極西史影」五冊である。今日も原本が箕作家に存すると。（吳博士「箕作阮甫」）これに就いては譯者の跋文に興味ある記述がある。即ち嘉永六年の暮に阮甫が川路聖謨に從つて長崎に赴いた際この譯者がその旅舍を尋ねて逢つて居る。そして「談及二西洋歷史之事一、阮甫曰我近頃譯二彼史一、名曰極西史影、其撰者便勃斯察加也、於レ是余擊レ手驚曰、余亦同譯其書題曰二西史略一」譯者は阮甫に自らの譯書と阮甫の譯書を對照して誤謬を正さんことを乞ふた。その結果互に異同あり一律ならざることを發見したとあるから、即ち兩者は全く別途に譯出したものである。

蟠泥が阮甫と會したことは、阮甫の「西征紀行」を檢したが記述のないことを遺憾とする。

**通史略**　神田孝平に「通史略」の譯があつた。管見に入らぬ。「神田孝平略傳」の著作目錄等にも見當らない。唯「梅里餘稿」に杉田成卿の序文一篇を止むるによつて、その譯あるを知り得たに過ぎない。その一節に言ふ。「孝平神田子、譯二西洋人某所一編通史略上求レ示レ予、且請レ序二一言一、予取而閱レ之、叙事整然、意義簡明、是蓋專二作者苦心之所一レ成、然譯レ

之者、非下深察二作者之意一出上レ之と書いて居る。この書に就いてはこの序文以外に知り得ない。譯出の年代に就いて考ふるに、譯者孝平が成卿の門に入つたのは嘉永六年であり、この時始めて蘭學に志した。翌年は轉じて伊東玄朴の門に入つて居る。而して成卿は安政六年に歿して居る。孝平は成卿の門を辭しても尙交通して居つた。この書は少くとも安政六年以前であり、且この譯書を成す程であるから、嘉永六年入門當時のものではあるまい。尙この書に就いては轉寫本にてもその出現を念じて後考を俟つ次第である。

**泰西史略**　三卷、手塚律藏の譯に成り、安政五年の刊行にかゝる。

本書は律藏の學甕たる又新堂の藏版となつて居る。初編となつて居り太古よりシーザーの歿する迄を以つて終つて居る。二編以下は刊行されて居ない。譯出されたか否やは不明である。尙校正者として手塚節藏の名が擧つて居る。節藏は異母兄壽仙の長男で、律藏自ら蘭學を敎へて洋學者と爲すつもりであつたが、安政三年八月に病歿した。五年出版の本書に名の見ゆるのは本書が必ずしも三年以前の譯出校正された意味ではなく、單にその甥の名を記念する爲めに揭げたものであらうと。（岩崎克己氏「手塚律藏と瀨脇壽人」）

本書の原本となつたのは凡例によると獨逸の Pölitz の Kleine Weltgeschichte 1808 によ

り和蘭の Isaak Anne Nijhoff の著はした Kort Overzigt der Algemeene Geschiedenis 1823 である。即ち萬國史略と題すべきであるが、その實東洋の記事がないから「泰西史略」と爲したとある。律藏は數年前この原書を得て竊に譯出して社友に示した。「此書は各國古今の政治制度教化人物より衣服飲食器械に至る迄の大要を提げ以て少年輩に示す勸善懲悪の本意なれば未だ精詳なりといふべからず。歴史の載る所は萬國の治亂興亡古今英勇豪傑の事跡にして實に廣大に渉れば何ぞ此小冊を以て瑣屑の事件に至るまで盡く遺漏なきことを得んや、唯々其要領を示すのみ」とあり、やはり當時一般の歴史觀を示して居る。

本書の原書に就いては今遽に審にし得ないが原著者の序文によると教化を目的とした教科書風の通俗書であらう。併しその裡に見ゆる史觀は當時の我國一般のものと比べると進歩せるものであつた。曰く「此史は唯々事實を以て目的とするが故に虚談詩話を取らず、漏すべからざる實跡の明證ある事件或は信ずべき確徴ある事のみを其儘史籍として記せるなり。」又その結構を説明して「徒に年月系脈を逐て直叙すること能はず。是を以て今此篇は總めて其根本と枝葉とを詳にし此事は彼の事の本元にして、他日轉じて大事の根本となることを見せしめんが爲に最も適當せる一の順序に從ふ」とある。この歴史の發展の因果を

示せんとする學風は明治時代の文明史家の好んで唱へた所であるが、本書にもこの史風が見ゆる。併し前述せる如く教化的の通俗書であるから自から教化的の史觀が見える。之等は史學としての水準は低いと言はなければならないが、それが反つて當時の我國人士の史觀と容易に結び付き、譯者律藏もこの點を高く買つて譯出したのではなからうかとも考へられる。幕末に於ける西洋通史の飜譯は嘉永元年に起筆された箕作阮甫の「泰西大事策」などが早いものであらう。併し未刊であるから、本書は飜譯系のものとしては最も早く刊行されたものと言つて宜しからう。

**萬國史略　泰西史鑑**　この二書は何れも西村茂樹の譯書である。明治以降の刊行であるが譯述は慶應三年より漸次着手されて居るから幕末のものとして玆に記述する。而して內容は幕末系統より明治系へと過渡的の性格をよく現はすものである。この二書の裡「萬國史略」が最も早く着手された。慶應三年の冬京都滯在中に起譯されたものと言ふ。原著は例言によると蘇各蘭人弗拉撒戴多拉の著を主とし、これに阿爾蘭人迭羅爾、米利堅人以馬維辣、荷蘭人文撤の著書を採つて書いたとある。序を見ると凡そ史に本國の史あり他國の史がある。本國史は古に資し今に鑒るものであり、他國の史は彼に資し此に鑑るもの

である。本國の史に聖賢英雄と言ふも皆一國のもので、天下の聖賢英雄でない。卽ち史を讀む者は本國の史を以て自ら足れりとすべからず。然るに從來は支那の史があつたが、今や四海交通、七洲梯航、五方の言戸庭に會し、萬國の書が几案に聚まる。これが西洋史の讀まざるべからざる所以である。卽ちこの史觀は依然鑑戒の史觀であるが、既に時代が明治に接近し攘夷論的西洋史觀でなく、進んで彼に鑑みると言ふ態度たることが注意される。西村は早く佐久間象山や手塚律藏に就き蘭語と英語を學んで居るし、嘉永六年には開國交易論を唱へて居る新知識であつた。（泊西翁村茂樹傳）だからこの樣な西洋史觀を抱懷せるは故あることであつた。それと共に既にその史觀が明治の文明史觀へと轉換しつゝあることも看過出來ないことである。（この「萬國史略」は後明治五年改譯され「校正萬國史略」となり。序文・例言を改めて出版された。）

「泰西史鑑」は譯者の懷想錄たる「往事錄」によると慶應三年の頃友人神田孝平の贈つた獨逸人列的耳の原書を譯したものとある。この書が獨逸人著とあるが恐らくその蘭譯本であらう。尙神田孝平が曾て「通史略」の譯あることは述べたが、同一の原本を譯つたものか、その點は審にし得ない。この書は後に三十冊として完成されたが、その初編六冊は明

治二年出版されてた。儒教流の道徳觀で列國の治亂興亡を批判し、因果應報を說くあたりは「萬國史略」より、一歩後の西村泊翁に轉化せんとする傾向が見られる。

西村の西洋史硏究は幕末より明治へと過度時代を代表する。福澤の史觀と相通ずる點もあるが、後者が頗る進步的で、封建文化に對し明瞭な批判的態度に在るに反し、西村は尙儒教的殘滓を殘して居る。その史觀は寧ろ開港直後の對外思想を表白せるものと言へる。

**柳川春三**　春三の事績は尾佐竹博士の硏究によつて弘く紹介されて居る。幕末洋學界の俊髦で、その短生涯に殘した業績は極めて多種多彩である。西洋史に關しても興味を持ち、「西洋王代一覽」（未見に屬する。「西洋雜誌」に近刊とある。）。「西史學要」の著がある。又その發刊せる「西洋雜誌」には「西洋諸國近代盛衰の大略」以下の西洋史講座が連載されて居る。前述した如くペリーの「萬國新聞紙」には西洋史講座があるが、春三もこれ等に刺戟されたものか。博引强記の春三であるから開成所備付の洋書等から譯出したものと思はれる。平明に敍述し、頗る新鮮味があり、西洋史家として箕作阮甫の後繼者とも言へよう。

尾佐竹猛博士「新聞雜誌之創始者柳川春三」參照

一

# 第六章　西洋史研究の系統

西洋史研究の發達に就いて前章に於いて略述した。その系統を整理して見ると、前述せる如く西洋史の知識は始め廣義の世界知識の裡に含まれつゝ發達し、特に地理的知識に附屬の形であつた。地理學は寶永年間の新井白石に依つて基本が据へられたのである。尋で寬政享和時代に至つて山村才助により增補され、世界地理學は漸く學問的型態を備へ、洋學中に一部門を形成するに至つた。更に又この時代に西洋史的知識が漸く地理的知識より獨立し、歷史として輸入された。この過程には才助や前野良澤等の力による所が多い。而してこれが更に佐藤信淵に傳へられ、信淵によつて西洋通史と言ふ型態に發展せしめられた。これが更に幕末の西洋史研究へと進んだ譯である。卽ち白石――才助――信淵と言ふ系統がたどられるのである。これが正統的な洋學系のものである。「洋外通覽」・「西洋小史」等はこの系統に屬する。然るに幕末に至つてこの傳統とは別に新しい飜譯書が出た。箕作阮甫・宇田川榕菴等によつて試みられたものがそれである。先の傳統系に對して新興

系統と言ふべきものであらう。傳統系と言へども遡れば蘭書から出て居るのであるが、幕末に於いては儒者流の人々によつて取扱はれた結果著しく和臭を帶び、換言すると日本的の西洋史となつて居る。これに反し新しい飜譯は直接の譯出であるからかゝる和臭は少なく、當時に於いて新鮮なものであつた。以上は先づ西洋通史であつたが、この外に各國史がある。これに就いては前章に述べたから茲には再説しない。

次に著者に就いて分つと、本來は洋學者の研究範圍に屬するものであるが、幕末には洋學者を介してその知識が儒者・國學者等の人々に傳播した。對外問題の急迫は、獨り洋學者の意に介するのみならず、儒者・國學者等其他一般人士も等閑視して居ない。その結果西洋史に關する著作も儒者系の人々によつて試みられて居る。或は國學に於いても平田篤胤等の如く洋學知識の盛んに攝取する傾向が見ゆる。

次に地方的の關係を見るに、先づその中心は江戸に在つた。この外は長崎である。古くは西川如見が「華夷通商考」を書き、又白石の研究には長崎通詞の助力を仰いで居る。尋いで元文年間には北島見信の「紅毛天地二圖贅説」があり、天明年間前後には吉雄幸作・本木良永等が出で、前者はベシケレイヒンキ、ハン、リユスランドの飜譯があり、後者は

地動說の唱道者として名高く「阿蘭陀地球圖說」・「萬國地理圖說」等の譯述書がある。更に下つては志筑忠雄・馬場貞由の如きこの方面に貢獻を殘した人々も出た。幕末には嬌泥散人の「西史略」がある。長崎は西洋知識の門戸であるから、恐らく多くの知識が蓄積されて居つたことゝ思はれる。長崎以外からはこの方面に關係ある學者として大阪から高橋作左衛門父子を出したことを擧げなければならない。

# 第七章　西洋史研究の本質

近世に於ける洋學の發展は近世封建社會の爛熟と自己解體と、之に並行せる國際的關係の推移の線に添ひつゝ行はれた。幕府が鎖國に依つて對外交渉を遮斷したにもかゝわらず、一部通詞に蘭語の學修を命じた。この通詞語學が後の和蘭語學、更に弘く洋學發達の源泉となつた。一方幕政が中期の極盛期に達する頃から所謂實學として西洋の科學知識への欲求が鎖國の原則のアンチテーゼとして擡頭した。こゝに封建社會の自己批判として、又一面その補强策としての性格が認められる。新井白石の西洋地理の研究、天文方に於ける西洋天文曆學次いで幕末に於ける西洋兵學の研究等はそれである。併しこの補工が主體の解體に從つて次第にその彌縫となり、遂に主客が顚倒するの結果となつてしまつた。西洋知識が結局に於いて封建文化に破壞的な注射を試みた事は爭はれないであらう。東洋曆法や天文知識と西洋曆法・天文學と、東洋醫學と西洋醫學と、この對立が現實に見ゆる事實を中心にして行はれ、先づ形而下の知識に於いて漸次的の移行が見られた。これと共に現實の對外交渉、更らにその壓迫が西洋の情勢に對する地理的又政治的、更らに歴史的知識の

欲求を齎らしたのである。

この西洋知識の裡で自然科學的方面は暫くおくとして、對外情勢に關するものに就いて見るに、先づ廣義の世界地理的の知識が世界圖或は諸國人物圖と言ふ樣な形で入つた。この初期の世界知識は最初は單なる外國知識として、寧ろ好奇的な立場から迎へられたものであつたが、次第に我對外關係の變動と共にそれに伴ふ所の諸相が織り込まれて來て居る。先づ入り來つたものは禁教に伴ふ切支丹への警戒の爲め、切支丹教義の事が特に强調されて居る。これは排耶蘇教文獻や初期の阿蘭陀風說書が物語るものである。

次に日蘭貿易の進展と共に、貿易的立場からの西洋諸國の情勢特に經濟的知識が視野の裡に上つて來るのは當然であらう。この範疇に入るものは寛文九年の「諸國土產書」や西川如見の「華夷通商考」であらう。（共に長崎系著作のもの）後者を見ると我國から海外諸國への距離と、國々の物產とが誌され、貿易の參考書たることが明らかである、更に經濟知識に關するものでは寛延三年の「紅毛譯問答」の裡に「コンハンヤ」に關する問答がある。その答に曰ふ、コンハンヤは賣買座のことで、各分限相應に銀を出し合せて座に納め商賣の元銀とし出入の損德を考へ、利潤あれば元納銀の多少に准じて利分を配合し、損失あれ

ば元納銀の多少に准じて損失を償ひ申すと、立派に株式會社の說明をして居る。これなどは我國會社知識輸入史の先端を爲すものである。

次に又政治的の關心が加はつて居ることも注意すべきであらう。新井白石の西洋研究は彼の學者としての、特にその得意とする考證的の研究態度から世界地理に對して冷靜な研究を試み、或は利瑪竇の世界圖の檢討を行ひ、その誤謬を指摘する樣な事もして居る。（藤田元春氏「新井白石と利瑪竇」）併し又幕府要路者として、潛入外人に對し切支丹宗に關する訊問を行ひ、教義の研究、教國の日本に對する態度の眞相の捕索を爲すと共に、西洋の政治情勢に對する研究を行つて居ることは注意に値しよう。卽ち「西洋紀聞」の中卷に大凡エウロパ地方の諸國共君を立るに云々として、君主選出の制、その位號等の說明をして居る。又その附錄としてイスパニア王位繼承戰爭の顚末を書いて居る。これは一種の政治史的の關心である。これは「采覽異言」の裡にも同じく見ゆる。この外當時蘭人との對話の筆記たる「阿蘭問答」や「紅毛譯問答」の裡にも右の樣な西洋の政治、或は軍事と言ふ方面にも及んだ事項が見ゆる。この傾向は廣く當時の西洋知識の裡に見られることで、一々列擧する迄もあるまいと思ふが、近世末期に至ると著しく擡頭し、殊に幕末に於いては

幕政の改革、引いては我國の政治型態の改造と言ふ現實的の立場から熱心に研究され、特に西洋立憲政治を採用せんとする具體案迄が出た。そしてこれが明治の立憲政治成立の淵源となつたのである。（尾佐竹猛博士「維新前後の立憲思想」）

次には問題とすべき歴史的知識の發展過程である。これは上來述べ來つた諸事項に依つて略々明らかなことゝ思はれるが、尚その清算の意味で述べて置くことゝする。日本に於ける西洋知識は先づ平面的な、卽ち地理的の知識として入つた。具體的に言ふと世界地圖の形で入つたのである。この平面的なものに縱の關係卽ち時間的の知識が少しづゝ加はり來つた。それも最初は歐洲の現勢、卽ちニユース（風說）としての報道であつた。

例外として切支丹教義に含まれて入つた舊約聖書の天地創造說がある。一種の太古史であるが、當時は歴史としてゞなく宗教的教義か神話として取扱はれて居つた。白石の「西洋紀聞」に於ける記述と批判はその一例であらう。然るに幕末の西洋史に於いてはこれが西洋史の體系の裡に織り込まれて居る。これは初期のものと全く別個のものとしなければならない。

右のニユースが蓄積されると、自から歴史的の知識となる。だからこれが當時の西洋史知識の有力な素材或は源泉であつたことは否み難い。尚先に掲げた「紅毛談問答」の裡に

も歴史的の知識が若干取り交されて居る。即ち「阿蘭陀の元祖の名、元祖より今にいたりて年暦何ほどに成り候哉」、その答に「紅毛國開闢の祖はバードと申す人のよし、先年來朝の紅毛人ホルハクと申す者より承及候、その年暦今にいたりて幾千年に成る哉否不承傳候」とあるが如きその一例である。

斯様にして近世中期頃迄は風説の斷片的知識が主要なものであつた。その後寛政時代以降に至つて西洋知識の裡に純然たる歴史的のものが次第に混入して來て居る。先づこの頃に前野良澤・山村才助等によつて史書の飜譯が試みられ、地理的知識とは稍獨立した史的知識が知られるに至つた。良澤の「魯西亞本紀」はこの種のものゝ先づ先驅と見て宜からう。尋いで才助の「西洋雜記」・「增譯采覽異言」が出た。後者に於いては白石の地理的記述に歴史的の記事が夥しく加へられて居る。この時代にはロシアの南下があり從つてロシアの歴史が注目の的となつたことは既述の如くである。ついで才助等の知識が更に幕末の佐藤信淵に傳へられ當時の西洋史知識の源泉となつたのである。

先づこの方面の研究の原動力となつて居つたものは何處であつたか。幕府であつたか。

又民間洋學者に在つたか。以上述べた處にも民間學者の名は屢々擧げたから彼等によつて隨分と行はれたことも否み難いが、私は大體に於いてやはり幕府の爲した處が最も大きかつた樣に思はれる。由來幕府の有せし對外知識や政策は民間學者の大聲叱呼に消され勝ちであつた。林子平處罰問題も徒らに幕府の不見識を表白するが如く解されて居つたが、實際に於いて幕府の持つて居つた西洋知識は到底他の追從を許すものではなかつた。（三上參次博士「江戸幕府の有せし外國知識」史學雜誌二五ノ八・內田銀藏博士「近世の日本」）近世の西洋研究の端緒を開いた新井白石、又青木昆陽などにしても、何れも幕府の役人で、その命の下に行つたのである。天明六年には醫官桂川甫周が臺命を奉じて大槻玄澤と共にヨハンフラアの世界圖說を譯出して居る。これから寬政・文化以降世界地理の研究が急激に擡頭し、從つて又西洋歷史的研究が現はれ始めるのであるが、この氣運に對しても推進力を附與したのは幕府であつた。これは獨り地理歷史の方面のみでなく、天文方を中心とする西洋天文學、曆學の進步も同樣であつた。

一二の例を採つて見ても前野良澤は上命により「東察加志」を譯し、高橋景保・青地林宗・馬場貞由等の譯述も大方公命によつたものである。又才助の「增譯采覽異言」も完成

の後は幕府に內獻され、松平定信の「集書披閱の次序」の裡に加へられて居る。(樂翁公傳)
幕府に於ける洋學の中心となつたのは天文方と官醫であつた。天文方に於いて寬政改曆を機とし西洋天文學の研究は進步し、遂にラヽンデの飜譯「曆書管見」を編纂した。又全國の測地事業が始まる。高橋至時・景保父子その中心となり、この人々によつて世界地理の研究も進められた。この結果起つたのは世界地圖の編纂である。既成の世界圖は實際に役立たないので、幕府自ら作成を計り、文化四年高橋景保に命じた。この時新たに俊秀な洋學者招致の必要が感ぜられ、彼是物色の結果長崎から通詞中の逸才馬場貞由が出府することとなつた。高橋はそれより苦心すること年餘、文化六年「新鐫總界全圖」を試作し、翌七年「新訂萬國全圖」を完成した。この他又蝦夷地方の地理に就いては「北夷考證」を書いて居る。この頃には幕府は盛んに飜譯事業を起して居る。この前後に幕府の令によつて譯出された西洋地理・歷史の文獻の一部を第四章に揭出した。山村才助・馬場貞由がロシア關係の文獻を譯して居る。高橋景保は文化五年ケムベルの「日本志」を抄譯して「蕃賊排擯譯說」と題した。馬場貞由・杉田立卿・靑地林宗によつて「遭厄日本紀事」が譯出された。文政五年には貞由が江戶で病歿し、翌六年には吉雄忠次郎が後任として長崎から招致

された。文政八年には景保の序を附した「諳厄利亞人性情志」が譯出されて居る。忠次郎の譯である。かくて天文方の裡に地理歴史的方面の部門が自然と形成され、この結果文化八年に蕃書和解方が置かれた。（新村博士「蘭書譯局の創設」）この新設に就き呈出した大槻玄の建澤白（磐水存響所收）に世界地理研究の必要を說き、當時の爲め諸蕃異國之方角其國々の事情を知れば施設の助けともなる。阿蘭陀地理書には世界の事情が審であるから宜しく採つて參考とすべしと言つて居る。この譯局の新設と共に玄澤も招致され、やがてショメールの翻譯たる「厚生新編」譯述の大事業が始まつた。玄澤はこの事業を「大日本史」の編纂や、支那に於ける藏經翻譯に比較して居る。この書譯述の目的は專ら人民の利用厚生にあつた。これが引いては國家社會の大益となると言ふので、洋學そのものが持つ意義とその利用限度が自らその裡に示されて居る。そこで地理歴史に於けるものも同樣であつたとしなければならない。唯對照が技術的方面でなく國防政策樹立の爲めであつた。技術書の翻譯は「厚生新編」によつて最も組織的な形態を採り、爾後は寧ろ西洋の兵學或は政治情勢の知識に向けられて居る。地理歴史方面は政術に必要を痛感せられ、幕末に至つて世界地誌の翻刻などを盛んたらしめた。この後譯局は蕃書調所と改められ、天文方以來の翻譯事

業が引繼れた。但しその傾向は次第に變化し、箕作阮甫・杉田成卿と言ふ様な人々が現はれた。阮甫によつて西洋史の飜譯の行はれたのもこの傾向の發展に外ならない。因みに蕃書調所は普通洋學校と考へられて居るが、實質は寧ろ蘭書の譯局であつた。從つて其教授職は後に外交文書の飜譯もして居る。箕作・杉田等の業績が大部分飜譯であることも、斯様な關係による所が多い。（加藤弘之博士「蕃書調所に就いて」史學雜誌二〇ノ七）

幕府の持つた西洋知識。歴史知識は當時として可能なる限りに於いて豐富なものであつた。勿論その知識を實際上どれだけ活用したか否かは別問題であるが、他の追從を許さなかつたことは否み難い。この集積の如何に就いて今具體的な例を示す事は出來ないが、例へば近藤正齋の「邊要分界圖考」の如きは彼が官庫の資料を用ひたものと見るべく、又「通航一覽」に散見する歴史的記述や參考文獻の如きも同様である。兩書に盛られた豐富な知識は幕府より出でたもので、その何れもが幕府の蓄積によるものたることは言ふ迄もないことである。

併し又これ等の研究が全く他働的にのみ發達し、爲政者以外には何等の關心を持たれなかつたと言ふことは出來ない。對外問題の急迫はこれを一般に刺戟したし、又當時流行し

て居つた西洋趣味や好奇心も又これを促した。且又この知識の流布は直接間接に一般人士の對外知識を培養する力があつた。そこで開國的の思想が涵養される。かくて幕末に至ると益々外國の壓迫が痛感せられ、これ等の事情が因となり果となつて、西洋史に關する著作が要求され、從つて又次々と現はれた。この間の事情を窺ふ爲には西洋史文献の流布に就いて考察する必要がある。

當時の西洋史書は刊行されたものは至つて少ない。これは種々の困難や制限の爲めであつた。「西洋雜記」が嘉永元年に至つて刊行され、「洋外通覽」等二三が木活版で祕密出版の樣にして出たに過ぎない。大方は未刊であるが、寫本で流布をした。就中「西洋列國史略」の如きはかなり流布したものらしく、私の偶目したものでも相當ある。次に幕末に出來た西洋史は大方内容が同一系統である。山村才助・佐藤信淵の書を種本しと、又「蕃史」の如きは「洋外通覽」を漢譯せる部分が多い。之等は皆類書の流布を裏書するものである。又吉田松陰の讀書目錄を見ても之等西洋史關係の文献が散見して居る。故に當時の一部識者の間には廣く讀まれた。これもその知識に對する要求を物語る有力な證據である。更らに西洋史の文献と同じ役割を爲した地理書の方は、幕末に至つて夥しく出版されて居る。

卽ち箕作省吾の「坤輿圖識」があり、又「海國圖志」等の飜刻類は非常に多い。これ等の裡には歷史的知識が相當織り込まれて居るから、やはり當時の西洋史知識の要求の盛んであつたことを示す一つの證據とする事が出來よう。

以上の如く考へてくると、當時の西洋史研究――更に弘く言ふと西洋研究――は官府系と在野系の二系統が在ることになる。官府系の方はその目的がハツキリして居る。官府自らの對外的補强策の爲めである。徒らに排外策を立つるのみでなく、正確に知らうとした所に時勢の推移に對する認識の用意の存したことが分る。在野系の方は浪人學者本多利明・佐藤信淵の樣に開國貿易論を唱へ鎖國政策の批判をした者があつたが、幕末の文獻には斯樣な進步的意見を盛つたものは尠い。只その著作の目的が曲りなりにも西洋諸國の興亡の跡を知らしめんとする啓蒙的の意のある所に、最早や鎖國の鐵壁が一般人士の意を安ずるに足りなかつたことを示して居る。結論として排外・攘夷の如き偏見が窺はれるとしても、全體の空氣の裡に何等かの打開が要求されて居ることを知らしめる。

幕末の西洋通史には前述した樣に飜譯と著述がある。又著者の學統より見ると洋學者と

儒者系の人に分類が出來る。但し邦人の著述と言ふても、その基く所は飜譯か又は漢籍中の西洋記事であり、儒者の知識も又同樣であつたから、その淵源に遡れば一に歸する譯である。併し著者の學統などからその間に自から見解に相違の存する事は看過出來ない。

純然たる飜譯は箕作阮甫・宇田川榕菴・手塚律藏等のものである。更に遡つては山村才助・馬場貞由などのものがある。飜譯系のものは夫々原書の史觀が投影して居る譯であるが、當時の據つた原書はおしなべて通俗的史書、又は教科書風のものに過ぎず、特に歷史觀の上に於いて我が一般の史觀を覆がへす樣なことはなかつた。西洋近代の史學は十九世紀の產物と言はれて居るが、この新史學の輸入は明治以降を俟たなければならなかつた。併しともかく飜譯系のものは當時の西洋史學に於いて淸新な內容を導入し、又詳細なる點に於いて優れて居つた。

純然たる飜譯ではないが、佐藤信淵の「西洋列國史略」は前述せる如く信淵初期の著で洋學者の意見を率直に祖述して居る。この點で頗る進步的な內容を持つて居る。信淵を更に祖述した幕末の群書とはその傾向がかなり違ふことは一言して置かなければならない。

但し信淵の場合は本多利明の開國論等を採り入れたと言ふ丈で、その史觀に於いては獨自

の見解は見られない。

邦人の著作、特に儒者流と見るべき人のものに目を轉ずると、先づその記事又は組立てが殆んど委曲同巧であることに氣付かれる。これはその典據が限られて居るからである。叙述の形式を見るに國別に略叙するか、又は編年的に記事を羅列したものに過ぎない。そしてその間に論賛風の評語を加へたものもあつて、先づ日本在來の史體より一歩も出でず、歴史として何等の新鮮味もない。記述の簡略なことは已むを得ないとして形式等が何等舊套を脱して居ないことは之等の書に接して直ちに感ぜらるゝ所である。彼等は單に二三の種本によつて史實を列擧するのみで、西洋文明そのものに對する認識の如きは洵に貧しいものと言はなければならない。

斯様な譯でその史觀に於いては依然當時の支配的なものであつた所の支那系のものであつた。當時一方には既に西洋の自然科學的知識が多分に吸收され、自然觀も西洋科學の影響を攝取しつゝあつた。宇宙觀の如きは地動説が理解され、カント・ラプラースの星雲説に比敵すると言はれる學説を抱いた學者もあつた位である。而してこの様な科學的思想は必然地理學の領域にも影響する。地球説は天動説よりも早く、既に近世初期に理解されて

居る、併し乍ら歴史學の世界にはこの樣な空氣は未だ動いて居なかつたとしなければならない。唯だ彼の山片蟠桃の如き合理主義の歴史觀を主張した人もあつた。その思想には西洋の科學思想が無いとは言へないが、大體に於いて儒教的の合理主義であり、主として神道的の神祕思想の批判と言ふ立場と見るべきものである。

　これは當時の史觀が支那史の支配を未だ容易に脫却して居なかつた爲めである。更に又當時洋學そのものを見ても洋學の價値を實利・實用と言ふ觀點に置き、彼の長を採り我短を補ふと言ふ立場を離れないものが多かつたことを思へばこれも已むを得ないものである。大槻玄澤の西洋地理學を說ける裡に歴史に言及し「輿地學ノ如キハ彼人四海ヲ航シテ全地繞界ヲ四大洲ニ分チ其每洲數百ノ國ヲ容ル、モノ各洲每ニコレヲ詳究シテ圖說ヲ作リ古今精ヲ加ヘシモノ本邦唐山ニ將來スルモノ多シ其說ノ如キハ兩地ニ於テ略譯スル者アリ職方外記・增譯采覽異言等ナリコノ約說ヲ見ルガ如キモ始テ其方位遠近土地ノ寒暄治亂興敗政治ノ得失坐ニシテコレヲ知ルニ至リシハ皆彼ニ依レルナリ」（蘭譯梯航）と言ふ一節があるが、この輿地學の利益の裡に治亂興敗とあるは即ち歴史の分野である。これも支那風の歴史觀の延長の樣に見える。故に一般の儒者氣質の人の書いた西洋史が時流を離れたも

のでなかつた事は寧ろ當然のものであつた。換言すれば西洋史は只その對照を洋外に轉じたのみで、根本を律する史觀に變りはなかつた。この意味で封建史學の一翼たる立場を離れたものではなく、一般の史觀と同樣の限界を持つものであつた。

新井白石以來西洋文明に對して形而下的の優越性を認め乍ら、事一度觀念的な方面に向つては一定の限界以上に認識が進まなかつた事は、この史學の方面に於いてかなり明らかに見られる。——前に掲げた前野良澤の「魯西亞本紀」の評語の如きもその一例である。——

そこで又叙述の主潮も政治史的である。王室の世系と戰爭の紀事が主で、文化史社會史的の方面は先づ視野に上つて居ない。これも寧ろ當然のことゝ言はなければならない。かくてその史觀に於いては當時一般の風潮の裡に在つた。所謂治亂興亡の跡を窺ふと言ふ政治史的なものであつたが、日本歴史が自己の勸戒を見出さんとするに反し、西洋史の場合はその批判が對外論としての立場に在つたことが異る。更に指摘せる如く、幕府の指導力がこの裡に力強く働き批判者と言ふより補強的の傾向が強かつたから、益々その認識が一定の限界以上には出ない。結論として西洋夷狄觀。洋教邪宗觀を立て、或は攘夷論の上に立つて論じてゐるものが多い。「西洋列國史略」の如く洋學者の開國貿易論を採り入れて積

快論を主張してゐるものもあるが、其後のものは攘夷論的傾向のものが多い。

薫田伊人氏所藏の「西洋列國史略」に文化七年六月付富安谷三郎源直紀と言ふ人の奥書を附した一本がある。その文中に「此書ハ虚實を辨へざれどもいかにも奇說と知り、（中略）近來の風情に寄て誹謗をあらはしたる書也、實に恐るべし、是を寫すことも又是に等しからんや、なほ恐るべし。」この書が海外交易の事を主張するも自國にて事足るに何を得て國を富すや、これ皆衆人の奢侈の種となる等と頗る保守的な評語を加へて居る。富安なる人を審にしないが、當時一部の西洋史觀を窺へる興味ある文字である。又鈴木重胤の「日本書紀傳」卷三には近來西洋學の起れるより「西洋列國史略」等により國學者も神怪の說を立つる者があると言つて居る。

西洋の精神文明の支柱を爲すキリスト教は第一章に述べた樣に一度近世の初期に輸入されてゐる。これが禁教と共に斷絕され、僅かに一部社會に潛在して居つた。然るに禁書なるものは內々流布して居り、西洋事情の研究の擡頭と共に該教に關する知識は研究者の間には傳へられて居つた。例へば山村才助の「西洋雜記」や青地林宗の「輿地誌略」にはこれに關する記載がある。且又この教義に對しても必ずしも邪教視せず、之を徒らに恐るゝの愚を笑ふ者もあつた。（伊東多三郎氏「禁書の研究」歷史地理六八ノ四・五、「幕末に於ける耶蘇

教排撃」歴史地理六五ノ三）

佐藤信淵の「西洋列國史略」以下の西洋史書には西洋の太古史として「西洋雜記」に掲げられた「舊約聖書」の創造神話を採り、且つキリスト降誕を以つて西洋中興革命として書いてゐる。

かくてキリスト教の神話が西洋史の系列の据に据えられた。そこでキリスト教に對する批評が間々散見する。齋藤竹堂の「蕃史」の論賛には教祖キリストが國王の意に忤り一旦磔刑に處せられたのをひそかに門人相承けて居つた。然るに後に天子も唯聖水灌頂の奇效を喜ぶの餘これ信仰し、更に法王と天子が並び立ち、天下の人心天子に叛いても法王に傾くの有様となつた。帝業の不振は妖教を信ずるが爲めで、斷然これを掃蕩し日用彝倫の教を布かなければ國體の振興は得られない。又その天堂地獄の說の如きは佛教の糟粕を拾ふものに過ぎないと言ふ樣な儒教の排佛・排耶論そのまゝの筆法がある。

その後に現はれた儒者流の人々の著作「洋外紀略」等は皆邪教觀を載せて居り、殆んどその見解舊套を脫してゐない。斯くて表面に現はれた所ではキリスト教に對しては先づ無理解か、排撃か、又は默殺的の取扱を出でない。

然るに洋學者の間には密かに研究が行はれて居つた。例へば田原藩の三宅友信を中心とする渡邊華山・小關三英等が行つて居るし、又最近私の見たものでは箕作阮甫の手澤本の裡に「天主實義」・「畸人十篇」等があり、又「新約全書」讀過の際のノートらしい「舊約全書」と題する殘缺がある。併しそれ等が當時の西洋文明觀の全體にどれだけ影響して居つたか、邪教觀を覆す丈けの力があつたであらうか。西洋文明に對する偏見は明治初期に於いても容易に根絶されない。故に江戸時代の西洋史研究は未だ封建的思潮の埒内に於いての西洋情勢觀で、常に東洋徒睹者としての見方が附纏ふて居つた。即ち結局に於いてこれも時代の垣を越えないものであつたのである。

然るに開國以後明治初期に至つて禁教的の統制が取除かれ、從來潛在的に生長し來つた反封建的精神は新しき西洋文明觀へと轉化し、福澤諭吉等の文明史論として封建的西洋觀に代つて表に立つに至つた。こゝに歴史觀は封建教學としての羈絆を脱して科學性を附與さるゝのである。

文化より文政・天保・弘化、嘉永六年のペリー來航と安政の開國に至る四十餘年間は鎖・

英・米が我邊海に出沒し、これが對策に汲々として遂に開國の已むなきに至る歷史であつた。幕府の對策も或は彼が要求に寬容ならんとし、又打拂令を發する等一定の方針を確立するを得なかつた。海警防備も徒らにその聲のみ高くして一向その實績が上らず、常に異國船の幻影に惘々たる有樣であつた。併し斯樣な急迫の情勢は人心の安易を許さず對外問題は各方面より研究がうながされ、洋學への關心は如何ともせき止むる事が出來なかつた。

當時の實踐的思想家の典型吉田松陰も壯時より既に洋外の形勢に留意し、又西洋兵學研を究して居る。そして「近時海國必讀書」(この裡には「和蘭紀略」・「諳厄利亞人性情志」等がある。)・「西洋列國史略」・「西洋小史」等又遡つて「采覽異言」・「訂正增譯采覽異言」等數多西洋關係の書を讀んで居る。(東條淑氏「外國文明と松陰」普及版全集月報十二號)即ち當時の實踐家がこれ等の西洋關係文獻を讀んだことは疑なく、又その要求に向つて著作されたものなのであつた。

嘉永六年のペリー來航前後を期として西洋通史の著作は急にその數を增加してゐる。この時代は既に歐米列强の開國要求は目前に迫つてゐる。この空氣が東洋對西洋の對立を意識せしめ斯樣な西洋史書の出現を促した。この時代は獨り攘夷論的な儒者流の人々のみならず、箕作・杉田等の洋學者も實用學の立場から轉じて政治・外交・歷史へ注意を向け、

西洋史の飜譯を試みてゐる。箕作阮甫の「泰西大事策」は嘉永元年に着手され、その後彼が外交事務に携るに至つて、次々と西洋史の飜譯をしてゐる。これ等も當時の諸外國との政治的交渉を背景にして考へなければならないものである。

以上述べた如く江戸時代の西洋史研究は鎖國政策の強行と反比例して起つた外患に刺戟されて發達した。だから一方に於いて幕府の補強的要求に促がされたものであつた。又その史觀に於いては依然舊套を脱しない寧ろ陳腐なものであつた。併し又他方に西洋知識の啓蒙と言ふ役割を盡すものであつたことも見逃せない。關係文獻の續出はこれを證明する。即ち江戸時代の西洋史研究はその内容・史觀に於いてはさして目新しいものもなく、粗末なものであつたが、その本質は案外に複雜であつた。併し結局に於いて日本の世界的の進出と言ふ止め難い史的運行の線に導かれたもので、やがて明治の近代史學に向ふべき運命を持つものであつた。

次に當時の西洋史は蘭學の系統に屬するものであることも特質の裡に數へなければならないであらう。その知識の源泉は蘭書に在つたが、原本となつたものは十九世紀初期の通

俗的歴史であつた。その學問としての水準は極めて低くかつた事は爭はれない。勿論他の部門も同樣であつたから獨り史學のみと言ふ譯ではないが。扨てこの蘭學系の西洋史學に於いて棹尾の代表者と言ふべき箕作阮甫の後繼者は先づなく遂にその跡を絶つた。即ち蘭學の終末と運命を共にせるものとしなければならない。手塚律藏譯の「泰西史略」の原本はドイツ系のものであり、慶應三年頃譯出された西村茂樹譯の「萬國史略」は英書に據つてゐる。明治初期は先づ英米系のものが讀まれたから西洋史も蘭書より英米物に移つた。西村の飜譯はこの傾向の先驅を示すものと言へる。

西洋の學問は夫々必要に應じて次々と輸入されたので、必ずしも組織的に攝取されてはゐない。そこで西洋學問の體系的知識は乏しい。若し歴史學の地位を求むるならば地理の附隨として輸入され、幕末に至つて獨立の傾向に向つた。併しこの史學の地位の問題は國史學の領域に於いて一般に經學に從屬的なものであつたことゝも關聯して考へなければならないことである。

洋學輸入に就いては文化天保年間の「厚生新編」の如きものがあるが、未だ知識の羅列

に過ぎない。併しその門に若干の例を求むれば宇田川榕菴の「植學啓原」の卷首に學問の分類や方法論の說明がある。即ち學原の章に於いて、自然界を動物・植物・山物の三者とし、これに從つて學問を動物學・植物學・鑛物學の三者とし、更に萬物の學を斐斯多里・費西加・舍密加の三部門に分つてゐる。斐斯多里は記ニ錄形狀ヲ、辨ニ別種屬ヲ、蓋辨物之學也と言つて居る。このヒスターリは歷史學より廣義で、廣く記述の學問と言ふものである。和蘭語の Historie と言ふ言葉は當時の辭書を見ると文化七年の「譯鍵」には說話・記錄とあり、安政五年の「和蘭字彙」には緣起となつてゐる。極めて通俗的に解されて居つた。

この外に高野長英の「聞見漫錄」（天保六年稿、全集四卷に收む）の裡に西洋學問論があり、歷史論の見ゆることは珍重すべきものと思はれる。斷片的の覺書であるがギリシアのターレス以降の哲學史を略述してゐる。その裡にはアナクサゴラス・ヒタゴラス・ソコラテス・プラト・アリストテレス・ストイセイネン・エピキユルス・コーペルニキユス・ネウトン・レイプニツツ等の名等も見えて居る。そして最後に「而シテ其間ニ於テ諸學科ノ興ル所既ニシテ之ヲ見レバ五科ニ過ギズ、其一ヲ「レイデンキユンデ」ト謂フ、是ハ事物ノ原由作用ニ從テ規則ヲ立テ其真偽ノ虛實ヲ知ルノ法ナリ、諸說衆論ノ真偽此ニ由テ定ムベシ、假リニ

知理義學ト譯ス、其二ヲ「セーデンキユンデ」ト云フ禍福報應ノ事ヲ知ラシムルナリ、蓋シ法教ヲ云フナリ、ナチウルレーキレイト、教學政學ヲ總ルノ名ナリ、其三ヲ「ナチウルキユンデ」ト云フ。有形諸物ノ性質ヲ知ルノ學ナリ、視學分合學稱水學器械學等此ニ屬ス、假リニ格物窮理學ト譯ス、其四ヲ「ホーヘンナチウルキンデ」ト云フ、五神器耳目口鼻身ニ感セサル諸物性質ヲ知ルノ學ナリ、ウエーセンキユンデ精神學世界學鬼神學此ニ屬ス、其五ヲウキスキユンデト云フ諸物ノ形狀度分距離ヲ測ルノ學ナリ、算學度學ホーケテレキユンデ星學此ニ屬ス、概シテ之ヲ譯シテ數學ト云フ其他文章學（レツテルキユンデ）物產學（ヒストーリー）年代學（テイトレハクテキユンデ）等多シト雖モ既ニ五學中ノ一派別ナリ、ヒストリノ學ハ事物ノ外表ヲ記スノ學ナリ、其内面ノ事ヲ併セ記ストキハ其原由ヲ明ニアルナリ、之ヲ記スヲゲシキイテニスト云フ、按スルニ是モ亦一學ナリ蓋シ歷史ノ學ナリ。」西洋哲學史を紹介したものとして最も早いものであらう。更に學問として歷史學の考察のあるのは珠玉と言へよう。

江戸時代の西洋史研究が然らば、日本歷史の研究に何等かの影響を齎したか。この點に就いて吟味を要するが、私は直接は先づ無いと思ふ。西洋史實の知識は相當流布したが、その研究法や史觀は充分理解されてゐない。又當時輸入された西洋史學そのものも別して

高度のものでなく通俗書が多かつたと思ふから、特に我國の史觀を動かす程のことはなかつたと思ふ。その裡には前掲高野長英の斷片や、箕作阮甫の譯書に若干この種の知識が見ゆるが、もとより普及されたものではない。唯併し西洋史實の知識の流布は間接に日本の國家意識を刺戟し、對外觀を緊張せしめ、以つて國史意識を燃燒せしめた影響は大きかつた。幕末水戸學者の國史觀・例へば會澤安の「新論」に於ける如きはその著しき例である。

# 第三編　明治初年の史學界と近代歴史學の成立

# 第一章　明治維新と史觀の變遷

幕末の開港によつて近世社會を覆ふて居つた鎖國制が破れ、ついで王政復古の大政變によつて政治體制が一變し、續いて身分制・土地制等の社會諸制度の改廢、更に憲法制定・國會開設・法典編纂等と言ふ諸事件によつて近世封建社會は後退し、これに代つて近代日本の社會が形成された。この約半世紀に近い間が近代日本の生れ出づる苦難の途であつた。この間に略々社會機構が一變されたのであるが、それに伴つてその上に依存する觀念型態も除々に近代思潮へと移行した。歷史等の場合に於いてもこの間に轉回が試みられ、遂に近代史學——略々ヨーロツパに於いて發達したものに追從する——としてその姿を現出したのである。併しこの近代史學形成の過程は一朝にして成つたものでなく、遡つて近世史學の裡に除々に萌し、社會情勢の轉化に即しつゝその相貌を變じ來つたのである。この半世紀の史學史は日本史學史上最も多岐多端な期間であつた。日本史學をこゝに迄哺くみ來つた支那史學と訣別し、新たに西洋の近代史學を教師として迎へた。そして日本の歷史は

書き換へを要求され、その試みは幾多の思想家・歴史家の手を煩はした。

書かれた歴史は如何にしても筆者の主觀が倒影される。しかもその筆者たる歴史家はその時代の空氣の裡に呼吸する者であるから時代の意識はその史觀を左右するものである。今日我々は歴史觀の再檢討の聲を聞くにつけても、史觀は常に動きつゝ進展して行くものと言ふことを痛感する。幕末明治と言ふ樣な激しい轉換期に歴史觀のみ獨り晏如として舊套を守ることは如何にして許されない。民衆の力が社會の前面に浮び上る時代はこれを無視して歴史は書けない。經濟的な關係が社會の指導力として力強く意識に上る時代は經濟の及ぼす力が歴史家の腦裡に深く映ずるのである。大政變が起つた時にはこの政變と、新政權を中心として歴史が再編成される。我々は既に近世初期に德川氏の政權確立と共に日本歴史の再編成の行はれたことを見て來た。この近世初期に形成された近世史學は今や近代日本の誕生と共に再び再編成の期に臨まざるを得なくなつたのである。

近世初期歴史學成立の中心となつたのは史官林羅山であり、それを爲さしめたのは幕府であつた。明治維新後に於いては大學・修史局等の官府系の修史事業が起されては居るが最も近代精神を色濃く盛つたのは福澤諭吉・田口卯吉等の在野の史家で、その勞作は私著

の形で出たものである。この幕府史官林羅山と、在野史家の諭吉・卯吉との對照は近世文化と近代社會の相違や時代の轉換をハッキリ示すであらう。「本朝通鑑」や「大日本史」が近世史學を代表するものとすれば、明治初期の史學は「文明論之概略」・「日本開化小史」等によつて呱々の聲を擧げたと言つてよい。前二書は何れも官撰のものであるが、後二書は福澤諭吉・田口卯吉その人の著作であつた。その個性がクッキリと浮び出るものであつた。史學の世界に近代精神を吹き込んだのは之等の個人思想家の力であつたのである。

明治初期の思潮の發展の發展は、大體に言つて、十年前後迄が所謂啓蒙時代と言はれて居る。尋いで二十年前後からその反動として歴史主義が擡頭してくる。この啓蒙思想はヨーロッパ十八世紀の啓蒙思想と對比されて居る。西洋近代思想の序幕を爲したこの啓蒙思想家の事業は丁度我近代社會開發の指導者の仕事と頗る共通性を持つて居る。この明治の啓蒙思想家の代表と見られる西周・福澤諭吉等に見られるもの、即ち西の「百學連環」に於ける包括的な知識體系と、福澤の尨大な著作を通ずる啓蒙性、又兩者を通ずる所の知性の尊重・唯物論的・實證論的傾向等は、最も鮮明にこの期の思潮傾向を示すものであらう。その仕事はフランスの百科辭書家の縮圖である。更にこの啓蒙思想を代表するものは明治

六年――八年の明六社であらう。明六社は西・福澤をはじめ當時の近代的思想家を殆んど網羅して居つた。そしてその思想の宣傳方法として、雜誌の形式を採つた。「明六雜誌」がそれである。

啓蒙思想の一つの特質は知識の尊重とその自律である。この知の優越性への思慕は當時の知識人が一樣に抱いて居つた所であつたが、特に福澤を例に見るに、その初期の著作に「窮理圖解」(明治元年刊)と言ふものがある。簡單な物理書で所謂啓蒙の名にふさはしいものであるが、これが著作の動機は「廣く民間を相手にして之を導くの第一着手は物理學に在りと決定し云々」(福澤全集緒言)とあるが如く、專ら國民の知的開發を重要視して居る。

この知識の尊重は歷史觀へ向けられた。歷史の發展を神意や支配者個人の性癖・德性の如き偶然的の要因に求めず、因果論的に原因と結果の關係から自然法則的に把持しようとする傾向が力強く擡頭して居る。即ちその發展を理性の光に照して實證的方法によつて理解しようとする方法である。封建時代の史觀が道德に――又それに導かれて居る政治に――從屬して考へられて居つたものを解放し、歷史を社會自らの自律的發展として把握する。其所に科學としての歷史學の形成の端緒が作られたのである。文明史觀はこの啓蒙の歷史

觀である。文明史家が史的發展の原因結果と言ふことを喧しく主張するのもこの現れであつた。

江戸時代に於ける歴史的認識の範圍は一定の與へられた形式を範疇として、極めて極限されたものであつた事は既に指摘した處であつた。即ちその主潮が政治的主權の起伏に置かれ、この政權の變遷を說明する爲めに、支配者の系譜や、その行動が微細に描かれ、又その變動の契機となる戰爭が主要な舞臺となつて居る。歴史は本紀と列傳が主體を爲すので、志類の如きはその補充的意味しかない。志類の裡に天文・氣象の記事があつてもそれは災祥を卜する陰陽道か、暦制の記錄であり、刑法・食貨・禮樂・兵・職官等の社會史的志目もその內容は政治的支配機構の側面的記錄に過ぎない。即ちその認識が單一であつて、史的現象の把握がそれ以外に及んで居ない。しかもその政權の移行が道德的觀念によつて批判され、其所に歴史的理解の重點が置かれて居る。この樣な史觀は社會の裡に各個人生活の存立が殆んど顧られない。支配者の一色に塗られた全體主義に覆はれた時代の產物で、當時の歴史學はこれで事足りたのである。然るに明治となりこの封建的の支配機構が崩壞するに及んで、個人生活が解放され社會の細胞として表面に立つに及んで歴史の世界は從

來の存在を許さなくなつた。加ふるにこの時代に西洋の社會科學が次々と輸入された。法律學・政治學・經濟學・統計學等は維新前より若干づゝ傳へられ、特に文久元治年間和蘭留學の西周・津田眞道によつて稍々組織的に學ばれて居る。（西周「五科口訣紀略」）この時兩人の教を受けたのはフイセリングはフランスのバスチヤアの自由主義經濟學の支持者であつたから、その受けた思想系統はイギリス系の自由主義思想であつた。又注意すべき事はコムトの實證哲學の思想も受けて居る。このコムトの思想は西・津田の思想的活動に深く影響を及ぼし、引いて明治初期の思想界にこれを傳播せしめた。この社會科學の知識は、社會現象の理解に新しい理論と方法を教へた。その一例として福澤は「文明論之概略」の書に統計的研究法の效用を述べて居る。統計學は西・津田が和蘭で學び、津田がこれを「表紀提綱」として譯出し、杉亨二博士がその普及に貢獻した。斯くて社會現象認識の科學的方法が知られると共に、これが歷史的現象の理解に應用される事は當然であらう。そこで田口卯吉の「日本開化小史」に於いては經濟學の理論がその叙述に組織を與へて居る。

斯くて社會の意識が、科學的分析の下に理解され樣とすると、從來の如き固定した公式的な歷史の理解では最早滿足され得るものではない、これを單なる政治的支配機構の推移

に於いてのみ考へては充分說明されないものがある。福澤が、この歷史觀を評して「新井白石の說に天下の大勢九變して武家の代と爲り武家の世又五變して德川の代に及ぶと言ひ唯日本にて政權を執る人の新陳交代せし模樣を見て幾變と言ひしのみのことなり。（中略）都てこれまで日本に行はるゝ歷史は有司の得失を論ずるもの歟或は戰爭勝敗の話を記して軍談に類するもの歟大抵是等の箇條より外ならず、稀に政府に關係せざるものあれば佛者の虛誕妄說のみ云々」（文明論之概略）と言つて居るのは封建史學の本質に肉迫してその歷史の解放に第一聲を擧げたものであつた。この封建史學の批判は近代史學形成史の上に極めて重要性を帶ぶるものである。考證史學によつても批判せられて居ることは次章に指摘して置いたが、その批判には自から限度があり、それ以上には進むものではなかつた。然るに文明史家一派は封建史學に就いて更に進んだ批判を加へて居る。「日本開化小史」第七章には從來の編年史は單なる年表で歷史ではないと歷史發展の因果論的把持を力說して居る。又「神皇正統記」が社會の有樣を記し其變遷を寫せる點を推稱して居るのも狹隘な支那風の歷史に捕らなかつた爲めである。又下つて明治十九年に出た三宅米吉博士の「日本史學提要」の序文はこの間に關して重要な文獻である。この裡に我國史は從來支那の歷史編纂法に據

つたから、社會の一部にのみ眼をつけて社會全體に頓着しない。これを歐米の史書に比ぶれば甚不完全である。歐米の史家は社會全體に着眼して苟も社會に現はるゝ事績は盡く取て毫も省かざれば其記載する所濶い。編纂法も支那流の編年紀傳史論の如く、一方に偏せず諸體を混用して宜しきを得て居る。斯くて支那史學の形式が批難されて居る事は修史館の史風より確かに一歩進んで居る。又實際に於いて「日本開化小史」や嵯峨正作の「日本史綱」の如く自由な形式で綜合的に文化の發達を把握しようとする史風が現はれて居る。

そこで歴史發展の契機として次第に複雜な要因が加へられて來る。例へば技術の如きが頗る重要視されて居る。これは一種の經濟史觀で、從來の觀念的史觀に對して著しく唯物論的方法となつて居る。屢々福澤を引合に出すが、「民情一新」(明治十二年刊)の緒言に於いて西洋文明の本質は德義・文學・理論にもない。これは人民交通の便に在る。西洋が開明なのは交通の便に在る。卽ち蒸氣船・蒸氣車・電信・郵便・印刷等の技術の發明によつて長足の進歩をしたと論じて居る。次に「文明東漸史」の著者藤田茂吉も「水火論」(「文明東漸史」八十七頁)を書いて文明の進歩は水火の二要素に歸する。近世勤王の說は王政復古の近因であるが、更に遠因に遡れば二百年前ワットの蒸氣機關を發明せる時に在りと論じた。加藤弘之の「近

今開化の四大要素」に於いても同樣の見解を見る。斯くて產業的技術が歷史觀の裡に重要視されて來て居る。この技術史觀は維新後の產業社會の發達を中心に組立てられた史觀で、近世初期に武家政權を中心に編成された武家史論と相對比さるべきものである。武家と近代ブルジョアジーと、この二つのものが夫々歷史の認識の原理を建てゝ居ることは、時代と歷史觀との關係をハツキリ說明するものである。

この樣な技術史觀、更にこれを裏づけるものとして功利主義の思想がある。功利主義思想は近代ブルジョア社會の思想的支柱として重要なものである。この倫理觀は文明を以つて人民の安樂と品位との進步に在りと言ひ、良政府とはこの文明に益すること多きものを言ふとして居る。そこで社會に於ける各人の自由な活動を文明進步の重要要素とし「人事漸く繁多にして身心の需要次第に增加するに至つて世間に發明もあり工夫も起り工商の事も忙しく」と言ふ風に各人の射利心利己心の發動を是認せんとするアグム・スミス流の自由主義思想に外ならない。かくて各人が「人事忙はしくして需要を繁多ならしむる」（文明論之概略）と言ふ產業的活動をすることにより社會の安寧幸福が齎され、これによつて文明は進步すると言ふ結論が出てくる。この功利主義的は啓蒙期の歷史家を代表する田口卯吉の歷史

想の根底にも横つて居る。「日本開化小史」第二卷の冒頭にスペンサーの思想を紹介し、これに對するルボツクの駁論を更に駁して「人みな其所有物を愛するの私利心あり。即ち親族兄弟朋友を愛するの心あるなり。夫の孝や悌や慈と私利心と同一なり。嗚呼人類の腦裏豈に二種の相容るべからざるが如き心あらんや、（中略）之を要する倫理の情は私利心の枝葉なり、善惡邪正の考は世人の評判を得て而して後發するものなり。（中略）幸にして世人未だ善事に汲々として、其私利を捨つるに至らず、是れ人間社會の今日に至りて益々繁榮する所以ならん。」と言つて居るのはその思想の根據をよく示すものである。

斯くて時代の轉換は我學界の歷史觀の上に力强く反映した。資本主義的の諸觀念を指導概念とし、輸入の知識を盛んに採り入れて、その認識を一躍豐富なものとしたのである。

# 第二章　文明史論と考證史學

文明史とは幕末から明治初期にかけて愈々歐米先進國との文化的交流が行はれた時代の文明開化思想の歴史觀であつたと言へる。文明開化の概念は極めて多岐であつて、一言に言ふ事は困難であるが、要之先進國の文明を目標として、その攝取への意欲である。表面に現はれた文明開化は風俗の改良と言ふ樣な卑近なことであつた。斯樣な反映を見た所にこの思潮の啓蒙的な一面が現はれで居るが、その內面に於いてはヨーロッパ文明の精神をも入れようとする處迄至つて居る。卑近な世相風俗より言語・敎育・政治等に至る迄の係列は何れも開化思想の光に浴し、之等を一貫してその文化水準の向上が計られたのである。そこで西洋文明の啓蒙的開明が先づ着手されて居る。これは既に幕末から開始されて居るので、當時の西洋の地理・歷史の啓蒙書の續出はこの意味をその裡に持つて居ると考へなければならない。そこで江戶時代の西洋觀を茲で再び回顧して見る必要があるのであるが、これは既述の如く、時各代の對外關係の變遷を反映し、排外觀・崇外觀・攘夷論が盛んであ

つたが、結局に於いて開國が强要され、現實化するに從つて西洋知識の啓蒙が一般に要求され來つた。西洋を見る目は尙種々の偏狹さがあつたとしても、これを我れ關知せずと言ふ譯には行かなくなつたのである。斯樣な空氣は安政の開國後急角度に發展し、西洋知識は急激に進步して進取的な西洋文明論が現はれるに至つた。この文明論は鎖國的な對外觀を淸算して素直にその眞相を知り、以つて我國の進路を明確に認識せしめんとするものであつた。そこで世界の形勢に就いても野蠻文明の別が說かれ、文明の進むべき方向が示されて居る。（福澤諭吉著　掌中萬國一覽）この方向の向ふ所は專ら歐米の文明諸國で、この文明國の有樣は「西洋事情」によつて說明された。この書は福澤が歐米の見聞を基礎に編述したものであるが、その裡に西洋文明の理解を歷史的に行ふべしとする見解が見ゆることを指摘したい。この西洋文明の歷史的理解が文明史の出發點である。この書の各國の記述の前には史記と題してその國の略史がある。これを揭げた理由としてその序文に書いて居る。「洋籍の我邦に舶來するや日既に久し。其飜譯を經るもの亦尠からず。然して窮理・地理・兵法・航海術等の諸學日に闢け月に明にして我文明の治を助け、武備の闕を補ふもの其益豈大ならずや。然りと雖ども余竊に謂らく、獨り洋外の文學技藝を講窮するのみにて其各國の政治風俗如

何を詳にせざれば、假令ひ其學藝を得たりとも其經國の本に反らざるを以て、啻に實用に益なきのみならず、却て害を招んも亦計るべからず。抑々各國の政治風俗を觀るには其歴史を讀むに若くものなし。然れども世人夫の地理以下の諸學に於て其速成を欲するが爲めに、或は之を讀むもの甚稀なり。實に學者の缺典と云ふべし。余頃日英亞開版の歴史地理誌數本を閲し、中に就て西洋列國の條を抄譯し、毎條必ず其要を掲て史記・政治・海陸軍・錢貨出納の四目と爲し、卽ち史記を以て時勢の沿革を顯はし、政治以て國體の得失を明にし、海陸軍以て武備の强弱を知り、錢貨出納以て政府の貧富を示す。蓋し此四者既に世人の眼目に觸れは、これに由て略々外國の形勢情實を了解し、果して彼の敵視す可きものか其友視す可きものかを辨別し、友は則ち之に交はるに文明を以てし、敵は則ち之に接するに武經を以てし、文武の兩用其所を錯ることとなきに庶幾らん乎。此れ余が是擧の目的とする所なり。徒に世間海防家の口吻に云へるか如き、彼を知て後に彼を伐たんとするのみの趣旨には非ざるなり。」

この見解の裡に直ちに氣付かれる點は西洋文明の鑑としての西洋史である。この史觀は言はゞ從來支那文化を對照とせるものを、西洋に振り向けたものであり、又幕末西洋史研

究に見ゆる攘夷論的の排外觀を開國進取論に轉化せるものに外ならない。故にその歴史觀としては決して舊套を脫したものでなく、極めて素朴なものである。この樣な見解は後の文明史家の間にも流れて居る。室田充美のギゾーの譯たる「西洋開化史」の序文にも「古今ノ沿革ヲ曉リ各國ノ勢ヲ觀テ其成敗結局ノ分ヲ考ヘ之ヲヨク我今日ニ當ムヘキナリ」と言へるに明らかで、こゝに文明史觀の啓蒙思想の性格が現はされて居る。福澤の史觀は更に「文明論之概略」に於いて展開された。特にその「日本文明の由來」は恐らく一個の見解を以つ日本文明史論を構成せし嚆矢として重要さるべきものである。この議論は日本文明の批判であり、更に福澤自らの封建制度の批判が中心を爲して居ると見なければならない。我文明の特質は權力の偏重であると喝破せることは今日も尙識者の喝采を博して居るが、この見解の由來は恐らく彼自らの下級武士としての體驗より滲み出たものである。これは「福翁自傳」・「舊藩情」に於ける封建社會の分析と批判によつて裏書きされると思ふ。この體驗から遡つて推論して日本歴史を見たものがこの「日本文明の由來」の一編である。こゝに叙述の鋭さがあると共に歴史としての短所も存する。かくて歴史としての體裁は不充分であるが、封建制の批判としての鋭さは比類がない。この文明史論の歸結に於いて封

建社會の社會經濟的の行詰りを論じて居るが、これをやはり權力の偏重によつて解釋して居る。かく社會機構の分析が古代より一律にしか考へられて居ない點は今日よりみて勿論不充分さを認めなければならない。そこで封建制の崩壞に對してもこの偏重の積弊と言ふ以上の解釋はされて居ないが、唯徳川時代の農本主義に對して重商工主義を主張し、又社會組織に於ける生產者と消費者の區別を立てたるが如き慧眼としなければならない。更に又士族社會の階級性を指摘し、舊藩情技術の重視等時代の認識も明確である。之等の認識力は到底修史館一派の正統派の史家には見られない點としなければならない。そこでこの偏重の弊は廢藩後も依然其の趣を改めないからこれでは決して文明の進步を見る事を得ないと。これは恐らく維新後の有司專政を非難したものと思ふ。斯くて日本社會の封建性を鋭く分析して、その淸算を以つて新日本出發の緊要事とした。即ちこの一書は近代日本の生誕を宣言せる文獻として最も意義あるものであつた。

所謂文明史は西洋の文明史の影響が強い。バツクル・ギゾーの思想が粉本となつて居つたと言ふことが常識となつて居る。バツクルの「英國文明史」は大島貞益により「英國開

化史」（明治八年刊）として、土居光華・萱生奉三により「英國文明史」（明治十二年刊）として譯出され、ギゾーは室田充美譯の「西洋開化史」（明治八年刊）と永峯秀樹譯の「歐羅巴文明史」（明治十年刊）が出た。この外にバツクルの抄譯は「明六雜誌」・「民間雜誌」などに散見するし、土居光華編「歐米大家所見集」の裡にも兩書の抄譯がある。當時バツクル・ギゾーの名が喧傳されて居つたことであつたことは驚くべき程で讀書生の思想を風靡し「バツクルの英國文明史が入つて來ると慶應義塾内の空氣が俄然一變しバイブル研究などする者が火の消えた樣になくなつた。」（柳田泉氏「松島剛傳」明治初期の飜譯文學所收）この二書は當時の知識階級の史觀のみならず、その思想全體を揺り動かした。更らに當時の思想家がその影響を強く受けて居つたことは加藤弘之がその自叙傳にバツクルによつて形而上學が荒唐なるを初めて知つたとあるによつて分る。

そこでこの史觀の根本思想は、文明の進歩を目標とするもので、人類は無限に進歩發達すると言ふ信仰から生れ出て居る。この思想は西洋十八世紀の啓蒙思想の裡に見ゆるのであつて、人類社會は未開野蠻の時代から絶えず開化し、合理的の進歩を遂げ自由と平等と平和の社會へ向つて進歩すると言ふのである。中世の宗教的な史觀を捨て、人間の理性の勝利を確信して、歷史の進歩もこれによつて合理的に解釋しようとする。そこで歷史の觀

野は廣くなつた。この啓蒙期の歴史家としてチュルゴー・ボルテール・コンドルセー等が數へられる。この啓蒙家の合理主義は政治論として民約論・天賦人權論を高調し遂にフランス革命を誘發せしめた。コンドルセーは名著「人間精神發達史概要」を書きつゝ、その犧牲となつた。ギゾーの文明史はこの啓蒙思想の流を汲み、その文明史の觀點をフランス文化に集中し、人類の一般的進歩と言ふ樣な抽象的なものより、實證的な研究法へと進んで居る。この點は我國のギゾーより學んだ所である。「文明ノ本質ヲ論スルニ於テ單ニ之ヲ道理上ニ歸シ又專ハラ窮理上ニ求メ各無形ノ理ヲ推シテ文明ノ事物ヲ以テ已カ定メタル理ノ效驗ナルヲ證スルモノアリ何レモ其正ヲ得ンモノナラス、直ニ文明ノ本質ヲ論スル者ハ之ヲ實事ニ求メテ事々着實ナラン事ヲ要ス」（永峰秀樹譯 歐羅巴文明史）この實證的歸納的研究法は更にバックルの思想に強く現はるゝ所である。バックルの「英國文明史」は世界文明の發達を英國の歴史に見出さうとした。その史學思想は十九世紀の自然科學思想の影響を多分に受けコントの實證主義を歴史の上に移したものであつた。更にアダムスミスの流れを汲む自由主義の思想がその史論の裡に織り込まれて居つた。氣候・食物・土地等の自然的環境の物理的な要因を重要し、歸納的方法によつて文明の發達を說明せんとしたものである。

福澤の「文明論之概略」はギゾーの影響が著しい。文明とは人の智德の進歩と言ふ命題はギゾーの言ふ「人智の解發」永峰譯である。文明發達の四階段說もギゾーの所說を引用したものである。更に又統計的・歸納的研究方法の主張はバックルの示教によるものらしい。人心の働きには一定の規則あることを述べバックルの言を舉げ、「一國の人心を一體と爲して之を見れば其働に定則あること實に驚くに堪へたり」と言つて居る。次に田口卯吉の「日本開化小史」はバックルに示教されて書かれたと言はれて居つたが、福田博士はバックルではないギゾーだと斷定された。「鼎軒田口卯吉全集」第二卷解說 この種本の論議は別とするも、ともかく、バックルかギゾーかこの二者の影響のあることは疑なからう。啓蒙期の二大史家がバックル・ギゾーの示教を多分に受けて居ることは、その史觀を特色付けること多大であつた。かくてギゾー・バックルが當時に流行した事は疑ひない。のみならず又その思想が當時の我國學界に受入れられたことは理由なきことではなかつたのである。

所謂文明論とは西洋文明攝取の現はれである。これが西洋知識への欲求となり、更に史的理解に進み、一轉して日本の過去へと眼が轉ぜられ西洋文明に照して國史を批判せんとするに至つた。これが文明史であり、その典型は前述した福澤諭吉の所論である。だからこ

の文明史なるものは嚴密な意味の史學と言ふよりも、寧ろ文明論であり、文明批評である。就中福澤に見ゆるが如く啓蒙思想の封建思想批判が歷史的型態を採つたものであつた。この時代は文明が標語であり、何事も文明の二字を冠した。そこで文明史、又は開化史と稱するものが續出した。これ等を仔細に見るに今日考へられて居る樣な文化史とは異る。從來の歷史よりは遙かに視野が廣くなつて、諸々の文化現象も取り入れられて居るが、それは文明史そのものが文明の歷史と言ふより寧ろ文明批評乃至は社會批評であつたからである。そこで或は時の政治問題が反映して政治史的傾向が見ゆるのである。北川藤太の「日本文明史」の序文に「今ヤ眼ヲ放テ我國今日ノ情態ヲ觀察スレハ武門數百年ノ壓制武斷ハ一朝地ニ墜テ政柄ノ王家ニ歸セショリ制度法律其他社會ニ行ハル、百般ノ事物ハ盡ク其面目ヲ改新シ復タ舊時ノ日本ニアラスト雖モ之ヲ歐米各國ノ文化ニ比スレハ知識尙未タ彼カ如ク發達セス」、かくてこの現況の匡正の爲めに論客は或は民選議院の設立を論ずるあり、保護稅の利を說くあり、自由貿易を出張する者あるが「皆ナ今日現行ノ景況ニ就テ其論斷ヲ下シタルモノニシテ恰モ弊屋ノ敗所ヲ見病者ノ痛所ヲ聞テ直ニ其營繕治療ニ手ヲ着セントスルニ異ラズ、復タ一人ノ其屋ノ因テ破ル、所以ノ原因ヲ推シ其病ノ由テ起ル所ノ本源

ヲ完メ以テ其破敗ヲ繕ヒ其病根ヲ斷ント企ツル者ナシ」と言つて居る。

斯くて文明史論はその內容が多岐である。批評の對照によつて傾向を異にする。過去に對しては封建文化の批判となり、これが又現況に照して有司の專政政治の批判となる。この政治批判の背後には自由民權論の在したことは說明する迄もあるまい。この運動は憲法發布・國會開設と言ふ政治的新體制を目的としたが、その中心に自由民權と言ふイデオロギーを形成し、このイデオロギーによつて社會批判を試みて居る。當時の民權派の新聞雜誌に現はれた評論は種々の問題を採り上げて論じられて居るが、その裡に歷史的問題に關する論說も見ゆる。そしてこの政治運動の角度から執筆された所謂文明史もある。北川藤太の「日本文明史」（明治十一年刊）は福澤の「文明論之概略」に刺戟されたものであるが、民權論を背景とせることが窺はれる。この後に出た室田充美の「大日本文明史」。福田久松の「大日本文明略史」の如きこの系統の史論として見るべきものである。この所謂民權派の史論は史學として見る時は如何にも素朴である。併し目的史學として見る時はその社會的存在の意義は注目に價する。これは江戶時代の「日本外史」によつて代表される尊王論的の史論と傾向的の點に共通性があるものである。

かくて所謂文明史と一言に概括されて居るが、夫々の史論の立場は複雑であつて、明治五・六年より、十年代・二十年代と社會・政治情勢の微妙な推移と共に種々の相貌を具現して居る。

田口博士の立場は、勃興期の資本家階級を代表するもので、「日本開化小史」に現はれた思想は功利主義思想に據り各人の射利心・企業心を是認し、開化と財貨とは相關的に自から進歩するものである。近世文化はこの結果であり、國を變ふる者宜しくこれを考へて干渉保護の迷を解くべしと言つて居るのは、博士の自由貿易論の主張そのまゝである。

「日本開化小史」は先きの福澤の書に比すると歴史としての體裁は遙に完備して居る。各時代への認識も福澤の如き單一でない。視野も廣く、各時代の特性も一通り把握されて居るが、一讀氣付く事はその史的發展の解釋が心理的に行はれて居ることである。これは福澤の文明論にも見ゆることであるが、田口博士の史觀はこれを以つて一貫されて居る。但しその所論は經驗論的で觀念論的ではない。財貨と人心を相關的に考へるのは唯物論的であるが、全體として唯物論に徹底したものではない。恐らく英國流の經驗論の影響を受けたものと思ふ。從つて封建文化の分析の如き或る程度迄認識が進められ乍ら、中途で止つて「是れ固より人の天性に於て此の

如きを欲するものあるに基くものにして、封建制度の下に至りて非常に發達したるものと言はざるべからず。後の人仔細に之を玩味せば社會に一定の理ありて、種々の制度の下に種々の作用を爲すことを解するに難からざるべきなり。」（同書第十二章）と言つて居るのは博士の史觀の本質を示すものである。

然るに後の「史海」時代の思想に至るとかなり轉回のあることが見逃せない。「史海」に於ける「武内宿禰」以下の所謂輪切體の史論は「大日本史」に對する考證的の抗議である。――斯樣に言ふのは極端かもしれぬが、抗議的考證が最も注目を引く。――併しその批判は「日本開化小史」に見られる樣な急進的な論調は失はれて居る。その立場は寧ろ正統派の考證史學に近いものである。――この雜誌には重野・久米・佐藤誠實博士の考證史論が掲載されて居る。――この時代の博士の歷史の定義は編年體・紀事體・史論體の三種ありとし、この中史論體を採り、しかもその史論體たるや議論を交へず、單に事件と事件との關係を說明するものである。開化とは特に文運の進みたる時代のみを稱するに非ずして如何なる野蠻時代にも存する。即ち社會全體に渉れる事件と事件との關係を說明するものが開化史であると。（「歷史試論」明治二十一年、全集第一卷所收）即ち明治初期時代の文明論に見ゆる急進的な要素は拔き去

られ、極めて抽象的な概念となつて居る。更に「歴史は科學に非ず」（明治二十八年、全集第一卷所收）と言ふ論文では歴史を記述的の學問とし、自然科學と區別して、新カント派の文化科學に近い概念を立てゝ居る。

文明史とは明治初年の西洋文明論より出發し、それが日本文明の史的評論となり、それに當時の風俗改良論や自由民權論が反映して居つたものである。それを一貫する傾向は啓蒙的であり、歐化的であつた。從つてその流行時代は凡そ十年代迄である。粉本となつたのはバツクル・ギゾー等であつた。

文明史の横行も一方から見ると我國の史學、特に正統的な史學研究の未發達に因るのである。この時代は官府の修史事業は漸く緒に就いたばかりで、一般の讀書界とは未だ沒交渉である。流布した史書と言へば「日本外史」・「國史略」かその亞流程度のものしかなかつた。其處でこれ等の舊式な歴史の舊套を打破した新鮮な日本歴史への要求は強かつた。これに投じたのが文明史であつたのである。近代精神に即して書かれた所に當時の青年の嗜好に投ずるものがあつた。又民權論的の論調を帶びたものはこの運動の風靡せる時代に愛讀せられたことは當然である。更に開化史・文明史の名稱そのものが魅力があつたので

ある。然るに十年代の末からこの情勢も變り、中央の史學界が形成され、その専門的研究も發表される。思想界の文明開化・歐化思想も後退すると共に文明史も下火となつてしまつた。先きに指摘した田口博士の史學思想が急進的な「日本開化小史」より、考證學的なものへ移つたことは文明史の變遷の一面を示すものである。併しその實質は民友社その他の在野の史論家藤田茂吉・島田三郎・徳富蘇峯・山路愛山・竹越與三郎等にその血脈が引繼がれた。（白柳秀湖氏「明治の史論家」（改造社版日本文學講座））更に下つて明治末期・大正時代の社會運動の華やかなりの在野史家へと脈々相傳ふるものがあるのである。

文明史觀に就いて、松本彦次郎氏『明治時代に於ける日本文化史の展望』（明治以後に於ける歷史學の發達）・西田直二郎博士「日本文化史序説」・伊豆公夫氏「日本史學史」・史學會編「本邦史學史論叢」所收伊東多三郎氏・小野壽人氏の論考等がある。

## 考證史學

明治政府の修史事業は明治二年四月四日三條實美を召されて賜つた御沙汰に肇る。

修史ハ萬世不朽ノ大典、祖宗ノ盛擧ナルニ三代實錄以後絕テ續ナキハ豈大闕典ニ非スヤ

今ヤ鎌倉已降武門專權ノ弊ヲ革除シ政務ヲ振興セリ故ニ史局ヲ開キ　祖宗ノ芳躅ヲ繼キ大ニ文教ヲ天下ニ施サント欲シ總裁ノ職ニ任ス須ク速ニ君臣名分ノ誼ヲ正シ華夷内外ノ辨ヲ明ニシ以テ天下ノ綱常ヲ扶植セヨ

是より先き同年三月二十日史料編輯國史校正局を舊和學講談所に置いた。（後昌平學校に移す）これは「塙史料」の續修である。然るにこの勅諚の出づるに及んで「六國史」を繼ぐ大修史事業が創設されたのである。これは言ふ迄もなく王政復古の史學的表現に外ならない。而して之が後の修史局、更に現在の史料編纂所の濫觴となるのである。明治維新は復古主義を標榜して居る。舊制打破の一面に斯様な修史事業が起され、しかもその修史の方針が復古的である事はこの維新改革の本質の一面を示すものであらう。この歴史主義的精神は政府直轄の東京大學に於ける歴史教育に對する見解、（「東京帝國大學五十年史」）又諸官廳に於ける「舊典類纂」等の編纂にも現はれて居る。更に明治二十年前後を期して所謂國粹主義としてこの歴史主義が歐化主義を壓して起つて居るのである。而して修史館に於ける「大日本編年史」の編纂はこの復古主義的修史事業が愈々具體化されたものであつて、その一面に文明史より西洋純正史學の移植と並行し、明治史學發達の特性を形成するものである。

往古「六國史」編纂の時代は常設の史官は無かつた。然るにこの時の御沙汰によつて始めて常設の史局が設けられ、そして公家の筆頭たる三條實美が總裁に任ぜられたのである。明治五年十月四日太政官正院の外史所管中に歴史課・地誌課を置き、「復古記」・「皇親譜」等を編輯せしめた。但し歴史課は記錄課の分局となつて居る。更に明治八年四月十四日太政官正院の職制改正に當つて歴史課を改めて修史局と爲し、内史の下に屬せしめた。玆に始めて史局が獨立の形を採り、本格的な事業が開始さるゝに至つたのである。

扨て玆で一つの問題がある。既述の如く明治二年修史の大詔には「六國史」を繼ぐ事が大眼目であつた。然るに修史館時代の「大日本編年史」は「大日本史」繼承と變更されて居る。この變更は單なる便宜上と言ふ以上の意味があると思ふのである。其處でこれが如何なる理由から、又何時頃に變更されたかと言ふことが一つの問題となるのである。既に修史局開設當時の編纂方針を書いた記錄の中にはこの變更の過程が察されるものがある。即ち「大日本史出ヌ、及テ神武天皇以來南北朝ニ至ルマテ始テ一部ノ正史アリ」(明治八年「修史事宜」)と言ひ「大日本史」を以て正史と認め、それを繼ぐ修史を問題として居る。そこで史局の分課もこれに準じて設けられて居る。四課に分たれ、第四課は「編史料」の續修を爲した。これが今日「大日本史料」第一編以降の源流である。

扨てこの方針の變更は、「六國史」と「大日本史」の相違に着目する時は寧ろ當を得たことである。「六國史」繼承は復古主義を上代に求むる時は當然の事であつたが、明治史學が近世史學の發展である以上これを超えて直ちに上代史學を繼ぐことは出來ない。既に水戸史官は「六國史」を批判し、その上に近世史學たる「大日本史」を完成せるにおいておやである。更に又「大日本史」に於いては考證的方法も顯著なる發達を爲し日本史學として獨自の形態を備へて居つたから、明治の修史がこれを繼いで出發せんとしたことは謂はれなきことでない。但し「大日本史」を全面的に繼承するものではなく、これに對して批判的態度を採つて居ることは、この後の考證主義の發展の裡に見られる所である。

拙稿「島津家編纂皇朝世鑑と明治初期の修史事業」（史學雜誌五十ノ十二）參照

修史局は正史編纂の準備として先づ史料の蒐集から始められた。「史料」と稱する編年的の史料集が編纂されたが、これは「塙史料」の形式を採つて居る。これが爲めに各地に資料採訪が行はれて居る。この史料蒐集は江戸時代の古文書採訪の繼續であつたが、後の國史學發展に基礎材料を與ふるものであつた。

明治十年一月更に修史局を廢して、修史館を置いた。是より先きその編修には重野安繹・

川田剛の兩博士を始め、藤野正啓・岡鹿門等の人々が擧げられ、尋いで久米邦武・星野恒・日下寛・菅政友等の諸氏が招致された。この修史局・修史館の史風は「大日本史」を繼承せる點に於いて江戸時代の正統史學の傳統を襲ふたものたることは否み難い。そこでその撰修を主裁せる史家は漢學系の人々であつた。この陣容を以つて編修事業は進み、遂に明治十五年より我國の正史たる「大日本編年史」の編纂が開始された。

「大日本編年史」の持つ性質に就いては、前掲の摘稿に若干解說して置いたが、要之やはり支那史學系の所謂編年史を出づるものもなかつた。西洋の史體を加味せんとする意向が見えて居るが、實際に於いて漢文を以つて書く編年史としての既成の形式に拘束されて殆んど實現はされて居ない。だからこの點に於いて依然江戸時代の史學の傳統を逐ふものに過ぎなかつた。併し又一方に於いて江戸時代の封建史學とは峻別せらるべき特性があることを看却してはならない。これあるが爲めにこの編年史は明治の修史事業としての存在性を具有するのであつた。これに就いて次の如き特質がある。

第一は江戸時代の史學思想を力強く支配して居つた勸懲主義史學の否定である。歷史叙述に盛られた目的意識を洗ひ去つて客觀的な事實を列序しようとする考へ方で、史局一派

の學者の思想の裡に見られるものである。この思想はその由來に於いては「春秋」・「通鑑綱目」などに見られるものを受けた江戸時代の朱子學派の思想に對する考證學派の客觀主義と言へる。だから直接西洋史學の影響ではない。明治十四五年頃より考證派の總帥重野博士を始め久米・星野博士等が盛んにこれを主張し學界はこれが爲めに頗る活氣を帶びた。重野博士が「史學に從事する者は其心至公至平ならざるべからず」と言ひ、久米博士が「勸懲の舊習を洗ふて歷史を見よ」と言つたのはこの立場を最も素直に語つたものである。斯くて幕末考證學の思想系統はこの時代に至つて、著しく積極性を附帶され、教訓主義に對する排撃となつた。本書第一編に於いて幕末考證學の性質に就いて若干指摘して置いたが、これが時代の轉換と共に一轉して封建史學に對する批判の武器となつたのである。即ちこの考證學は舊封建史學の內部にアンチテーゼとして發生し、この時に破壞的の作用を現はしたものであつた。かくて儒教史學が自己清算をして道德より分離せしられ、その結果史學の獨立と言ふ傾向に向はんとして居つたのである。

この考證主義に積極性を與へたものはもとより時代の力である。併し又一面には積極性に素材を與へたものは修史局に於ける史料蒐集の御蔭であつた。前述の樣に古文書古記錄

の類が夥しく採訪され修史上に利用さるゝに及び、既成史學の不備誤謬が發見された。これは略々明治十五年前後、「大日本編年史」編纂の開始さるゝ前後からであつた。この「編年史」は「大日本史」の後を受けて起稿と決定したが、尚異見が出た結果少しく遡つて後醍醐天皇の文保二年より起筆されることゝなつた。そこで所謂南北朝時代が「大日本史」の記事と並行して起稿されると共に、史料に照して、その誤謬矛盾が發見され、其所に考證的方法が活動する機會を與へられたのである。所謂抹殺論とはこの考證的研究の外貌に過ぎない。(詳しくは前掲拙稿を參照されたい。) この抹殺論的意見を始めて世に公にされたのは明治十七年二月重野博士の東京學士會院に於ける講演「世上流布の史傳多く事實を誤るの說」(「日本外史」の批判)であらうと思ふ。これに尋いで博士は次々と意見を公にされ、又久米博士も勇敢に論陣を張つた。併しこれ以前にも既に「大日本史」や「日本外史」等に對する考證的批判の聲は見えて居る。その一例として明治六・七年代に起稿された川田剛博士の「日本外史辨誤」を擧げる。(拙稿「川田剛博士の外史辨誤に就いて」東洋文化一八一・一八二・一八三)

抹殺論はこれより以降明治二十年代の中葉にかけて一時論壇を賑はし頗る喧傳されたが、學術的訓練のない民間から過重の反響を買つた。その重なる題目として兒島高德・日蓮上

入籠口の法難。櫻井驛の別等があり、就中兒島高德の史的抹殺は囂々たる非難を浴びた。併しこの抹殺も元を尋ぬれば別に不思議はない。冷靜な考證的の研究である。試みに問題の兒島高德抹殺問題の正體を見るに次の如くである。久米宗所藏「大日本編年史」初稿本か、（久米博士自筆本）元弘二年三月十七日の條には後醍醐天皇院の莊御駐輦の事を記して

乘輿至美作院莊、不豫駐蹕數日、行宮狹小、護兵近見御座（增鏡）備前人兒島高德、和田範長子也、範長爲備後守、因稱備後三郎（太平記）

とあつて高德は「太平記」によつて本文に記され、未だ毫も抹殺的意見は現れて居ない。然るにその再稿本と覺しき第二本を見ると、「近見御座（增鏡）」迄は初稿本と同樣であるが、それ以下は本文より下され、細註として次の如くなつて居る。

太平記曰、備前人和田範長長子兒島高德、範長爲備後守、因稱備後三郎、好讀書、方帝狩笠置、聚兵應義、帝賜以錦、（以下「太平記」によつて高德の事績を略記し、櫻樹題詩の事に及んで居る。よつて略す。且つ按として次の考證がある。）按帝西遷、路有程道路供張、且自播赴雲、經作者順、過舟坂者迂、記謂遽轉路可疑、高德事未得他據、錄以備考

右が高德抹殺論の發端である。正確なる史料が出ないから、註記して備考とすると言ふ

のである。その後研究進められ、高德の史的抹殺論となつた。明治廿三年重野博士は史學會に於いて「兒島高德考」を公にした。この抹殺說には贊否の聲高く、この前後諸家の論が多く發表された。この問題に就いて重野博士は「史局は明治九年に始めて歷史を調べ出せしより、明治十四年から編年史の編纂にかゝりて居る。後醍醐天皇の御卽位からの事を書き始めた。所で第一兒島高德の事を擧げねばならん、高德の事に就ては何分疑はしき箇條多く、史料は何れも反覆是を調べしも怪しきことのみ」（兒島高德考）又「高德ハ日本史ニ本傳アレドモ太平記一書ノ引用ナリ、今ニモ古文書・古記錄等ニ確證出デナハ編年書ノ細註ハ取消スヘシ」（史學會に對する感謝狀「重野博士史學論文集」所收）卽ちその元を尋ぬれば「大日本編年史」編纂上の考證に過ぎないである。この點は世間から甚しく誤解された。併しこの誤解非難は考證史學一派の道學的史學——卽ち在來の儒教的の史學——に對する否認論と結びつけて發生されたものであつたから全く謂はれないものでもなかつた。川田剛博士がこの點で重野博士とはその見解を異にし、寧ろ考證史學の弊を突き、逆に道學的史學を辯護されたことは、抹殺論に對する一種の反應を巧みに表現されたものであつた。（前揭拙稿「川田博士の外史辨誤に就いて」參照）

兒島高德に就いては後田中義成博士の復活說が出た。八代國治博士の「兒島高德と國史觀實」

に關係論文目錄がある。右の「大日本編年史」初稿・再稿本の著作年代は明記がないが、凡そ明十五・六・七年頃のものと思はれる。この他日蓮上人龍口法難抹殺論に對してはこれ又宗門關係からの激烈な反駁が出た。中に田中智學師の「龍口法難論」は反證明辨、史學的論文としても推奬するに足る傑作である。

兒島高德の問題は遡つてその原據たる「太平記」の史的批判となり、途に「太平記は史學に益なし」と言ふ奇矯な議論を生むに至つた。要之この抹殺論は史學研究としては初步的な事實の考證であるが、その研究法は批料史判として極めて綿密に行はれて居る。これは又西洋の史學研究法にも適合するもので、この點に於いて明治の史學史上抹殺すべからざる功績を殘せるものとして、重野・久米諸博士等の名は特記せらるべきものである。

斯くて考證主義の史料批判學が起つた。これによつて問題となつたのは「太平記」等の史料性であつたが、更に全體として「大日本史」或は「日本外史」等の前代史學が批判の的となつた。而してこの批判は「大日本編年史」編修が機緣となつたから、其處にこの「編年史」の近代的傾向が認められるのである。併しこの「編年史」を中心とする考證主義は史料批判以上には進む事が出來なかつた。その裡には尙多くの前時代的殘滓――例へば編

年史と言ふ形式の如き——を多く包含し、遂にその拘束の爲めに流産するのやむなきに至つた。故にこの編年史は過渡的の性質を持つものであつた。併し考證史學そのものは、後章に述ぶる如く、西洋史學の輸入に際して素地を提供し、これと融合してその傳統は引續き現代にも流れて居るとも言へるのである。

「大日本編年史」中絶の理由に就いては三浦周行博士の「日本史學史概説」（「日本史の研究」第二輯四六六頁）。辻善之助博士「本邦に於ける修史の沿革と國史學の成立」（「本邦史學史論叢」上卷十七頁）に大要が盡きて居る。私が故三上博士より親しく承つたことも右兩博士の所說と略同樣であつた。

明治初期に於ける正統的と言ふべき中心的の地位を占めて居つたのは儒教系統（支那史學系）のもので、これは修史局による官府の修史事業であつた。これが後述依然正統的な流を歩むで現在に接して居る。勿論それは多くの修正を加へられ、又時代の影響を受けつつ發展したのであつた。然るにこの系統に對抗的なものとして國學系の史學がある。國學者は史學に於いても儒者の業蹟に對して批判的意識の下に出發した。特に漢意を斥

けて古道を見出さんとする所から自から考證的研究法が開拓され、本居宣長・伴信友等が多くの業績を殘し、これが幕末の國學に繼承され、以つて明治に至つて居る。明治初期の國史學に對し彼等の貢獻は漢學系の人々に勝るとも劣らないものがある。

明治二年七月に成立した大學校は（舊昌平學校の後身）從來の儒學中心のものから、新興の勢力だつた國學系が加へられ寧ろ國學中心のものとなつた。これが新政府の教育政策として大いなる期待がかけられて居つたのであつたが、實際に於いてはその內部的矛盾と、之に加ふるにこの學校に登用された漢學者對國學者間の軋轢によつて間もなく崩壊した。これは明治初期教育史上の重要な問題である。（拙稿「明治初年の學神祭に就いて」國學院雜誌四五ノ一・二）

この大學關係の學者が先づ後の和漢學の中心を占むる人々であるが、この裡史學に關係ある人々を列擧すると漢學系では川田剛・岡鹿門・藤野正啓・青山延光（「國史紀事本末」の著者にして水戶派の史家、但明治三年歿）賴惟復（山陽の第二子、號支峰）等で川田・岡・藤野は何れも後修史局一派を形成した。但し同派の總帥重野博士は未だこの時には東京には出て居ない。次に國學派の人々を見るに、平田鐵胤・矢野玄道・丸山作樂・岡本保孝・木村正辭・伊能穎則・横山由清・小中村清矩・井上賴圀・榊原芳野・塙忠韶・黑川眞賴等であつて當時の國學系の學者は殆んど網羅され

て居ると言つてよい。斯樣にしてこの大學校には諸學者が集中されて居つたが、前述の如く廢止の運命に逢遇し、その結果彼等の一部は文部省等に登用され、或は又野に下つて分散した。その後修史局の開設さるゝに及んで漢學者の一部はこれに吸收された。川田・藤野等即ち是である。然るに國學系の人々の動向を見るに大低文部省或は神祇官・宣敎使に關係し、後に東京大學に擧げられた者が多い。この種國史の方面で後迄活躍した人々を擧ぐるに木村正辭は舊大學以後は神祇官司法省太政官文部省等に出仕し、「史略」(明治四年)及「國史纂」(明治十一年)の著がある。横山由淸は舊大學校に於いて史料編輯・六國史校正を爲し、後は太政官・左院・元老院等に出仕し、「舊典類纂」の編纂を爲し、東京大學に日本法制史を講じたが明治十二年歿した。黑川眞賴は明治六年文部省御用を命ぜられ「史略考證」・「國史槩」の編纂に與り後東京大學に出た。小中村淸矩は神祇官・式部省に出仕し、後東京大學の敎授となり、特に同大學の古典講習科國書課を總理し、又「古事類苑」の纂輯を總括する等國學派の頭目の觀があつた。

前述の如く太政官より修史局・修史館に繼續された我が修史事業の主體は重野・川田等の儒敎系の一派に殆んど獨占され、正史編纂の大事業もその手によつて完成されんとする

形勢になつた。そこで之に對して我國振りの國史を作らんとする運動が起された。この國學派の運動が具體化されたのは明治十六年結成された史學協會である。會長副島種臣・副會長谷干城・幹事長丸山作樂・井上賴圀で、編纂委員には前掲の木村・黑川・小中村・塙・矢野・その他飯田武郷・小杉榲邨・本居豐穎等の國學者を網羅し、修史館一派の儒教派の國史學者に對して隱然一敵國を形成せるものであつた。同派の主張は同年六月十日開會式に於ける丸山幹事長の創立主旨の演說に明らかである。

我國の歷史は西洋の文明國に比するに頗る幼稚で眞に歷史の體裁を得た者は尠い。しかも漢文にして漢史體であり、他國の國語を以つて自國の歷史を寫すは不體裁である。かくて「大日本史」を國學的見地より斥け、國文體の「神皇正統記」を以て文體・主張を得て國史の體の範たる者と爲して居る。そこでこの缺點を補はん爲めに體裁ある史典を編纂せんとするのがこの協會の目的である。卽ち儒教系の國史に對する國學者派の抗議たることが分るのである。そこでその編纂は正史と部門史に分け、部門史は更に開闢史以下二十八門に分れて居る。協會は機關誌として「史學協會雜誌」を發刊し、部門史は順次に揭載されて居る。但し正史編纂が着手になつたか否かは明かでない。この雜誌は明治十六年七月

第一號を出し、同十八年十二月第二十八號を以つて終つて居る。この協會の結末に就いては聞く所がないが、「大日本編年史」が中絶されたのも國學系の學者の反對意見が與つて居つたと言はれて居るから、この漢學・國學兩系統の對立狀態は永く續いたものらしい。

以上の儒敎系と國學系の兩派は明治二十年帝國大學に於ける史學科に合流し、爾來我史學界の主流を爲して現代に至つて居る。されば目を轉じて西洋史學の輸入の問題に移らなければならない。

# 第三章　西洋近代史學の輸入

本書の冒頭に述べた如く、我國に西洋史學理論が輸入されたことは我史學史の上に一期を劃するものであつた。江戸時代に於ける西洋史の知識の輸入は史學理論と言ふ方面は殆んど顧みられなかつたことは既に指適して置いた。これは當時の西洋史學そのもの〻程度如何と言ふことも考慮しなければなるまいし、又我國にはともかく獨自の史觀や研究法が存在して居つたからである。然るに明治となり西洋の諸學術知識が次第に輸入されるに就いて、史學も一つの學問として考へられる樣になつた。この代表的なものとして西周の學術概論と言ふべき「百學連環」の一節を紹介したい。

「百學連環」は明治三・四・五年頃の著作にか〻る。夙に森鷗外の「西周傳」に紹介され、又近くは麻生義輝氏の「西周哲學著作集」の裡にその概略が見ゆる。更に目下「西周全集」の編纂が準備中で、その裡にこの書の全部が收錄される豫定となつて居るから完全なテクストはこの全集によつて初めて公にされる譯である。

この書に於いは學問を普通學と殊別學に分ち、且學問を夫々學域によつて分ち、又記述學と規範學の區別を立つる等學問の本質と體系が明瞭に示されて居る。學には規範が必要であるが、強て之を求むと抑て眞を失ふ害がある。之は學問に規範學と記述學の區別あると言ふので「又學中規模になしかたきものあり、history 及び natural history にして歴史及び造化史の學是なり。卽ち是を discriptive science 記述體の學といふ。然れども近來に至りては西洋一般に歴史を system に書き得るに至れり。古昔司馬遷の史記を編せしは本紀より世家列傳志と、條理立ちて略々規模に近きものなり。當今西洋の歴史は civilization 卽ち開化を目的とし、之に基きて書き記す、故に其條理立ちて自から規模を得たりとす。」歴史を以つて普通學の第一に置いて居るが、その理由は「凡そ學んで今をしらんには必しも之を古に考へさるべからす。學は素より古へを知り今を知り彼れを知り己れを知るを要するか故に總て諸學を以て歴史と稱するも亦可なりとす」と言ふに在るので、コムトが諸學問の基本として數學を第一に置いたのと異り、學問を以て温古知新の具とする東洋的な考へ方が現はれて居る。この點は吾人の注意を要する點と思ふ。又これは一種の歴史主義的な考へ方である。次に歴史の定義であるが「History 卽ち歴史たるものは古今人世の沿革

及び履歴を主として書き記せしものを云ふなり」とし、この歴史に三つの體裁がある。第一、正史 history（史記漢書の如き是なり）、第二、編年史 chronicle（左傳の如きもの是なり）、第三、年歴箋 annals（和漢年契の如き是なり我年代記の如し）この裡正史に就いては次の如き說明を揭げて居る。History is a methodical refores of important events which concern a community of men usually so arrangede to show the connexion of cause and effects. 正史を更に萬國史と各國史に分つ。次に史料の說明に入り、記錄 document と、傳 anecdote を擧げ「總て歴史を編するには其據るところのものを集め其中確實なるものを撰び擧げて記せさるべからざるものなり」と言つて居る。かくて歴史の部を終り考古學・地理學の部に入つて居る。この西周の史學思想は我國在來の史學的知識と西洋の百科全書あたりから得た若干の知識を加味して組立てゝ居るものである。全體として未だ素朴なものであるが、必ずしも飜譯でなく、東西の史學を綜合しようとして居る點は啓蒙的と過渡期的の性質を現はし興味の深いものがある。

文明史觀は、その根本となつたものはギゾー・バツクル等で、是等は何れも正統的な史家でない。後に移植を見たドイツ史學とは別系統に屬する。併しこの所謂文明史は色々な

意味で日本の史學思想を啓蒙して封建的の史觀を打破する上に大きな貢獻を爲した。併し文明史は史論としての鋭さに反比例して方法論的には薄弱で、史學として粗笨たることは隱す事が出來ない。更らに西洋の純正史學の輸入が未だ開始されたかつたので、その過渡的の現象として又一方には經濟學・社會學等の社會科學の知識の援用を見た。この傾向は既に福澤諭吉や田口卯吉の唱導せる處であつたが、十年代に至つて社會學の流行につれて一時その知識を應用した社會學的の史學を唱道するものが續出した。

社會學の始祖たるコムトの學説は前述した樣に既に幕末和蘭に留學した西周・津田眞道によつて輸入されて居る。その社會學説は西周の明治初年の論稿「生性發蘊」の裡に紹介されて居る。この裡では社會學を「人間學」と譯して居る。尋いで「交際學」とも譯された。社會學が定譯となつたのは明治十三年の「斯氏教育論」(尺振八譯)以來のことゝ言はれて居る。明治十年代に至つて社會學は諸學の綜合學として重ぜられたが、この時代に最も讀まれたのはスペンサーであつた。スペンサーの名は「日本開化小史」にも引用されて居る。その時代にスペンサーの與類は社會科學の方面は勿論のこと、政治・教育方面にも指導的の學説とな

つて居つた。（下出隼吉氏「明治社會思想研究」）そこで史學の方面もこの影響を受けたのであつたが、これに貢献のあつたのは外山正一・加藤弘之・有賀長雄・三宅米吉の諸博士であつた。殆んど東京大學系の社會科學者で、所謂文明史派の人々とは少しく系統を異にする。文明史派の在野的たるに對してこれは官學系であり、修史館の支那史學たるに對して洋學系であつた。

この社會學應用の試みの一例として明治十四年發表された加藤博士の「日本開化之源因」がある。更にこの立場から日本史を執筆せんとしたのは三宅博士の「日本史學提要」（明治十九年刊）であつた。この書は特に社會學の方法に依ると明言し、その方法を序文中に詳論して居る。バックル・コムトの名を擧げ「歴史を講究する者は專ら社會學の原理に導かれて之を講究せざるべからず」と言つて居る。この書は第一冊の刊行のみで未刊に終つたが、その續刊が故意に止められたと言ふ話もある。よつてその見解が世の視聽を集めたものであつたことが分る。この外にスペンサーの紹介者として貢献のあつた外山博士も「日本知識道德史」と言ふ試論を殘して居る。（外山博士「丶山存稿」）更にこの社會學的史學に理論的根據を與へたのは有賀博士である。その「社會學」（明治十六年刊）に於いてスペンサーを祖述しつゝ、社會學とは社會進化の理法を科學的に説明する學問であり、これに對して歴史は個別的に夫々の

國家・社會の進化發展を研究する學問で、言はゞ應用社會學であると說いた。この社會學的史學の流行は西洋の純正史學の移植に至る迄の過渡的現象で、文明史論の方法論的皆無さに對して學問的確實性を附與せんとするものであつた。併し結局史學として獨立性を缺くものであり、ドイツ史學の輸入によつて間もなくその姿を沒してしまつた。

拙稿「明治初年に於ける歷史學と社會學の交涉」(形成第七號)

方法論としては以上の樣な經過を經て居つたが、又史料學的方面に於いても文明史は進んで居なかつた。「日本開化小史」の如き當時として博涉を誇るに足るものであつたが、史料に對する考證批判は殆んど顧みられて居ない。又その史料も既刊本を出でず、根本史料と稱すべき古文書・古記錄には及んで居ない。之等は史論そのもの丶本質を疵づけるものでないとしても、史學としては重大な缺點を持つものとしなければならない。この點は勿論當時の史學一般の未發達、特に民間史家としては遙かにその力を越えたものであつたから、寧ろ不可抗力と見なければならない。これを開拓するものは當時としては何と言つても官府の力を俟つ外なく、これが修史局の事業によつて先づ開始された所以である。

修史局より修史館に至る當時史學は勿論支那史學の系統を出づるものではなかつた。併

しその裡に西洋の史體をも參酌せんとする意向の見ゆることは特に注意を要するものがある。即ち明治八年の「修史事宜」に言及され、尋いで重野博士の「國史編纂の方法を論ず」(明治十二年)に於いて詳細に論ぜられて居る。この意向が遂に當局を動かし渡歐の末松謙澄博士に英佛歷史方法取調を依囑する結果となり、これがゼルフィ Zerffi の The Science of History の著述とその將來となつたのである。(拙稿「島津家編纂皇朝世鑑と明治初期の修史事業」(史學雜誌五〇ノ一二)參照)

この書は七七三頁の大著である。卷首に末松博士のゼルフィ宛の手紙がある。その裡に日本で將來歷史を書く爲めに西洋に於ける歷史の樣式(スタイル)・企劃(プラン)・方法(メソッド)を知る必要があるから西洋の優れた歷史及歷史家の大綱を著してもらいたいと言ふ意味の言葉がある。東洋にも古來優れた歷史を持つて居るが、それは哲學的考察に缺けて居ると告白して居るが、これも我國傳統史學の歷史的認識の淺薄さを憂へ西洋史學によつて學的の組織を與へようとする氣運を示すものである。更に又調査の內容に就いて十二項の目があるが、この裡には西洋の史學史より史學の樣式・目的と言ふ樣な歷史哲學的問題の回答をも求めて居る。バックル・ギゾーの名も見えて居るが、當時は既に之等に攝らなかつた樣子が文字の間に見ゆる。

この書の特質は今井教授の論文に指摘がある樣に、ドイツ史學を學術的な點で賞揚し、後

のドイツ史學輸入に深い暗示を與へて居る。

この書は修史館の修史參考が目的であつたから、直ちに飜譯に着手され中村正直と嵯峨正作によつて完了された。現在その稿本が「史學」として殘つて居る。

扨て修史館に於いては前述の如く明治十五年に愈々「大日本編年史」の撰修が開始されたが、依然として漢文體の編年史であつて、西洋史體を參酌せんとしても實際上殆んど不可能なものであつた。これに代つて現れたのは帝國大學に於ける史學科の新設である。明治二十年ドイツよりルードウツヒ、リースの招傭によつて、始めて本格的な西洋史學の學修が開始され、學問として史學の移植が行はれた。リース博士は人も知る如くランケの學統を受けた人である。博士によりドイツ史學を中心とする正統的な史學が教へられたことは當然である。明治二十一年國史學科の設立に當つてリースは將來の歷史編纂に就いて資料の蒐集・古文書學其他の補助學の必要を力說して居る。（「東京帝國大學五十年史」上冊）そしてリース博士自ら日歐交渉史に關する研究を公にした。

このドイツ史學の移植は、更らにこの時代にドイツに留學した坪井九馬三・箕作元八博士等によつて進められ、歸來やはりランケの學風が唱道された。所が當時の史學界には修史館を中心とする考證學的の史學が尚勢力を占めて居つた。特にその修史事業は帝國大學

に移管されて居つたから、兩史學は直接接觸するの機會となつたのである。考證史學そのものは前述の樣に支那史學の形式的傳統を脫却し得ずして漸く自然と行き詰るの狀態に在つた。唯史料の考證批判の方面が西洋史學の史料批判と共通性があり、この點を契機として西洋史學が消化されると言ふ現象を呈した。更らにこの史料學に素材を與へる古文書の蒐集整理は、これ又江戶時代の古文書採訪の遺鉢を繼ぐ考證派によつて既に着手されて居つた。そこで今井教授の言はるゝ如く「全體として言へば西洋史學の我國の史學に對する影響は他の多くの學科の場合に於ける如く根本的であつたと言はれない。」これは「我國に既に相當進步した獨自の國史學が存在したからである。」この樣に西洋史學の受入れに就いて在來の史學の傳統と綜合せることは我國近代史學に特殊性を附するものであつた。故に我國の近代史學の研究にはこの間の消息の分析が必要であらう。例へば修史館に於いて編纂された「國史眼」の如き、當時として出色の出來榮えのものであつたが、これが史學會に於いて刊行され、永く國史の體系の粉本となつて居つた。又第一編に指摘して置いた古文書學の如きも、これが學問的に補助學として組織されたのは西洋古文書學の影響である。その知識の輸入されるや直ちに我が國に古文書學の組織の開始されるのもその傳統の存し

た爲めである。（伊木壽一氏「日本古文書學」序説參照）之等を見ても明治の新史學の内容は輕々に判斷する事は出來ない。この時代に創立を見た史學會が修史館と帝國大學史學科の人々が合流して成立し史館の總帥重野博士を會長に仰いだ所に當時の歷史學の實相が在つたのである。

今井登志喜教授「西洋史學の本邦史學に與へたる影響」(本邦史學史論叢)參照

江戸時代の封建史學より明治初年の西洋近代史學の輸入に説き及んだ。これで我國近代史學形成史の序説を終へた譯である。斯くて近世初期以來歷史學の地位が儒教の一部門として道徳學・政治學に從屬して發展したものが、漸く一個の學問として獨立するに至つた。それと共にその方法論も著しく組織的なものとなつた。西洋の史學研究法の輸入咀嚼も行はれた。坪井九馬三博士の「史學研究法」は早稻田大學の講義錄として執筆され、尋いで明治三十六年單行本として出版された。

この種の書物としてフリーマンの The methods of Historical Study 1886. ついでベルンハイムの Lehrbuch Historischen Methode. 1893. が出で稍遲れて、ラングロア、セニョーボス共著の Introduction aux études historique. 1898. が出た。坪井博士の研究法はこ

の時代に出たので、「その內容から見てベルンハイムの影響に成つたことは明かである。ベルンハイムを咀嚼消化してよく日本及び東洋の研究に生かさうとする多年の工夫が認められ、研究法の著述として西洋の書物の外に確かに一席を要求し得るものであつた。」（今井教授前揭文）その裡に國史の硏究領域に就いて多くの言及のあることは、この西洋近代史學理論が早くも我學界に消化されて居ることを示すものである。

西洋史學輸入以後の現代に至る史學の進步は著しきものがある。そこで問題はこの近代史學の內容の吟味に移らなければならないが、本書は既に豫定の紙數も盡きて居る。我が近代史學は、先づ政治史より經濟史・社會史・文化史と言ふ樣な種々の傾向を次々と追ひ、歷史學の視野は著しく擴大された。これ等は亦時代々々の社會情勢を反映したものである。又西洋史の硏究と東洋史學の開拓とは東西交涉の史的連絡の道を開いた。そして世界史的見地が日本歷史の上に注入され、國史の理解に客觀性を附與した。斯くて日本歷史は廣く世界情勢の上に近代日本の自己反省として新しく組織されたのである。日本の歷史學は將來愈々新しい道を開拓して進むであらう。我々の持つ歷史學は我々が祖先以來築き來つたものである。日本文化が悠久なる一つの流れであると共に、時に支那大陸の、又時にヨー

ーロッパの文化と交流して新なる方向に向つた樣に、歷史學も支那・ヨーロッパ史學の影響を色々と受けて居る。併しその受入は決して單なる模倣や翻譯ではない。前代から蓄積されたものが次々と傳へられ、新しきものと融合して發展して居る。西洋史學の輸入に當つても前代の史學がその受入れの契機となつて居る。我々の史觀の裡には我々が永い過去より養ひ來つた傳統がその血液の裡に流れて居る。これを史學史の正しき反省によつて識別することが必要なのである。

# 參考文獻

日本史學史關係の文獻は諸雜誌に掲載されたものは頗る多い。これ等は夫々論文索引等によつて檢出されなければならない。又歴史家の傳記等には夫々その史學思想に觸れた文字がある。之等を茲に掲出する事は繁に過ぎるから省略し、左に日本史學史に關する主要な著作を列擧するに止める。

文學に現はれたる我が國民思想の研究　大正五年以降刊　津田左右吉著

日本史學史概說（日本史の研究第二輯所收）　昭和三年稿　三浦周行著

日本史學史　昭和三年刊　清原貞雄著

更訂國史の研究總說　昭和六年刊　黑板勝美著

史學名著解題（日本の部）（現代史學大系第十五卷）　昭和六年刊　松本彦次郎著

日本文化史序說　昭和七年刊　西田直二郎著
明治以後に於ける歷史學の發達　昭和七年刊　歷史教育增刊
國史の編者　昭和九年刊　黑板勝美著・
　岩波講座　日本歷史
日本國史學發達史　昭和十一年刊　川口白浦著
日本史學史　昭和十一年刊　伊豆公夫著
日本に於ける史學理念の展開　昭和十二年刊　松本彥次郎著
　歷史教育講座　第一部
本邦史學史論叢　昭和十四年刊　史學會編

第二編は普通洋學史に於いて取扱はれて居るから、洋學史關係の文獻に據らなければならない。執筆に就いて參考とせるものが頗る多いが、本文中に註記せる以外特に左の書の御蔭を蒙つた。最初に洋學關係の書目を擧げる。就中「新撰洋學年表」は座右を離さなかつた。尙は左に列擧した書目以外內閣文庫水戶彰考館其他の圖書目錄を參照すれば關係文獻は檢出されるであらう。

## 參考文獻

## 參考文獻

新撰洋學年表　昭和二年刊　大槻如電著
鐵研齋輶軒書目　齋藤正謙著
西洋學家譯述書目　嘉永五年序　穂亭主人著
右二書は「文明源流叢書」に收めらる。
嘉永以前西洋輸入品及參考品目録　明治三十九年刊　帝室博物館編
大槻文庫書目　明治四十一年刊　大槻如電編
紅毛譯書目　大槻家稿本　大槻如電編
文明移入に關する古書展覽會目録　大正十四年刊　荒木幸太郎編
日英關係圖書展觀志　大正十一年刊　新村出著
新村出氏「典籍叢談」所収
和蘭及外國關係圖書並物品目録　大正十年刊　杉浦丘園編
日蘭文化展覽會出品目録　昭和十二年刊　日蘭文化協會編
箕作阮甫　大正三年刊　呉秀三著

南蠻廣記　大正十四年刊　新村出著

續南蠻廣記　大正十四年刊　新村出著

　平澤元愷の長崎松前漫遊

　天明時代の海外知識

　蘭書譯局の創設

　伊勢漂民の話

洋學の發展と明治維新　昭和四年刊　吳秀三著

　史學會編「明治維新史研究」所收

蘭學の發達　昭和八年刊　板澤武雄著

近代日本外國關係史　昭和五年刊　田保橋潔著

近世に於ける北方問題の進展　昭和三年刊　末松保和著

前野蘭化　昭和十三年刊　岩崎克己著

日本歷史文庫

日本近代史學史

著者　大久保利謙

昭和十五年十月十二日印刷
昭和十五年十月十六日發行

定價　壹圓五拾錢

東京市神田區美土代町一
發行者　中村德二郎

東京市牛込區鶴卷町四〇五
印刷所　守田印刷所
代表者　守田芳雄

東京市神田區美土代町一
發兌　白揚社書店
振替口座東京二五四〇〇